

---

# 帝國空軍平成戦記

通信参謀

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

帝國空軍平成戦記

### 【Nコード】

N8122J

### 【作者名】

通信参謀

### 【あらすじ】

一九四三年九月、第二次世界大戦は枢軸側陣営の勝利で幕を閉じた。

しかし、大日本帝国空軍主力部隊は、戦いを終え本国に帰還する途中謎の積乱雲に遭遇し、飲み込まれてしまう。

積乱雲を抜けた先にあったのは、第二次世界大戦に敗北した歴史を持つ、二〇一三年の日本だった。

周辺国の軍事圧力の前に苦境に立たされた日本を救うべく、帝国空軍は別世界の未来において、戦いに身を投じる。

## 第一話 戦勝国日本（前書き）

私が書く連載小説の第二弾です。

相も変わらず拙い作品ですが、よろしくお願いします。

## 第一話 戦勝国日本

大日本帝国は、粉う事なき戦勝国である。

サンフランシスコにいる旭日旗を掲げた艦艇は、戦艦一二隻、正規空母に至っては二〇隻を数える。巡洋艦、駆逐艦は無数と言える量である。

そして空には、巨大な建造物が浮いていた。側面に日の丸を描いたそれは、円筒形をしている。白銀に輝き、見る者を圧倒するスケールを持っている。それはいわゆる飛行船である。

厳密に言えば船ではなく艦である。飛行軍艦と呼ばれる、大日本帝国空軍の兵器なのだ。艦首には一六弁の菊が燦然と輝き、白銀の胴体には真紅の日の丸が、誇らしげに描かれている。

艦体を、超々ジュラルミンの装甲で覆う全金属飛行船の群れは、一四隻もいた。

大きさは様々である。旗艦の『瑞穂』は全長三四〇メートル、全幅六二・六メートルの艦体に、四五口径四一センチ連装砲塔四基八門、五〇口径一四センチ単装砲一二門、四四口径七糎半高射砲二〇門、二五ミリ三連装機銃三二基、一三ミリ連装機銃二〇基を装備している。

最大速力二〇ノット、巡航速力七二ノット。同型艦は『豊葦原』。戦艦はこの他に前級の『敷島』型が就役している。

『敷島』型戦艦は全長三二二メートル、全幅六〇メートル、四五口径三五・六センチ連装砲塔四基八門、五〇口径一四センチ単装砲一六門、四四口径七糎半高射砲一六門、二五ミリ三連装機銃二八基、一三ミリ連装機銃一六基、最大速力一六ノット、巡航速力七〇ノット。同型艦は『八島』。

また戦艦より小振りな、巡航艦という艦種もあった。これは『雪岳』型の『雪岳』、『万景』、『春日』、『生駒』の四隻が就役している。

全長二九〇メートル、全幅五三・四メートル、五〇口径一四センチ連装砲六基一二門、二五ミリ三連装機銃一二基、一三ミリ連装機銃六基、最大速力一三三ノット、巡航速力八〇ノット。

そして駆逐艦も一六隻就役している。これは海軍の「水雷艇駆逐艦」ではなく、「航空機駆逐艦」である。駆逐艦一六隻、「宇治」型「宇治」「佐柳」「男木」「家島」「淡路」「佐渡」「生月」「福江」型「福江」「与路」「沖秋目」「答志」「甌」「爪木」「志発」「金華」「能登」。「宇治」型は全長二二メートル、全幅三九・一メートル、七糎半高射砲一二門、二五ミリ三連装機銃六基、一三ミリ連装機銃二〇基、最大速力一四六ノット、巡航速力八七ノット。「福江」型は全長二二〇メートル、全幅四〇・五メートル、七糎半高射砲一二門、一二センチ二八連装噴進砲四基、二五ミリ三連装機銃八基、一三ミリ連装機銃一二基、最大速力一四六ノット、巡航速力八七ノット。

現在サンフランシスコ上空にいるのは、戦艦四隻、巡航艦二隻、駆逐艦八隻で編成された第一艦隊で、その他に空母を中心とした第二艦隊がアメリカ各地で示威行為を行い、補給艦、輸送艦で編成された第三艦隊が、ハワイで待機していた。

一等勅任官として、民間人ながら空軍の指揮を執っていた大賀<sup>たいが</sup>徳は、サンフランシスコの街並みを感じ深げに見つめていた。所々に焼け焦げた廃墟があり、道路に穿たれた巨大なクレーターが「敗戦国アメリカ」という現実を、如実に表していた。

「終わった、か……」

大賀は呟く。

アメリカ上空を航行していても、邀撃機が飛来することも、高射砲の砲弾が炸裂することもない。長い戦いがようやく終わったのだ。「終わりましたね」

大賀の呟きに返す声が背後からかかる。

振り返ると、「瑞穂」艦長の成田<sup>なりた</sup>俊次大佐が、正装に身を包み

立っていた。

「間もなく降伏文書の調印式です。閣下にも準備を願います」  
大賀は頷くと、艦橋を後にした。正装に着替えるために、私室に向かったのだ。

降伏文書調印式は、順調に進んだ。

調印式の会場は戦艦『武蔵』の上甲板である。大統領のヘンリー・アガード・ウォレスは、『武蔵』の巨体にまず驚き、乗り込んだ先で日本軍将兵が皆、正装に身を包んでいることに驚いた。普通、敗戦国の者を迎えるのに、それほどの事をする必要があるのだろうか。ウォレスは周囲を埋め尽くす軍服姿に、圧倒された。カーキ色の詰襟を着た陸軍将校、同じく詰襟だが純白の海軍将校、そして紺碧の色をした背広型の軍服を着た空軍将校。

そんな中で、自分と同じく背広を着た民間人と思しき男が一人、ウォレスの目に留まった。

日本の本国から来た政治家だろうか？

ウォレスは不思議に思いながら、文書に調印した。

同じように日本側全権の将校が、調印する。文書の内容については事前に調整しており、確認する必要はない。

日本時間一九四三年九月二日、現地時間九月一日。ここに、第二次世界大戦は終結した。

## 第一話 戦勝国日本（後書き）

どうも、通信参謀です。

新連載の「帝國空軍平成戦記」です。

舞台は平成ですが、歴史の流れは史実と微妙に違います。

弱異世界の話ですね。

そしてタイムスリップ物です。

第二次世界大戦に勝利した大日本帝国、その空軍が日本が敗戦した歴史を持つ世界に、飛ばされます。

民間人のクセに空軍を束ねる大賀 徳と言う人物が、主人公です。

帝國空軍の主力は飛行軍艦という、全金属飛行船です。

飛行船は第一次世界大戦で、ドイツ帝国が盛んに使用しましたが、敵の邀撃で撃墜され、悪天候により遭難したりと、悲惨な事になりました。

今回はあるきっかけで「現代戦に飛行船を使ったら」と思い、それを煮詰めた訳ですが、果たして上手くいくのやら……。

何はともあれ、この「帝國空軍平成戦記」をよろしくお願いします。

ご意見ご感想、お待ちしておりますよ。

## 第二話 時空転移

飛行艦隊は太平洋上を航行し、日本本土を目指した。

第一艦隊はハワイ沖で、補給艦『武尊』『鷹取』を基幹とする第三艦隊と合流し、補給を済ませた。

『武尊』『鷹取』は同型艦で、全長二八一メートル、全幅五・七五メートル、最大速力一〇〇ノット、巡航速力六〇ノット。二隻は艦隊のために弾薬、燃料を満載しており「空飛ぶ弾火薬庫」の通称で呼ばれている。

第三艦隊には二隻の他に、輸送艦『尾鷲』『渥美』が編入されている。二本の艦体の間に、全長一八六・四メートル、全幅三〇メートルの格納庫を収め、陸上部隊を輸送できるようになっている。全長三〇五メートル、全幅一四二・二六メートル、一〇センチ加農砲二門。一三ミリ連装機銃二基、最大速力九八ノット、巡航速力五八七ノット。

さらに伊豆諸島上空で、第二艦隊と合流した。第二艦隊は『天照』『住吉』の二隻の航空母艦を基幹とし、護衛に巡航艦二隻、駆逐艦八隻が付いている。

『天照』『住吉』は同型艦である。そして輸送艦と同じく双胴で、二本の艦体の間に全長二一四メートル、全幅三五メートルの格納庫が二段あり、その上に全長二七〇メートル、全幅九二メートルの飛行甲板が設置されている。幅の広い飛行甲板を利用した滑走路は三本あり、発着艦が同時に行えた。全長三一〇メートル、全幅一四五・一八メートル、七耗半高射砲八門、二五ミリ三連装機銃八基、一三ミリ連装機銃二〇基、航空機は補用機含め六〇機、最大速力一五七ノット、巡航速力九四・一ノット。

夜が明ける直前、大賀は航海艦橋に降りた。久々に日の出を拝む



ためである。

窓際に立ち日の出を待つ大賀の耳に、双眼鏡を覗く見張り員の声が入った。

「前方に積乱雲！」

右舷から水平線を眺めていた大賀は、壁に掛かった双眼鏡を取り前方を見た。なるほど確かに巨大な入道雲が、前方から艦隊に向かってくる。

「なんだ？ あの雲、動きが妙に早いぞ！」

傍らの航海長が叫ぶ。

確かに、積乱雲は見る見る大きくなる。艦隊と積乱雲が相對している事を差し引いても、その速度は異常である。

「マズいな、回避できるかな？」

「分かりませんが、やってみます」

大賀の問いに、今し方降りてきた成田が答える。その号令で、『瑞穂』の艦体が傾く。

が……。

積乱雲はまるで自らの意志があるかのように、艦隊の行く手を遮ろうと先回りする。

「駄目です！ 吸い込まれます！！」

舵輪を、三人がかりで抑えていた操舵手が弾かれてしまい、舵輪は勝手に回転を始める。乗員の意志を無視し、艦首が積乱雲を指向してしまふ。艦体が揺れ、不気味に軋む。艦隊は積乱雲に吸い寄せられ、飲み込まれた。

その先にあつたのは……、静寂。

暴風雨も雷鳴もなく、ただ白い空間が広がっている。

「な……、何だ？ これは……」

成田が声を漏らす、それに答える者はいない。誰もがこの異常事態に、茫然としている。

大賀は目を見開き正面を見つめた。

「これは、まさか……！！」

双眼鏡を床に落とし、大賀は窓枠に飛び付いた。

「光です！ 雲を抜けます！」

見張り員の叫び声に、大賀は我に返る。

眼前に、青空が広がった。

「『豊葦原』確認！」

「『天照』確認！」

「『敷島』も確認！」

旗艦『瑞穂』では艦隊の集結と、安否の確認を行っていた。

「『淡路』以下、第二駆逐隊も確認。全艦無事です！」

見張り員の報告に、艦橋では安堵の声が漏れた。とりあえず損害は無し。

「あれは何だったのでしょうか」

成田が大賀に聞いた。

だが大賀は窓際から外を見つめるだけだった。

「閣下？」

成田が歩み寄る。そして彼の目に、驚愕の光景が飛び込んだ。

大都会である。水平線に巨大なビルが見えるのだ。それは近づくにつれ、はつきりとしてくる。地形は東京である。

だが、「帝都東京」ではない。見たことも無い高層建築物が、競うように林立しているそこはむしろ、以前砲撃を行ったニューヨークだと云った方が、納得できる。

航法を誤ったのでは無い。雲に見え隠れしながら彼方にそびえるのは、粉う事なき富士山なのだ。

ここは日本である。

だが、それでは眼下の大都会は何なのか。「帝都東京」はどこに行ったというのだろうか。

艦橋の全員が、理解不能な事態に茫然としていた。

「帰ってきた……」ただ一人、大賀は呟いたが、それに気付く者はいなかった。

### 第三話 未来との遭遇

「電探に感あり！」

電探員の声に、大賀と成田は我に返った。

慌ててスクリーンを覗くと、輝点が二つ、凄まじい速度で艦隊に迫っていた。推定では音速を超えている。驚愕すべき速度だろう。

『天照』 『住吉』 に搭載されている、空軍の新鋭戦闘機『紘鸞』がようやく時速七〇〇キロであるから、その速度は段違いである。

そして、彼らは迫りくる機体を目の当たりにして、再び驚愕した。

艦隊に迫る機体には、プロペラが無かった。双垂直翼を備えた、明灰色の噴射推進機である。鋭く尖った機首、直線で構成された高翼配置の主翼、胴体両脇に配置されたエアインテーク。見るからに凜猛な猛禽……荒鷲を連想させる。

二機とすれ違った時、『瑞穂』を凄まじい爆音と衝撃波が襲った。二機は艦隊の周囲を旋回しながら、盛んに威嚇行動を取っている。艦橋で、成田が叫ぶ。

「対空戦闘！」

周りの将兵が、弾かれたように動く。対空戦闘の命令は艦内を駆け巡り、速射砲、機銃、ロサ弾が旋回する。それを見て周囲の僚艦も、慌てて戦闘準備をする。

だが、唐突に新たな命令が下る。

「戦闘中止！」

叫んだのは大賀だった。

撃ち方始めの号令を出そうとしていた成田は、驚いたように大賀を見る。

だが突如、砲声が轟く。発砲したのは巡航艦『春日』だった。

「撃ち方止めえ！ 撃ち方止めえい！」

大賀は艦隊内無線電話に向かい、叫んだ。発砲は、一発だけだっ

た。

「すぐに発光信号だ！ 発砲は誤射と伝える！！」

大賀はさらに命じた。

「閣下！」

詰め寄る成田に大賀は、

「あれをよく見る」

大賀の指先、例の不明機の主翼には、赤い丸……日の丸が描かれていた。

「飛行船！？」

リーダー、何ですありや？

「知るか！ とにかく、領空侵犯だ。警告するぞ！」

了解

百里基地にアラートがかかり、スクランブル待機の保田<sup>やすだ</sup> 直史<sup>ただし</sup>一等空尉と、柊<sup>こうひ</sup> 忠三等空尉は愛機のF-15Jに搭乗し直ちに発進した。

首都東京上空に侵入しつつある目標は、すぐに捕捉された。

飛行船だった。それも、ざっと見て三〇隻。ほとんどが古めかしい砲や機銃で武装している。なかには、二隻の飛行船をつなぎ合わせたような、奇妙なものもいた。その艦首には皇室の、十六弁の菊花の御紋章が燦然と輝き、側面には日の丸もあった。柊が疑問に思うのも無理はない、珍妙な集団であった。

二人はマニュアル通りに警告し、さらに威嚇行動にでた。

リーダー！

柊の声。飛行船に搭載されていた武装が、動き始めたのだ。

そして発砲。一発の砲弾が空中で炸裂し、黒いシミを創る。

「警戒！」

保田は慌てて叫び、基地に連絡を取ろうとした。

直後、中央の飛行船で発光信号が明滅した。

《先ノ砲撃ハ誤射 我ニ敵対ノ意志無シ》

さらに間があり、もう一度発光信号が明滅した。

《最寄りノ飛行場マデ誘導サレタシ》

再び柀の音がする。

リーダー、どうしますか？

保田はとりあえず、百里基地に連絡を取った。

「不明機は飛行船、数およそ三〇、武装している模様。最寄りの飛行場までの誘導を要請している」

数分が経ち、返答が届いた。

了解した。厚木基地まで誘導せよ

「了解、飛行船を厚木基地まで誘導する」

保田は失速寸前まで減速し、飛行船に機体を寄せた。しかし、連絡の手段が無い。相手の無線の周波数も分からず、単座のF-15Jでは発光信号という訳にも行かない。

保田がどうして接触しようかと考えていると、相手も何とかコンタクトを取ろうとしているらしい。新たな発光信号があった。

《我ヲ誘導セシ場合ハ バンクヲサレタシ》

それを見て保田は、即座に機体を振った。

《飛行場マデ誘導サレタシ》

再びの発光信号、艦隊と二機のF-15Jは、厚木基地に向かい転進した。

## 第四話 陸軍人

飛行艦隊は厚木基地で、包囲されていた。まだら模様の服を着た集団に包囲され、着陸したまま動けずにいた。

総指揮官の大賀はしかし、この時点でなんら指示を出していなかった。正確には指示を出さなかった訳ではないが、彼はただ戦闘禁止と現状待機の命令を出し、通信室である電文を発した後、自室に籠もってしまった。

『瑞穂』艦内、司令官私室。

大賀は乱入して来た男と対峙していた。カーキ色をした陸軍将校の軍服を着用し、丸眼鏡を掛けている。そのレンズを通して周囲を睨む眼光は、周りを射竦める迫力がある。そして鍛え上げられた筋骨隆々の身体により、さらに迫力を増している。豪傑と言うに相応しい将校である。

将校は一枚の用箋を机に叩きつけながら、怒鳴った。

「これはどう言う事ですか!？」

その怒鳴り声に、壁に掛けられていた、力強い字で「挺身報国」と描かれた揮毫が、床に落ちる。

大賀は思わず耳を塞いだ。凄まじい声量である。

用箋には以下の事が書かれていた。

《我ニ交戦ノ意志ナシ 交渉ニヨリ武装解除ノ用意アリ 但シ交渉ノ相手ハ貴軍ノ最高指揮官ノミニ限ル》

「そう怒鳴らないでください。辻大佐殿」

大賀は目の前の陸軍大佐、辻つじ 政信まさのぶに言った。

辻は米国降伏に際し、大本営から派遣されていた。そして報告に帰還するために、『瑞穂』に便乗していた。

「しかし、これが怒鳴らずにおられますか!」

辻は再び怒鳴り、大賀を睨む。

その時、ドアがノックされた。大賀の従兵の、かねだ金田 あつひこ厚彦一等兵である。

「閣下、コーヒーをお持ちしました」

それを声を聞き、大賀はすぐに入室を許可した。飲み過ぎて、胃に穴が開いた事があるほどコーヒーが好きなのは、礼を言うつとすぐに飲み始めた。苦味とコクが特徴の、マンデリンである。

「大賀殿！」

その態度に、辻は三度怒鳴る。

「このような物は私は認めませんぞ！！」

大賀はコーヒーを啜りながら答える。

「そう言われても、周りをすっかり包囲されてしまつては、手の打ちようがありません」

「ええい、戦わずして降伏とは消極的も甚だしい！ 連合軍をして「フライング・タイガー」と畏られた戦意は、どこへ行かれたのですか！？」

「しかし、実際に無理は無理です。艦隊の砲は使えませんし、着陸にあたり水素ガスも放出したので、逃げる事も無理です」

「……」

大賀の言葉に辻は押し黙った。

艦隊を包囲している集団は、重戦車まで持ち出している。そしてこちらは装甲があるとは言え、弾薬、燃料など可燃物の塊である。確かに勝ち目は無さそうである。

「むう……、おお、そうだ！ 我らにも重戦車があるではないですか！ 二式重戦車が！！」

辻の言う通り、輸送艦『尾鷲』『渥美』には、確かに重戦車が搭載されている。戦勝記念式典に参加するために、アメリカから運んだ二式重戦車『大型イ号改』である。二隻にはこれが、合計八輛搭載されている。

「これを使えば、勝てるのでは！？」

だが大賀はこの意見を否定した。

「無理です、それはできません。はっきり言いますが、二式重戦車の七五ミリ砲では、あちらの戦車の装甲は破れません。断言します。それに、心配せずともこちらから手を出さない限り、彼らは我々を攻撃しないはず、いや、できないはずです」

あまりに冷静なその言葉に、さすがの辻もたじろいだ。あの集団について、詳しすぎるのだ。

辻は疑問を口にした。

「そこまで言うとは、あの集団について何か知っているのですか？信用できる情報源があるのですか？」

「さて、それはどうでしょう。そうだ、大佐殿もコーヒーを飲みますか？」

大賀は質問に答えず、ごまかした。

謎の飛行船を包囲していたのは、陸上自衛隊である。

正体不明の武装集団に彼らは、駐屯地から戦車や無反動砲を持ちしだしていた。それらが到着する頃には、百里基地からF-15Jの編隊も到着していた。F-15Jは基地上空で旋回し、飛行船が逃走できないようにする。

七四式戦車が配置についた頃、厚木基地に統合幕僚長が乗ったヘリコプターが到着した。突然の統合幕僚長のお出ましに、包囲部隊の隊員は全員が驚いた。

統合幕僚長の野田のだ 誠吉せいきち陸将は、包囲部隊の指揮しんを執る伊原いはら 修しゅう 三三さんさん等陸佐に、質問をする。

「どうだ、動きはあるか？」

「はっ、今の所動きはありません」

伊原の答えに野田は頷く。

電文の内容が本当なら、現状で動きがある訳が無いのだ。そして動きが無いという事は、相手は本当に武装解除する意志があるのだろうか。



「このまま睨み合っていても、仕方あるまい。どれ、私が話し合いに行こう」

野田の言葉に、伊原が驚く。

「幕僚長、それはお止めください！ 武装解除なら自分がします」

「いや、奴らは我々の最高指揮官との交渉以外、認めないそうだ。

どうせ首相はこないだろうし、統合幕僚長が代理なら、認めてくれるかもしれん」

野田は準備をすると、飛行船に向かった。

## 第五話 正体

飛行戦艦『瑞穂』に乗り込んだ野田たち統幕監部の人間を、艦隊の参謀が出迎えた。

参謀は野田たちを作戰室に案内した。『瑞穂』型は旗艦となる事を前提としているため、これらの設備は充実している。

広く取られた作戰室にはすでに、艦隊の幕僚が待つていた。新たに入室した面々は席につき、大賀と野田が向かい合う。

「さて、まずはお互い名乗りましょうか。私は大日本帝国空軍の、大賀 徳と言います。階級はありませんが、一応、一等勅任官として、空軍の指揮を執っています」

大賀が名乗ったため、野田も名乗る。

「自衛隊統合幕僚長の野田 誠吉陸将です。あなた方の武装解除の交渉に来ました」

武装解除という言葉に、大賀は反応した。

「その件ですが、私は最高指揮官との交渉を要求したはずですが、首相はいかがなされましたか？」

「首相は現在多忙につき、代理として私が参りました」

大賀の問いに野田は答えたが、実は嘘である。彼は大賀の要求を、首相に届かないように握り潰していた。

そうとは知らず、大賀は納得した。

「そうですか。それでは……」

だが、辻が大賀の声を遮った。

「ちょっと待てい！ 勝手に話を進めるとは一体何事かあ！！ 説明せんかい！！」

相変わらずの大声である。

「大体、此奴らは何者なのですか！？」

辻は叫びながら野田を指さす。

野田もそれに返す。

「それを言うなら、私もあなた方について説明を求めたい。先ほど大日本帝国空軍と申しましたが、何かの冗談ですか？ 大日本帝国はすでに存在せず、またかつての大日本帝国にも空軍は存在しなかった」

大日本帝国が存在しないと云う言葉に、辻がすかさず怒鳴り返す。「馬鹿を言うな！ 貴様は皇国を愚弄するのか！？」

「本当の事を述べたまでです。ここは日本国であり、大日本帝国ではありません」

野田と辻は口論を始めた。

野田と辻の口論は、果てしなく続くかに思えた。

堪り兼ねた大賀が、発言する。

「双方とも、お待ちいただきたい！」

その声に二人が口論を中断する。

大賀は一拍置き、述べ始めた。

「まずは、状況を確認したいと思います。我々が大日本帝国空軍というのは、事実です。資料があるので、ご覧ください」

大賀は金田一等兵に命じ、空軍に関する資料を持ってこさせた。しばらくして、長机に資料が山と積まれる。

「これをご覧ください、納得できるかと」

野田たち統幕監部の面々は、勧められた資料に目を通し始めた。

野田たちが資料を全て見終わるまで、二時間ほど掛かった。

その間大賀はマンデリンを飲んでいたが、最後の資料を閉じるのを確認し、カップを置いた。

「どうですか、納得できたでしょうか？」

野田は顔を上げ大賀を見据えた。そして答える。

「大日本帝国空軍など、馬鹿馬鹿しい妄言にしか思えません。しかし、悪ふざけのためだけに三〇隻も硬式飛行船を建造し、このような資料を作成する酔狂な者がいるとも思えません。全て確認しまし

たが、どの資料にも矛盾は無く細かい所まで触れています。これは本物と考えてよろしいかと」

「分かっていただけましたか。次に今が西暦何年なのかを、教えていただきたい」

大賀の問いに、野田は即座に答える。

「二〇一三年です。二〇一三年の九月二〇日。あなた方は七〇年ほど、飛んだようですね」

「二〇一三年九月二〇日ですか……。となれば、自衛隊は少しでも戦力が欲しいのでは？」

大賀が突然言い出した。

「身分を保障し、必要な物を調べていただければ、我々が対馬を奪回しますが？」

「なっ!？」

統幕監部側から、驚きの声が拳がった。先ほど、七〇年前からきたと証明されたのが、今度は現在の日本が韓国に対馬を占領されている事を、知っているかのような口ぶりである。

野田は聞いた。

「なぜ一九四三年からきたあなたが、我が国が対馬を占領されている事を、知っているのですか？」

対馬占領は、辻や艦隊幕僚も驚いたが、なぜ大賀がそれを知っているのかも、気になる。

しばらく沈黙していたが、大賀はおもむろに口を開く。

「隠し立ては無理そうですね。正直に話します。実は私は、元々現代の人間なのです」

交渉は一時中断した。

士官食堂では、大賀が艦隊幕僚に囲まれていた。全員が疑念に満ちた目で、彼を見つめている。

先ほど作戦室で、大賀はこう言った。

「私は一八歳の時、二〇一三年から一九二八年まで、八五年の時を

遡りました。以来一五年間、日本の敗戦を防ぎ日本人を少しでも多く救うために、歴史の改変を目指しました。その結果がこの「帝国空軍」であり、飛行艦隊なのです」

皆、改変前の歴史で日本は敗戦した事を知り衝撃を受けたが、さらなる衝撃は自分たちの指揮官が、実は未来人だった事である。

大賀の話を聞き自衛隊が確認した所、確かに一週間ほど前に大賀徳という少年が、行方不明となっていた事が判明した。

士官食堂に、第一艦隊のみならず第二、第三艦隊首脳部も集め、大賀は子細を説明した。

その上で彼は言う。

「私は生まれ育った時代に帰る事ができました。しかしこの時代、この世界の日本は苦境に立たされています。私には故郷が戦火に包まれる事が、我慢できない。そこで勝手な申し出ですが、この日本を守るために、協力していただきたい」

しばらく沈黙が続く。やはり、突然の事態に困惑しているのだ。どうすれば良いのか、判断できないようだ。

しかしやがて、一人の将官が前に進み出た。第二艦隊司令官、田中<sup>なか</sup> 宗一<sup>むねかず</sup>中将である。

「自分は、閣下に従います！ 閣下は我々の日本のために、たった一人で奮闘されました。恩人の頼みを断つては、漢が廃ります！」

続いて、第一艦隊参謀長の井下<sup>いした</sup> 忠義<sup>ただよし</sup>大佐が前に出る。

「田中中将の言う通りです！ 閣下は我々の故郷を救ってくださいました。今度は我々が閣下の故郷を救う番です！」

その後、全員が二人と同じく、大賀に従う事を誓った。

「ありがとうございます」

大賀は力強く頷き、唯一の陸軍大佐を見た。

「辻大佐殿は……」

辻と輸送艦内の陸軍部隊は所属組織が違いため、大賀は命令できない。

だが、辻の考えは空軍側首脳部と同じだった。

「心配はいりません！　そういう事なら日本を救うために自分も一肌脱ぎましよう！　こうなったのも神仏の思し召しです。陸軍は自分が責任を持ってまとめます！」

辻の力強い言葉に、大賀は再び頷く。

平成に飛ばされた日本軍は、一つにまとまった。

## 第六話 現在状況

帝国空軍の出現の翌日、市ヶ谷の駐屯地に、CH-47JA輸送ヘリコプターが到着した。

中から現れたのは、統合幕僚長の野田と統幕監部の面々、一等勅任官の大賀、第二艦隊司令官の田中、第三艦隊司令官の国府田こくふだの法代りよ中将、各艦隊の参謀長、それに陸軍の辻。合計で一二名である。司令部内の一室で、改めて帝国空軍の面々に、この世界の歴史と情勢を説明した。

その歴史は、異世界から飛ばされて来た者には、衝撃だった。

一九四五年の日本の無条件降伏から始まり、中国の共産化、朝鮮戦争、共産主義の拡大と東西冷戦、核軍拡競争、冷戦の終結、ソヴィエト連邦の崩壊、そして共産中国の台頭……。

「何たる事だ！」

最初に叫んだのは、辻だった。

戦後、自分が戦犯として指名手配された事や作家になった事、政治家になった事にも驚いたが、日本、そして世界全体の激動の歴史に比べれば、大した事ではない。

彼が最も衝撃を受けたのは、導師と仰ぐ石原いしわら 莞爾かんじが目指した理想郷、満州国の崩壊と中国の共産化だった。

そして日本の苦境を知り、神仏がこの日本を救うために、自分を遣わしたのだと、勝手に使命感に燃え始めた。

田中もまた、その歴史に衝撃を受けていた。

彼が最も驚いたのは、核兵器だった。一発で都市一つを吹き飛ばし、しかも、放射能という後遺症を残す核兵器と大陸間弾道弾は、これまでの戦争形態を根本から変えてしまう、まさに超兵器である。

田中は聞いた。

「それで、その核弾頭を、日本国は何発保有しているのですか？」

その質問に、野田が答える。

「我が国には、核兵器はありません。核兵器どころか、空母も爆撃機も保有していません。」

「何と！ それではどうして国土を守れるのですか!？」

日本は三方を核保有国に囲まれている。その危険性は軍事の素人でも、容易に理解できる。

「守れる訳がありません。現にロシアに北方領土を占領され、竹島と対馬を韓国に占領されており、奪還もできないのです」

「ですが、それではなぜ核兵器とまで言わずとも、空母や爆撃機を持たないのですか？ なぜ奪還のために努力しないのですか？」

「我々は努力しています！」

野田は叫んだ。その声は憤りで支配されている。

「しかし残念ながら、我が自衛隊は政府から信用されていない！

何より奴らは友好国である中国の顔色を気にして、我々の戦力を削ぐ事ばかりに熱心なのです!!」

日本国と中華人民共和国は、一九七二年の国交正常化以来、友好関係にあった。殊に一九七九年からの改革・開放政策、そして一九九三年の社会主義市場経済導入を経て、実質的な資本主義国家となつてからの二〇年は、経済的な繋がりを深めていた。

そして、それが自衛隊の迷走の始まりだった。

長らく仮想敵国、対象国としてきたソ連が、突然崩壊したのだ。

ほぼ同じ時期に実質的な資本主義国家となつた中国は、友好国である。

自衛隊は当初、新たな対象国を中国としたが、日本政府はそれを禁じた。

「友好国を敵としては、その関係にひびが入る。中国を仮想とは言え敵にするなど、以ての外だ」

政府側はこう言うのだ。

もちろん、対象国とは軍備の基準であつて、必ずしも敵対してい



る必要は無い。

だが結局、自衛隊が選ばされた新たな対象国は、北朝鮮となってしまうた。

さらに追い討ちを掛けたのが、米軍の撤退だった。

冷戦終結後、ソ連が脆くも崩壊したため、アメリカ国内には軍縮の気運が高まり、世界各地から撤退を開始したのだ。在日米軍も二〇世紀中には、完全に撤退してしまった。

北朝鮮を対象国とする自衛隊も規模の縮小を迫られ、日本の国防力は低下の一途を辿った。

そして先月の「対馬占領事件」である。事件とは称しているが、これは実質的な国家間の領土紛争である。

しかもここで自衛隊は惨敗を喫し、ただでさえ貴重な戦力を消耗した。憲法九条の縛りで、自衛隊は先制攻撃も敵策源地攻撃も行えず、海上自衛隊はイージス護衛艦の「こんごう」「ちようかい」、ヘリ搭載護衛艦「ひゅうが」を喪失し、航空自衛隊も、F-4EJ、F-15Jなど二〇機の作戦機を喪失した。陸上自衛隊も七四式戦車八輛、そして、一〇機しか無い攻撃ヘリAH-64Dの半数を失った。

さらに、対馬失陥に対する批判は自衛隊に向けられ、戦力の損失の責任は、半ばごり押しで防衛出動を命じさせた野田に押し付けられた。

日本国内の自称平和主義者は、韓国軍に惨敗した自衛隊を、無駄と言つ。

「結局国土を守れないのなら、自衛隊は無用の長物。いつそ解散させた方が緊張の緩和に繋がる」と。彼らには、憲法九条が惨敗の原因という認識は、まるで無いようだった。

野田は大賀たちを見据えた。

「我々には、あなた方の出現が天佑に思えてなりません。どうか日本のために、我々自衛隊に協力して頂けないでしょうか？」

野田と統幕監部の面々が、揃って頭を下げた。

すでに帝国空軍及び陸軍は、平成日本救援で意見がまとまっている。大賀は即答した。

「頭を上げてください。我々も別の世界とは言え、日本が苦境に立たされているのを、見過ごす事は出来ません。喜んで協力させていただきます」

その答えに野田は頭を上げ、

「ありがとうございます！」  
再び頭を下げた。

## 第七話 企て

帝国陸空軍は元の世界に戻るまで、自衛隊の指揮下に入る事が決定した。統幕監部直属の特設部隊となり、身分と生活は保障された。また、同時に行われたのが、飛行軍艦の改装に関する話し合いだった。主砲はともかく、副砲、高射砲、機銃などはクラシックすぎて使い物にならない。当然、通信設備や電子装備もそれに併せて、更新される運びとなった。改装にはどれだけ早くとも、半年は掛かるだろう。

本来は艦体の素材も取り替えたが、それではほとんど新造と同じであり、費用的にも時間的にも余裕は無かった。

「問題は……」

野田は言う。

「首相がどう動くか、だな」

現在のこの動きは全て、野田とその下の制服組の独断である。帝國空軍が出現した事はともかく、すでに話がここまで進んでいる事を、内閣はもちろん防衛省すら関知していない。一晚過ぎた今も、政府内では睨み合いが続いている事になっている。

捉え方によつては文民統制を逸脱しているとも言えるが、なぜ、野田がこのような暴挙に打って出たのか。

それは現在の内閣に、不信任を抱いているからである。

現在の内閣は周辺国に弱腰な態度を貫き、「対馬占領事件」に際しても具体的な対策は練らなかつた。

この時、日本政府は野田のgori押しで自衛隊を防衛出動させたが、憲法九条の縛りで有効な反撃はできなかつた。

結局、対馬奪回どころか多大な犠牲を出し自衛隊は引き下がり、事件から二ヶ月経つた現在も、対馬は韓国の実行支配下にあった。

政府の姿勢により多くの犠牲を出した上、対馬失陥を非難された自衛隊内には、政府への不信任が募っていた。

現在の政権は中国の顔色を気にし、帝国空軍の編入を認めないと  
思われる。飛行軍艦は長距離攻撃兵器であり、違憲だと言うかもし  
れない。

極力秘密にしたい。

だが、艦隊の改装と維持には予算が必要であり、また、定数の変  
更も必要なため、遅かれ早かれ政府を納得させなければならぬ。

野田たちはその方法を考える必要があった。

日本国内には、不協和音が響いていた。

いついかなる時でも他国の利益を優先する、ある意味芯が通り、  
自己犠牲精神全開の現政権は、国防を司る自衛隊とは相容れない存  
在である。自国、国民への自己犠牲は構わないが、他国に自己犠牲  
精神を発揮しても、必ずしも良い結果になるとは限らない。政府と  
自衛隊は、対立しつつあった。

創設以来、一貫してクーデターを否としていた自衛隊だったが、  
「対馬占領事件」以後それは変わりつつある。政府に信用されず、  
国民に評価されず、半世紀にわたり屈辱的な扱いを受けてきた。「  
対馬占領事件」以後、自衛隊内には今の日本のあり方を疑問視する  
声が、広まりつつあった。

艦隊の自衛隊編入決定の翌日、大賀と辻は野田に呼び出された。

二人が通された部屋には、自衛隊を束ねる四人の幕僚長が顔を揃  
えていた。

「幕僚長たる将」はかつての大将と同等である。その、制服組の  
総指揮官が一堂に会すとは、ただ事では無い。

辻は入室するなり、ただならぬ雰囲気を感じ取った。部屋の内部  
に、黒い空気が漂っているのだ。

「これは一体？」

驚く辻の隣では、やはり大賀が驚いていた。どう考えても、この  
雰囲気は密談のそれである。

「どうやら、何か大事な話があるようですが？」

大賀の問いに、野田が答える。

「そうです。我々のみならず、これからの日本に関わる大事な話です。まずはこちらに」

野田に促され、二人は座った。

それは、まさに密談であった。内容はクーデターである。

国防を真剣に考えない政府。

自衛隊批判に熱心なマスコミ。

そしてそれに踊らされる国民。

自衛隊内には、彼らに対する憤懣が滞留していた。

そしてその急先鋒が、海上幕僚長の原木 信繁海将だった。先の

「対馬占領事件」で、イージス護衛艦二隻、ヘリ搭載護衛艦一隻を含む多くの艦艇と隊員を失った海上自衛隊は、この傾向が顕著であり、多くの部下を失った原木もまた、憤懣やる方無い状態である。

企てを聞き、激怒したのが、辻であった。

「軍人とは常に、道端の小石のようにあるべきです！ たとえ誰からも評価されずとも、黙々と任務の達成を目指さなければならぬのを、国家に逆らうとはどういいう見ですか！？」

負けじと原木も言い返す。

「我が国は岐路に立たされているのだ！！」

航空幕僚長の財部 徳三空将が、それに続く。

「そうだ、我が国は内外に問題を抱えている。国民を護るためには、荒療治が必要だ」

「内憂を絶たずして、外患を滅ぼす事はできない！！」

と陸上幕僚長の高坂 拓巳陸将。

三人と辻は、睨み合った。

大賀は野田に質問した。

「自衛隊は国民を護るためには、クーデターが必要だと考えている

のですか。これは統合幕僚長の命令ですか？」

「そうです。私も残念ながら他に手はないと思います。これは私の命令です」

「そうですか。それでは空軍はこの計画に賛同します」

大賀の言葉に、辻が目を見開き、絞め殺さんばかりの勢いで詰め寄る。

「どついつもりですか！？ この四人は軍の最高指揮官でありながら、村中、磯部がごとき企てをしておるのです！！ それに荷担するとは！？」

「幕僚長たちも考えた末の苦渋の決断でしょう。日本を護るためには、これしか無いと思います。分かってください」

辻はしばらく唸っていた。そして結論を述べる。

「分かりました。自分はこの世界の事情には、あまり詳しくない。

あなた方がそう言うのなら、それに従います。しかし、もしこの決断が間違いだったと分かれば、その時は間違いを正すために、我が陸軍は容赦しません！」

この答えに四人の幕僚長、そして大賀は緊張を解いた。

自衛隊と帝国陸空軍は動き出した。

## 第七話 企て（後書き）

何だか、だいぶ遅れてしまいました。

色々あって執筆時間が取れないです。

おまけに愛用のチエスセットのピースを落として、傷が付いてしまいましたし、何だか憂鬱です。

しかし、何だかんだで頑張るので、よろしく願います。

ご意見ご感想、お待ちしております。

## 第八話 政変

二〇一三年九月二五日、日本国の首都東京は、異常事態に陥っていた。

そうだろう。巨大な戦車が群をなし道路を暴走すれば、普通は異常事態となるだろう。

それは自衛隊の七四式戦車でも九〇式戦車でも、開発が遅れている仮称TK-Xでも無い。

二式重戦車。

異世界の帝国陸軍が持ち込んだ、陸上戦艦である。

幅の広い無限軌道を軋ませ、道路を破壊し、八輦が向かう先は、千代田区永田町の国会議事堂であった。

警官は果敢に制止しようと、戦車に向かうが、警棒ごときで止められる物ではない。そうそう簡単に拳銃を撃つ訳にはいかず、仮に発砲したところで、最大一五〇ミリの装甲板を、破る事はできない。もっとも、この時は正面装甲を七五ミリ、側面装甲を七〇ミリとして重量軽減と速度上昇に努めていたが。どちらにしろ、拳銃で歯が立つ代物ではない。

現在は国会は開かれていないが、そんな事は関係無い。ただ単に、国会議事堂を攻撃したという事実が必要なのだ。

八輦の二式重戦車は、国会議事堂に七五ミリ砲をそれぞれ一発ずつ撃ち込み、撤退した。

野田は高阪とともに、首相官邸にいた。

周囲には普通科隊員がおり、内閣閣僚を拘束している。

「一体、どうなっているのだ!? 自分たちが何をしているのか分かっていいのか!? この人殺しどもめ!」

喚き声など関係無い。

「もちろん分かっていますよ。我々は日本を護るために動いている



のです。それから、我々は人殺しではありませんよ、売国奴の皆さん」

野田は完全にキレていた。口調は丁寧だが、それは敬意からくるものではない。憎き敵の生殺与奪を思うがままにできる事からくる、優越感による物である。

首相は二挺の八九式小銃を突き付けられ、怯えながら聞いた。

「何なんだ一体。君たちの目的は、何なのだ……」

「目的？ 日本を護る事ですよ。分かり切った事を聞かないでください」

ちようどその時、部屋に持ち込まれた携帯無線機を通じ、国会議事堂攻撃に成功した事が知らされた。

「陸軍は国会の攻撃に成功しました」

報告に、野田は頷いた。

「成功したか。さて、首相、仕事です」

「し、仕事？」

「そうです。あなたには、自衛隊の指揮を執っていただく必要があります。あなたは、一応は自衛隊の最高指揮官ですので」

自衛隊は動いた。

国会議事堂が砲撃を受けるとほぼ同時に、全国で一斉に行動を開始し、空港、港湾を封鎖、また、国会議員を保護の名目で拘束した。各省庁も同様で、永田町、霞ヶ関、そして市ヶ谷の防衛省は陸上自衛隊が完全に制圧した。

治安維持の名の下に全国的に移動は制限され、全てにおいて自衛隊の行動が優先された。

「しかし、小隊長、こんな事して良いんですかね？」

「構わないさ、これは首相の命令だ、一応はな。それにもう自衛隊というレギオンは、ルビコン河を渡ってしまったんだぞ？ 引き返す事はできないさ」

防衛省を制圧していた徳田とくだ 新之助しんのすけ二等陸尉は、部下とやり取り

していた。

彼は時代劇好きの父から、名字が徳田で三男だからという理由で新之助と名付けられ、指揮する小隊の部下からは「上様」の愛称で呼ばれている。さすがに今は愛称を使う者はいないが。

「まあ、こんな事になったのも、政府側の態度が悪いと思えば、「成敗」するのも当然かも知れない」

「成敗」は徳田の決め台詞である。

言われた部下は笑いながらも、果たして政府側だけが悪いのだろうか？　と思った。

保田と柊は愛機を駆り、旅客機の誘導をしていた。

二人は百里基地でもトップクラスの技倆を持ち、また、偶然にも名前が同じ「ただし」の二人は、親友同士でもある。

「しかし、本当に大それた事をするな、幕僚長は」

保田の言葉に、柊が応える。

当然でしょう。国家国民を護るためにあらゆる手段を講じるのが、軍事ですから

「しかし、これはやり過ぎじゃあ無いか？」

ですがリーダー、何だかんだ言って、従っているでは無いですか  
「そうだな、結局俺も、これが一番効率が良い方法だと思っているんだよな」

それならもう、進むしか無いでしょう。すでに賽は投げられたのですから

野田はふと思う。賽は投げられた、か……。果たしてこの運命の賽子は、乾と出るのか、それとも坤と出るのか……。

次々と進んでいく事態に、閣僚たちはこの政変が、周到に準備されていた物だと悟った。

「あなた方には今後、内政に専念していただきます。ただし、常に自衛隊が監視しているという事を、忘れないでください。もし我々

に不利に働く事をすれば、あるいは国会議事堂を砲撃したテロリストが、あなた方を標的にするかも知れません」

「わ、分かった。だから、頼む……」

「心配無用です。あなた方には利用価値がある。命までは取りません」

普段偉そうにしている、いざとなったら命乞いか……。

閣僚たちの態度に、隊員たちは軽い侮蔑感を覚えた。

野田は言う。

「さて、状況終了だ。皆さんをご自宅まで、自衛隊が責任を持って「警護」します。テロリストは捕まっていないので」

閣僚たちは従っしか無かった。

## 第九話 自殺予防

国会議事堂への砲撃は、全世界に伝えられた。日本の政情不安をさらけ出してしまったが、しかし事態がことのほか早く収束した事でやがて落ち着きを取り戻した。

だが、永田町や霞ヶ関は相変わらず厳戒態勢で、自衛隊が守っていた。

そして、大きな動きがあった。

テロの三日後、防衛関係費への大幅な補正予算投入が、異例の早さで可決されたのだ。22DDHの予算が正式に認められ、25DDHとして復活。これは『ひゅうが』の代艦である。仮称TKIXの大幅な調達も、認められた。そして、予算の内訳の中には、「飛行艦隊整備費」なる物が含まれていた。

予算が成立するや否や、飛行艦隊は早速改装に取り掛かった。その間、飛行艦隊の将兵は現代戦の知識と技能を徹底的に叩き込まれ、また、それと同時に平成文化に徐々に慣らす事となる。

だが、昭和の人間に平成文化は刺激が強すぎるらしく、わずか半月ほどで皆疲労困憊となってしまうた。

「いや、疲れました。もう何が何だか……」

休憩室で、成田が言った。

大賀は休憩室でテレビ画面を見ながら、持ち込んだ家庭用ゲーム機のコントローラーを、操作していた。

戦略シミュレーションゲームである。テーブル置かれたプラスチックの箱には、「究極戦略 ～日本列島を解放せよ～」と書かれている。

成田の声に、大賀は振り返る。

「お疲れさまです。平成の街はどうでしたか？」

「何とも……、何もかも違い、さっぱりです。疲れました」

「やはりそうですね。私も一五年ぶりの平成世界は、疲れますからね」

「閣下もですか。ところで、そちらは？」

成田はゲームを見ながら聞いた。

「平成の家庭用ゲーム機です。一五年前に、やりかけのままだったので。初給料で買って、また新しくやり直しているのです」

テレビ画面の中では、戦車や自走砲、装甲車、歩兵、攻撃ヘリ、戦闘攻撃機、電子戦機……さまざまな駒が展開し、敵を攻撃すると戦闘場面が映し出される。

「はあ、しかしすごいですね。このような物が日本中の一般家庭にあるなど、想像もしていませんでした」

「この「究極戦略」のシリーズは好きなんですよ。確か、大東亜戦争を題材にした物も、三本ありましたよ。空軍は出てきませんが……。まだ、実家にあるかもしれません」

「そういえば、閣下は実家に顔は見せたのですか？」

成田に聞かれ、大賀は途端に黙り込んだ。

しばらくして口を開く。

「……いまさら、いけないですよ。こちらの世界では、つい一ヶ月前まで一八歳でしたから。もうこちらの家族には会えません。むしろ、昭和に残してきた家族の方に会いたいです」

「そうですか。私も家族と会えないのは辛いです。戦死は覚悟していましたが、これは格が違います。生き別れのような物ですから。」

閣下は一五年間、ずっとこのような心境だったのですか」

「それでもありません、私は五年ほどで諦めましたから。それでも最初は辛かったのですが……、そうだ」

突然、大賀は腰に手をやり、おもむろにワルサーPPを取り出した。技術供与を受けるためにドイツに赴いた際、自決用に購入した物である。

「艦長、自決用の拳銃は回収してください。自殺者が出ては困るので」

空軍将兵は全員が、自決用の拳銃を所持している。

これは捕虜になった際に、拷問や虐待を受ける可能性が陸海軍に比べ、高いためである。

というのも、空軍創設の際、憲法が障害となったのだ。空軍の統帥権の所在が明記されていないため、空軍は国軍では無く天皇の直属部隊、つまり私兵なのだ。であるから、民間人の大賀が指揮官たり得る。

よそ者の大賀が軍事に関わるための苦肉の策でもあるが、今度は国際法が問題となった。空軍将兵は天皇の私兵であるから、国際法上、兵士では無く傭兵なのだ。

傭兵は身分を保障されておらず、拷問、虐待を行っても問題は無い。この問題は二一世紀にもあり、傭兵の中には自決用に銃弾を残しておく者も、少なからずいる。

「分かりました。武器庫の方はどうしますか？」

飛行艦隊の各艦には武器庫があり、白兵戦に備え小銃と軽機関銃が収められている。

「そちらは鍵を管理しておけば、問題無いでしょう。むしろ、ローブや小刀の方が危険です」

これから、ホームシックにかかる者は急増するだろう。その対策は怠れない。

二人は休憩室の壁に貼られた、「自殺予防週間」のポスターを見た。

## 第一〇話 艦上機

一〇月になり、飛行艦隊の本格的な改装が始まった。竣工は艦によって違うが、『瑞穂』型でおよそ半年、二〇一四年四月初旬を予定している。

一番時間がかかるのは、二隻の空母である。ジェット機を運用しようというのだから、兵装や電子装備のみならず、航空艤装も改装の対象となる。飛行甲板の耐熱処理の他、カタパルト、アレスティングワイヤーの交換も行わなくてはならない。

空母の改装だけでなく、艦上機の選定と調達、パイロットの訓練と費用がかさみ、半年での竣工と戦力下は難しい。

また、今回の改装で意外と費用がかかったのが、大量のヘリウムであった。

飛行軍艦は気囊が二重構造になっている。外層に不燃性ガス、内層に水素を満たす事で、安全性と浮力を確保していた。

昭和では外層は、ヘリウムの代わりに窒素を充填していたが、こちらではヘリウムを輸入できるので、外層にそちらを使う。その方が軽いので浮力も増し、速度の上昇も見込む事ができる。

当然だが、ヘリウムは高い。特に近年はアメリカの採掘施設の老朽化から、供給が滞っており、値段は高騰している。

この飛行艦隊改造のために、補正予算を根こそぎ防衛省が持つていったので、財務官は悲鳴を上げていた。

艦上機を選定するために、大賀と田中以下第二艦隊首脳は、アメリカにいた。航空自衛隊からも数人、同伴している。

大賀以外、全員が自衛官の制服を着ている。大賀は防衛省の官僚という位置付けである。

一行はこれから、フランスやロシアまで足を延ばす。

ちなみに空母の艦上機は独自開発も提案されたが、予算、時間の

制約から却下された。

彼らの目の前に鎮座する機体は、ロッキード・マーチン社の艦上戦闘攻撃機F/A-18Eスーパーホーネットである。

「どうですか、スーパーホーネットは」

「何とも言えませんね、乗ってみない限りは」

大賀の問いに『天照』の飛行長、黒江くろえ 保彦やすひこ少佐が答えた。

「フランスのラファールMか、ロシアのSu-33フランカーも、性能的には申し分ないですが」

試験飛行ができれば良いが、今のところはカタログスペックと運用実績で判断するしかない。

ロッキード・マーチン社としては、やはり自社の製品を売りたい。軍縮の煽りで新型空母の建造に待ったがかかった以上、市場開拓は急務である。

そこに降って湧いたような日本の空母保有である。五年以内に空母を保有する事を目指し、すでに計画は始動しているという。

もちろんこれは、飛行艦隊の存在を秘匿するための作り話であるが、そうとは知らないロッキード・マーチン社は、打診を受け、早速日本に接近した。

「日本が本気で空母を建造するのなら、喜んで協力させていただきます。」

同じく打診を受けたノースロップ・グラマン社からも、同様の働きかけがあった。

大賀と名乗る日本国防省の官僚は、二社に条件を提示した。

「空母の取得は五年後を目処としていますが、訓練や飛行実績を積むために、機体は五カ月以内に納品する事を条件とします」

かなり厳しい条件である。

日本の国防省には軍事の素人が多いというのは、どうやら本当らしい。

四〇機もの機体を五カ月以内に納品など、並大抵ではできない。



四〇機といえば、フランス海軍の原子力空母『シャルル・ド・ゴール』の搭載機数に匹敵するのだ。

だが、それは同時に大きなビジネスチャンスでもある。まず四〇機を納品すれば、さらに四〇機、追加で発注するという。それらの補充や修理の度に、売り上げが伸びるのだ。

ロッキード・マーチン社は二つ返事で条件を飲んだ。

ノースロップ・グラマン社は検討したいと言い、保留した。

日本は他国の企業にも、同じように打診していた。

空母の搭載機を一機種に統一したいらしく、フランス、ダッソー社のラファールM、ロシアのSu-33フランカーは強敵である。

ロッキード・マーチン社はいっそ、こちらもそれほど需要が見込めない、F-35ライトニング？を売りたいが、さすがに政府が許可しない。機密もあり、また優先順位から、SDDプログラム参加国を差し置いて日本に輸出するのは、問題があった。

日本が国産ステルス機を諦めている以上、売り込みは可能だと思ふのだが。

大賀はF/A-18Eに、懐疑的だった。戦闘機として、韓国空軍のKF-16、F-15Kに勝てる機体が欲しい。

また、『世宗大王』などのコリア・イージスの存在を考えれば、なるべくステルス性に秀でた機体が必要である。

大賀がロッキード・マーチン社に期待したのはF-35である。だがそちらは売れず、F/A-18Eを販売するという。

F-35は機密保持と優先順位から、輸出できないというのだ。大賀がロッキード・マーチン社に出した結論は、保留である。

実際にはF-35が出てこない時点で、ロッキード・マーチン社には見切りをつけていた。

ただ、話を持ちかけておきながらいきなり断っては悪いので、他社の機体を見た上で判断を下す事にしたのだ。

## 第一〇話 艦上機（後書き）

ひさびさの投稿です。

かれこれ二六日振りでしょうか？

正直な話、この頃は全く小説を書いていなかったのでは……。

さて、作中では飛行艦隊の改装が始まりましたが、それにかかる費用は明らかに補正予算だけでは足りません。

そこは国民と財務省に泣いてもらうしかありませんか。

その行く着く先は赤字国債の乱発で……。

怖い話です。

## 第一一話 問題山積

空母の艦上機は結局、交渉の末にノースロップ・グラマン社のF114Bトムキャットに決定した。

Su133Dフロンカーは運用実績を考えれば、採用は避けたい。ラファールMは性能面で難があった。

財務省の悲鳴をよそに金に糸目をつけない発注を行った結果、ノースロップ・グラマン社は生産順位を変更してまで注文に応じた。そして帰国した大賀を、別の問題が待っていた。

「朝鮮人ですか？」

「そうです。彼らからすれば、子孫と戦う事になります」  
井下が言う。

四五〇〇人余りの飛行艦隊将兵の中にも、朝鮮出身者は含まれていた。一〇〇名ほどである。

彼らは朝鮮民族である。異世界とはいえ、同じ民族の子孫にあたる人々と戦うのは、抵抗があるのではないだろうか。

彼らが日本人としての意識を持っているのか、朝鮮民族としての意識を持っているのか、いまいち分からぬのだ。

大賀は思案の後、結論を出した。

「致し方ありません。朝鮮出身者には、戦いが終わるまで、艦隊を降りていただきます」

ハイテク化された飛行艦隊では省人化が可能なので一〇〇名ぐらい減っても、特に問題はない。

「しかし、よろしいのですか？ 志願制にして、本人の意志で残しても構わないのでは？」

「いや、そうすると、後々しこりを残しかねないですから」

戦いに参加したか否かで、朝鮮出身者同士、争いを起こすかもしれない。いっその後方要員として、基地内に留めた方が良いと判断し

ただ。

問題は多い。

例えば、砲弾と砲身の補給も問題である。駆逐艦は主砲を平成の速射砲に換装するので、補給可能だが、巡航艦以上の主砲はそうもいかない。

『瑞穂』型『敷島』型ともに、主砲は海軍の戦艦のそれを流用している。

巡航艦に関しても、基本的には軽巡『夕張』の主砲塔の図面を流用し、上下を逆さまにしているのだ。

当然、平成では砲身も砲弾も生産されておらず、自衛隊の物とも互換性はない。

新たに開発する事となった。

艦隊が改装中の今はそれほど差し迫っていないが、しかし戦いの規模と期間によっては、艦内の弾火薬庫と第三艦隊の備蓄だけでは足りなくなる恐れもある。

砲身命数を考えれば砲身もまた、再現しなくては安心して戦闘に赴く事も、訓練する事もできない。

資料を元に開発が行われたが、試作品の完成は二〇一四年二月、量産に関しては、これも年度明けの予定となっている。

多くの問題の中で、乗員の教育は急務だった。

何しろ、半年で乗員を現代戦を戦えるように鍛え上げなくてはならないのだ。

帝国空軍の将兵はこれまで、ハイテクや電子機器とは無縁の生活を送ってきた。電子機器に触れたとしても、せいぜい電探か無線機である。

自衛隊では基礎訓練の期間は半年だが、あくまでそれは基礎であり、一人前の自衛官に育て上げるには二年から三年はかかる。

基礎訓練は必要ないにしても、日程は厳しい。

平成の人間と違い、パソコンや情報端末機に慣れていないのなら、まずその扱いからである。

平成出身の大賀にしても、現代戦については素人同然であるから、やはり一から学ばなくてはならない。

四五〇〇人である。訓練には、各基地に分散させる必要があった。飛行艦隊乗員は海上自衛隊で訓練し、搭乗員は特に技術優秀の者を『天照』『住吉』でまず一〇名ずつ選出し、整備兵とともに航空自衛隊で訓練する。

搭乗員については初等操縦課程は必要ないので、いきなり福岡県の芦戸、静岡県浜松に分散し、T-4中等練習機を用いての基本操縦課程を修める事になる。

さらに国土交通省の事業操縦士の資格と、ウイングマークを取得し、ようやく戦闘機操縦課程に行き着く。

僅か半年で、ジェット機のパイロットに仕上げるのだから、当然日程は厳しい物になる。

だが艦上機パイロットとしての本格的な訓練は、艦上機の納品と空母の改装が終わり、F-14Bに機種転換してからである。

年度明けからの反攻には、間に合いそうになかった。

## 第一一話 問題山積（後書き）

久しぶりの投稿ですが、いまいち盛り上がりには欠け内容でしょうか。韓国軍との戦いは、一体いつになるのやら……、といった具合です。

## 第一二話 韓国の動き

日本の自衛隊の動きが活発になりつつあるのは、韓国側も掴んでいた。

これまで消極的だったのが、国会議事堂へのテロ事件以来、目が覚めたように活発化している。

韓国軍は新たな攻勢の準備中だった。

そもそも韓国側は日本との全面戦争をするつもりはなく、対馬からせいぜい北九州沿岸部での、限定戦争を考えていた。

そうすれば倭奴がいくら腑抜けだろうと、さすがに反撃するはず。目的を達するには、それで十分だと判断していたのだ。

だが自衛隊は一度負けた後、北九州の守りを固めるだけで反撃はない。

そこで、さらなる攻勢が必要となったのだ。

チヨン・ヨンチエク合同参謀長は、新たに舞い込んだ情報を、大統領に届けた。

「日本と全面戦争とは、予定外だが？」

大統領のペク・スアンは聞いた。

「不活発だった倭奴が、ようやく動き出したのです。来年四月以降に大反攻、下手をすれば我が国の本土に上陸作戦を行うかも知れません。このままでは、全面戦争もありえます」

「倭奴の動きとは、どのような？」

「艦上機をアメリカから買い漁っています。それから、艦船用のレーザーや速射砲、ミサイル類を大規模に調達しています。一部情報では長距離攻撃兵器保有の可能性もあるとの事です」

「長距離攻撃兵器……、しかしそのような物を、数カ月で戦列化できるのかね？」

「普通に考えれば、無理です。しかし、もし開戦前から秘密裏に開

発を続けていたのなら、可能性はあります」

「だが、それだと妙ではないか。なぜ今になって急に活発になるのだ？」

「おそらく、先月の国会議事堂へのテロ事件のためでしょう」

「と言つと？」

「つまり、あのテロ事件の原因は、今回の我が軍の対馬進出に対し対策を採らない政府に、国内の過激派が行った物だと言われている。これを受けて、ようやく重い腰を上げたのでしよう」

日本との全面戦争など、全くの予定外である。

しかし、さらに『浦項』級コルベットの一隻、『天安』を犠牲にしてまで日本を攻撃する、口実を作ったのだ。ちなみに二〇〇七年には、コンテナ船『カリナ・スター』を護衛艦に衝突させ、それを口実に戦端を開こうとしたが、それは失敗した。

とにかく、ここで足を止める訳にはいかない。

ペクは質問を続けた。

「先程、艦上機と言ったが、自衛隊は空母など持っていないのだから？」

「はい、中古を購入するという話ありませんし、新造するには数年はかかります」

「艦船用の装備を購入しているのが妙だが……」

「やはり、秘密裏に建造を進めていたのでしょうか。それも、購入している艦上機の種類からして、カタパルトを装備した大型空母と思われるわねます」

「しかし、そのような事ができるのか？ 敵情は筒抜けなのだろうか？」

日本国内には、在日韓国人が多数住んでいる。大多数は無関係だが中には韓国の協力者もあり、日本国内の動静は筒抜けなのだ。基準排水量五万トン以下らないと思われる、大型艦を建造しているとすれば、諜報網にかからない訳がない。

しかし、そのような話は聞かなかった。



「どうする？」

「『玄武？』を東京に撃ち込む準備をしましょう。我々が東京を直接打撃できる事を示せば、仮に倭奴が長距離攻撃兵器を持って、迂闊に攻撃できないでしょう」

「大丈夫か？」

「倭奴もそれほど馬鹿ではないでしょう。東京を攻撃される危険を冒してまで、全面戦争をしたいとは思わないかと」

チヨンは言ったが、ペクは不安だった。

日本は第二次世界大戦では国中を焼け野原にされても、原子爆弾を二発も食らうまで、抵抗を続けた。

日本人は残忍な民族だ。勝利のためなら国民の命など、平気で捨てるのではないだろうか。

そもそも日本人は善くも悪しくも、極端から極端に走る性質を持っている。あまり刺激し過ぎると、あるいは自国を焼け野原にしても、韓国を不毛の大地に変えようとするのでは？

「いや、やはり『玄武？』はやめよう。倭奴はイージス艦を東京湾に配備している。我々も『世宗大王』を持っているのだから、抑止力にはなるまい」

ペクが提案する。

「どうせ全面戦争になるのなら、さらなる攻撃で敵の攻勢意図を挫き、降伏を迫るべきだ」

昔から「攻むるは守るなり」ても言う。確かに一理あるが、果たして日本が降伏するだろうか。

本気で攻撃するのなら、なるべく手薄で、なおかつ戦略的に重要な拠点を標的にする必要がある。

チヨンは大統領執務室を辞すと、作戦立案に取りかかった。

## 第一二話 韓国の動き（後書き）

一カ月以上ほったらかし……。

本当はもっと早く更新するはずだったのですが。

さて、ようやく韓国が登場です。

『天安』や『カリナ・スター』の下りは不謹慎かもしれませんがね。

### 第一三話 攻勢の予感

年が明けると、規模が小さな駆逐艦などは、『宇治』型がすでに改装を終え、慣熟航行を行っていた。

改装の内容は通信、レーダーなどの電子装備の交換や追加と、それに伴い簡易CIICの設置、主砲の速射砲への換装、機銃のSAM、CIWS等への換装、そして気囊第一層の不燃性ガス交換である。重量がだいぶ増したが、第一層の不燃性ガスをヘリウムに換えたため、飛行性能に問題はなかった。

そして大賀以下空軍将兵四五〇〇名が、そろそろと靖国神社や明治神宮等を詣でている頃だった。にわかには韓国軍の動きが大きくなり、市ヶ谷は蜂の巣をつついたような大騒ぎとなった。

『独島』級ドック型揚陸艦や『高峻山』級戦車揚陸艦などが、護衛『世宗大王』『忠武公李舜臣』らを伴い、迎日湾の浦項に集結し始めた。それらによって輸送されると思われる、陸軍の師団も集結している。

対馬占領直後から始まった、北九州への偵察も小康状態となり、次期攻勢に近い事を感じさせた。

「やはり、北九州か？」

「はい、敵の規模からして、吉岐を占領し、さらに北九州に上陸する可能性は高いかと」

統合幕僚会議では、韓国軍の目標を掴もうと躍起になっていた。野田が命令を下す。

「西部方面隊は臨戦態勢を、それから……」

別の声がそれを遮った。

「いや、違う！」

叫んだのは辻だった。

「我が軍が北九州を固めているのは、韓国軍も承知しているはずで

す！ 北九州はありません！！」

相変わらず威勢が良い。

「では、韓国軍の上陸地点はどこだと？」

野田の問いに辻は日本地図を睨み、答える。

「若狭湾です！」

「その理由は？」

「敵前上陸は被害が大きい。敵は必ず手薄な地点を衝いてきます。若狭湾の沿岸には原子力発電所も多く、戦略拠点としても十分な価値があります。さらに竹島が敵の掌中にある以上、洋上での捕捉は困難。我々の注意が、北九州に向いているのですから、成功する公算はあります」

なるほど、と野田も応じる。

本州へ上陸する事で、あるいは一挙にこの戦いに決着を着けようというのか。

幕僚の一人が、地図を見ながら言う。

「もしそうなら困ります。悪くすれば東西に分断され、京都、大阪や名古屋が常に脅かされる事になります」

それは困る。若狭湾と伊勢湾の間は、本州がくびれている。自衛隊は兵力で圧倒的に劣る。韓国軍が本腰を入れれば、本州分断というシナリオも、ありえるのだ。

そうなれば誇りを失った今の日本人は、必ず降伏を言い出すだろう。

「だがどうする」

「隠岐諸島にも、レーダーサイトでもがあれば良かったのですが、とにかく洋上で捕捉し撃滅するのみです。哨戒を厳にしてください。今は対人地雷もクラスター爆弾もないのです。海岸に橋頭堡を築かれた時点で、王手です！」

上陸を許せば、間違いなく日本は負ける。

とにかく、北九州において迎撃の準備を整えるのと同時に、海上自衛隊の舞鶴地方隊、航空自衛隊の西部航空方面隊および中部航空

方面隊は、日本海での哨戒をより強くした。

しかし、自衛隊の中には「対馬の次は九州」という考えが、無意識の内に当たり前となっていた。

だが考えてみれば危険を冒してまで、守りを固められた場所を攻めるのは、理にかなっていない。辻の着眼点は悪くなかった。

本当にあの悪名高い参謀なのだろうか。

野田は同席していた大賀に、こっそり聞いた。

「彼は本当に辻 政信なのか？」

「はあ、そうですか……」

辻も、一応は「作戦の神様」と呼ばれた男である。真面な情報と真面な戦力があれば、真面な作戦を立てられる……はずなのだ。

一応、歴史改編の一環として、過剰な精神主義は廃してある。

確かに、いざという時には精神力も大切だが、全てを精神力で片付けるのは、やはり間違っている。物質と精神が調和を見出し、初めて最大の力を発揮できるのだ。

辻が真面なもの、歴史改編の影響だろう。

同日の午後には、第一駆逐隊は拠点を小松に移し、日本海での哨戒任務に就いた。

第一駆逐隊司令、淵東えんどう 信太のぶた大佐は、すっかり様変わりした乗艦の、CICにいた。

小松に移った翌日、一月四日には韓国軍の強襲揚陸艦を伴った艦隊は、迎日湾を出撃した。

日本の監視衛星は、北朝鮮からの攻撃に備えた物であり、韓国の動きを常に捉える事はできない。潜水艦、哨戒機、そして第一駆逐隊が、躍起になって韓国軍艦隊を探していた。

だが、本来第一駆逐隊は実戦に投入できない。練度不足である。操艦はどうにかなるが、兵器の使用は心もとない。この哨戒は慣熟航行でもあるのだ。

いざ接敵した際には護衛艦で学んだスキルを、どこまで活かせる

かに懸かっている。

新たに艦に装備されたFCS-3レーダーが、韓国軍とおぼしき艦隊を捉えたのは、竹島の東方約一二〇キロである。

すでに若狭湾まで半日程度の距離しかない。

「戦闘準備！」

淵東は命令を下した。

たとえ練度不足だろうと、友軍が到着するまでの間、自分たちが食い止めなくては、上陸を許してしまうかもしれない。

帝国空軍の、平成での初めての戦いが始まった。

### 第一三話 攻勢の予感（後書き）

辻参謀大活躍の第一三話でした。

一一話あとがきで「韓国軍との戦いは、一体いつになるのやら……」  
とか言いつつも、一二話で風雲急を告げる状態です。

「攻勢の予感」とか言いつつ、韓国軍は攻勢開始していますし。  
次話でいよいよ戦闘開始します。

## 第一四話 平成の初陣

『世宗大王』のレーダーが、奇妙な飛行物体を発見した。数は一。全長は一〇〇メートルを超えている。

判断しかねている間に、反応は四に増えた。

相手も気づいたか、次第に接近してくる。

「対空戦闘用意」

チャン・クンフン少将はとにかく、集結し編隊を組み始めた飛行物体に対し、対空戦闘を命じた。飛行物体の敵味方識別装置は敵を示しているのだ。

飛行物体はやがて、こちらに向かってきた。航空機にしてはゆっくりしている。

しばらくすると、突如ミサイルが放たれた。

「防空戦闘！」

艦長の命令で、ゴールキーパー、RAMが仰角を取る。

やがて射程圏内に入った。

艦長は命令を下す。

「対空戦闘、撃ち方始め！」

「対空戦闘、撃ち方始め」

復唱があり、RAMのランチャーから、近接SAMが飛び出す。

さらにゴールキーパーが火を噴いた。

敵弾は四発。たとえ『世宗大王』に、ゴールキーパーが一基しかなくとも、二〇隻の駆逐艦、フリゲートが張る濃密な弾幕により、瞬く間に撃墜された。

だが、チャンは違和感を感じた。これまで自衛隊は、こちらが撃たない限り、攻撃してこなかった。

だが、あの飛行物体は、先制攻撃を仕掛けてきた。

これまで戦ってきた敵とは、異質の存在のように思える。

「反撃せよ！」



チャンの指示に、VLSが準備される。

「スタンダード発射！」

ミサイルが飛んで行く。「世宗大王」から発射された数は一二発。敵機の三倍の数を放ったのは、今までと違う敵を警戒したためである。

戦術状況表示板に映された四つの輝点に、別の輝点が一二個向かって行く。

だが、一二個の輝点は目標にたどり着く前に、消滅した。撃墜されたらしい。

「何なんだ、あれは……」

チャンは戦術状況表示板を見て唖然とした。敵は真面目な航空機ではない。

「司令、あれは!？」

艦長が指差したのは、艦外カメラのモニターの一つである。

そこには何か、白く巨大な物が浮いていた。

「何なんだ、あれは……」

チャンは再び呟いた。

帝国空軍の駆逐艦は、93式空対艦誘導弾を一発ずつ装備している。

93式空対艦誘導弾は高性能だが、三〇隻ほどもいる敵艦隊に対し、四発では打撃は与えられないだろう。

淵藤はミサイルを発射すると、接近しての砲戦を命じた。「宇治」型には62口径5インチ速射砲が、八門も搭載されている。砲戦となっても、敵艦上方なら一方的に攻撃できる。

「ASM、全弾撃墜されました」

「構わん、前進を続ける！」

第一駆逐隊は一四六ノットで敵艦隊上空へ進んだ。

「敵艦隊SAM発射！」

「迎撃！」

淵藤の指示に、高性能20ミリ機関砲が、俯角を形成し待ち受け

る。

「迎撃圏内です！」

「撃ち方始め！」

『宇治』型のCIWSは四八基に上る。その内下方を撃てるのは四二基。

曳光弾が四二本の光の筋を作り出し、敵のミサイルを包み込む。

「全弾撃墜に成功！」

淵藤は報告を聞き、さらに命令を下す。

「主砲、砲戦用意、目標敵イージス駆逐艦及び揚陸艦」

5インチ速射砲が俯角を取り、敵艦隊を睨む。

「撃ち方用意、……撃てえ！」

砲声が轟いた。

三秒に一発のペースで、砲弾が放たれる。大量の砲弾が、海面に降り注いだ。

最初に集中攻撃を受けたのは、コリア・イージス『世宗大王』だった。一二八セルの打撃力を誇るコリア・イージスだが、相手が悪かった。『世宗大王』はほぼ直上から、艦橋、そしてVLSを撃ち抜かれた。

一一六発のミサイルを残していたのだ。誘爆し、瞬く間に大破、傾斜し始めた。沈むのも時間の問題だろう。

だが、韓国軍も黙ってはいない。大破した旗艦の仇を討つように、SAMや機関砲を撃ち上げてくる。

機関砲の弾が飛び交う。

激しい銃撃戦となり、その中をSAMが突き進む。

飛行艦隊の駆逐艦も、申し訳程度だが装甲はある。機関砲ぐらいは跳ね返すが、SAMは難しい。

一発のSAMがついに弾幕をかい潜り、『佐柳』に命中した。気嚢を二重構造としていた事が功を奏し、水素に引火する事は避けられたが、火を噴き、高度が下がり始めた。

「『佐柳』大破しました！」

上擦った声に、淵藤は撤退を命じた。

「退け、下がるぞ！」

第一駆逐隊は、傷ついた『佐柳』を庇うように、小松基地を目指した。

結局、韓国軍は『世宗大王』を喪失し、『楊万春』『独島』が中破した他、『忠武公李舜臣』を始め九隻が機関砲、至近弾などにより小破してしまった。

『蔚山』級フリゲート『全南』は、CIWSの機関砲弾多数を受け、装備が大きな損害をだしていた。レーダー、アンテナ、カメラなどを損傷したため、一時的にCICでの戦闘指揮が不能となってしまった。

艦長を務めるキム・シントン大佐は、艦橋に移った。

艦橋は風防ガラスを砕かれていた。真冬の日本海で吹きさらしなのは、堪える。

そしてガラスのなくなった窓から、嫌な物を見てしまった。

艦体が、僅かだが歪んでいる。恐らく、先程の戦闘で急激な運動をしたためだろう。そういえば、一度、真横から大波を受けた。

『蔚山』級はもともと強度が弱く、外洋での運用には難があった。このままでは、重大な問題を生じかねない。三角波にでも遭遇したら、艦体が折れてしまうかもしれない。

真冬の外洋の荒波は、日本の新兵器と結託し、『全南』を海底へ引きずり込もうとしているのだ。

そして、キムを絶望させる報告がもたらされた。

「敵機！」

僚艦が敵機を発見したのだ。数は二五機。

まずい。

キムは顔面蒼白となった。

こちらはすでに、指揮系統をイージス艦もろとも失っている。その上、新兵器との戦いでミサイルを消耗している。そこに二五機の

攻撃機の追い討ちである。

「対空戦闘用意！」

だが指揮系統を分断され、損害を受けた艦隊の放つ対空砲火は、心細い限りである。

数少ないSAMは、ほとんどがECMに惑わされ、見当違いの方向に飛んで行く。

ようやく四機を撃墜したが、それきりだった。

二機が八〇発のASMを発射した。

「機関砲、何としても撃ち落とせ！」

キムは命令するが、『全南』の機関砲は一発も射撃しなかった。

「機関砲、残弾ありません！」

「馬鹿者！なぜ報告しなかった！！！」

もう遅い。今から再装填しても間に合わない。

ミサイルは『全南』を飛び越え、傷ついた『独島』を痛打した。

## 第一四話 平成の初陣（後書き）

戦いは始まりましたが、なんか依怙贖戻……。  
韓国軍は実際ここまで弱くないと思えますが。

## 第一五話 竹島沖海戦

韓国軍艦隊を痛打したのは、第一駆逐隊からの通報で、岩国から飛び立ったP-3CとEP-3だった。

自衛隊は北九州、北陸、どちらにも対応できる位置にある岩国に、P-3Cを集結させていたのだ。

八〇発のミサイルはAMG-84ハーブーン対艦ミサイルと、91式空対艦誘導弾だった。

「だがミサイルの種類などどうでも良い。

守らなくてはいけない揚陸艦が、次々と血祭りに上げられるのを、キムは眺めるしかなかった。

そしてその心中には、海上自衛隊への憧憬があった。韓国にはP-3Cは九機しかない。その高価な機体を、日本は九五機も持っている。こうして二〇機以上をまとめて運用できるのだ。

自分たちは、とんでもない敵と戦っているのかもしれない。目の前で展開しているのはまるで、「日本が本気を出したらこうだ」と見せつけられるような、凄惨な光景だった。

P-3Cが去った後、戦車揚陸艦『高峻峯』、『毘廬峯』、『香炉峯』、『聖人峯』、そしてドック型揚陸艦『独島』は撃沈されていた。『馬羅島』も大破していた。

さらにその後、第二波……と言えるほど豪勢ではないが、P-1固定翼哨戒機が、韓国軍艦隊に攻撃を敢行した。

僅か八機だったが、弾を撃ち尽くし、消耗しきった韓国軍艦隊には十分だった。燃え盛る『馬羅島』に止めを刺し、フリゲート『崔蚩』を撃沈した。

韓国軍艦隊が撃墜したP-1は二機。決して小さい戦果ではないが、被害が大きすぎた。

だが、韓国軍艦隊に迫る脅威は、これだけではなかった。

「海上自衛隊の陸攻が、敵艦隊を攻撃しました」

見えてきた海岸線に安堵した淵藤は、その報告に苦笑した。

「あれは陸攻じゃあないぞ」

あれはもともと、対潜哨戒機なのだ。昭和世界では、攻撃機が対潜哨戒をする事はあつたが、対潜哨戒機が対艦攻撃をする事はなかった。

第一駆逐隊はやがて、小松基地に到着した。消防車などが用意されており、着陸した『佐柳』に向かって行く。

「すでに舞鶴からも海自の部隊が、追い討ちに出撃したそうです。もう心配は無用ですね」

『宇治』艦長が淵藤に言う。

「なら良いが」

応える淵藤は、『佐柳』の方を向いていた。

「緒戦でいきなり一隻大破させてしまつとは……」

この世界では、失つた艦や乗員を補充する事はできないのだ。戦闘の指揮にはより一層の慎重さが、必要だつた。

荒波を乗り越え、ミサイル艇『はやぶさ』は突き進んだ。

基準排水量は、僅かに二〇〇トン。折からの荒波に揉まれ揺れに揺れたが、地方総監部からの情報により、敵艦隊を的確に捉える事に成功した。

艦に搭載されたレーダーは、すでに韓国軍艦隊を捉えている。

93式対艦誘導弾二発を発射した。

あとは『はやぶさ』にやる事はない。ミサイルの行方を見守り、退避するだけである。

やがて、戦果は上がった。

韓国軍艦隊は退却していた。揚陸艦が七隻中六隻沈んでしまったのだ、作戦の継続は不可能である。

『全南』はCICの機能が回復し、キムは艦橋から再びCICに

戻った。

復活したレーダーが、一隻の小型艦とそこから発射された、二発のミサイルを捉えた。自衛隊のミサイル艇だろう。

「防空戦！」

キムの命令に機関砲が動く。機関砲にはすでに、再装填はされている。いつでも射撃できる態勢である。

ミサイルは突入してくる。

「撃てえ！ 撃ち落とせえ！」

機関砲が唸った。曳光弾の筋が伸びていく。

やがて数発の砲弾が命中し、一発が撃墜された。

あと一発。全員が必死の形相で戦術状況表示板を睨む。恐らく、他の僚艦でもそうだろう。

だが、ついに撃墜できなかった。

『全南』を衝撃が襲う。被弾したのだ。警報が鳴り響く。

命中したのは艦中央部。構造物が消え去り、周囲が炎に炙られる。さらに嫌な報告がキムの耳に入った。

「中央部、それと前部に浸水発生しました！」

波浪で痛んだ部分に、被弾の衝撃で一気に亀裂が入ったのだ。

区画閉鎖を行うが、膨大な量の浸水を止められない。ポンプで排水される量より、浸水する量の方が多い。

やむなく、命令を下す。

「総員退艦！」

CICからの命令に、復旧作業を行っていた乗員が、脱出しようと上甲板を目指す。

キムもまた、同じように上甲板を目指した。

艦の外にたどり着いたキムが見たのは、『全南』の艦体が破断する光景だった。

韓国軍艦隊撃退の報に市ヶ谷でも、舞鶴でも、北九州を守る陸自や第二駆逐隊でも、歓声が上がった。



大賀としては、駆逐艦一隻大破は痛い、飛行艦隊が韓国軍に通用した事は、朗報だった。巨費を投じて改装したのだから、役に立たなくては納税者に申し訳が立たない。

「『独島』竹島沖に沈む、か」

大賀は呟いた。やはりあの島は竹島なのだ。断じて独島ではない。この際、帰属をはっきりさせるためにも、対馬同様、日本が奪還する必要がある。いつまでも李承晩に呪縛されるのは、許されないのだ。

後に「竹島沖海戦」と呼ばれるこの戦いで、韓国軍はイージス駆逐艦『世宗大王』を始め、駆逐艦五隻、フリゲート七隻、揚陸艦六隻を喪失した。残った艦艇も程度の違いはあれ、何かしらの損害を受けており、無傷の艦はないという有り様だった。

日本海の制海権はほぼ完全に失われ、以後韓国軍がこの方面で大規模な作戦行動を取る事は、困難となった。

だが、日本も本格的反攻の準備は整っておらず、戦局が膠着状態を脱する事はなかった。

第一五話 竹島沖海戦（後書き）

感想お待ちしておりますので、お気軽にご返信ください。

第一六話 憲法と交戦権（前書き）

久々の首相登場です。

あ、そういえば首相の名前考えてないや。

## 第一六話 憲法と交戦権

韓国軍艦隊が撃退された二日後、一月七日には首相官邸はマスコミで賑わっていた。剣呑な雰囲気が漂っている。

「敵」を撃退したのだから、昔なら拍手喝采なのだろうが、平成は違う。どこからか戦闘詳報が漏洩したか、誰かが周囲に話したのかも知れないが、統合幕僚長直属の部隊が先制攻撃を行った事を、マスコミが大々的に報じたのだ。

日本国憲法では交戦権を認めておらず、自衛隊もまた自衛権、緊急避難法において専守防衛のみを認められている。つまり、敵がこちらに攻撃を加えるまで、敵を撃てないのだ。

これでは現場はたまった物ではない。死んでしまえば反撃など、できないのだ。専守防衛で国を守るなど問題外である。対馬で、イージス・システム搭載艦が三隻も撃沈されたのは、先制攻撃ができなかったからなのだから、専守防衛がどれほど理に合わない事が伺える。

第一駆逐隊司令として、先制攻撃を命じた淵藤が、控え室からその様子を見て、野田に謝った。

「この度、このような騒ぎを起こしてしまい、申し訳ありません。昭和の感覚で戦ってしまっただばかりに」

「いや、構わないよ。君たちは実戦経験者だ。実際に経験を積んだ者が、最善と判断した行動なのだから、謝る事はない。君たちは日本を護ったんだ。むしろ誇りに思って欲しい。それに、我が国が専守防衛などという幻想から脱却する、良い機会だ」

野田はそれから、首相と防衛大臣を見た。

「よろしいですね。あなた方は我々が用意した通りの言葉を、ただ伝えればよろしいのです」

もとより逆らえる訳がない。二人は緊張した表情で頷くしかなか

った。

やがて、記者会見が始まった。官房長官ではなく首相自らが出る事が、事態の重要性を強調している。その場の全員が注目し、大量のフラッシュが焚かれる。

首相は、プロンプターに映された原稿を、読み上げる。まずは型通りの挨拶、そして日本本土への上陸を企図していたと見られる韓国軍の艦隊を、自衛隊が撃退した事を述べ、双方の戦死者に哀悼の意を表する。そして、先制攻撃の有無について。

「自衛隊が韓国軍に対し先制攻撃を行ったのは、事実であります」  
首相の発言に、場がざわめいた。

やがて記者たちが、質問を許される。代表が、質問を始めた。

「韓国軍は実際に本土に上陸した訳ではありません。これを側を通過しただけで攻撃するのは、過剰反応ではないでしょうか？」

事前に予想されていた質問である。すぐにこの質問に対する答えが、プロンプターに映し出された。

「韓国と我が国は、事実上の戦争状態にあります。交戦国の持つ権利、交戦権では、敵国兵力の攻撃、殺傷が認められております。韓国軍への攻撃は、問題ありません」

「事実上の戦争状態と述べられましたが、日本も韓国も宣戦布告をしていませんか？」

「一九〇七年に署名された『開戦に関する条約』では、事前の宣戦布告を必要としましたが、同時に自衛戦争に関しては適用されない、つまり宣戦布告は必要ないとされました。韓国はすでに竹島、対馬において我が国に対し不当な侵略を行っており、宣戦布告の有無に関わらず、我が国は自衛戦争を遂行中です」

「ですが、交戦権は憲法で放棄されたはず。先制攻撃はやはり違憲なのではないでしょうか？」

「確かに交戦権は、憲法九条で放棄した事になっていますが、日本国憲法が適用されるのは、あくまで日本国内の問題です。戦争は外

交手段であり国際問題ですから、これに日本国憲法を適用するのは、不適切かと思われます。国際問題を解決する方法は、国内法ではなく、国際法によります」

記者たちが音声を録音し、メモを取る。

「韓国軍が対馬に上陸した際には、先制攻撃を禁止されていましたが？」

「対馬では専守防衛を厳守した結果、イージス艦三隻を始め、多くの装備、そして人命を失いました。これにより専守防衛では、国民を守る事は不可能と判断し、今回、先制攻撃を許可しました。国防のためにはより柔軟な対応が迫られます」

これまで弱腰だった首相が、このような言葉を発したのは、全くの予想外だった。

その自信満々とも取れる発言内容の裏には、竹島沖海戦で使われたと噂の、新兵器の存在があるらしかった。新兵器が期待通りか、それ以上の威力を発揮したために、戦いに対して自信を持ったらしい。

弱腰のふりをして、新兵器の完成まで時間を稼いだけで、これは予定通りの行動ではないのか。そんな憶測まで囁かれた。

控え室に下がった二人の大臣に、野田は芳いの言葉をかけた。

「お疲れさまです」

読まされた原稿の内容に、首相は汗だくになっていた。汗を拭きながら応える。

「しかし、良いのかね。憲法九条を蔑ろにして」

「憲法九条墨守は主権国家として失格ですよ。あれは一步間違えれば警察の存在さえ認めない、危険思想です。これも日本のためです」

威圧された首相は押し黙り、防衛大臣は「護衛」の自衛官を伴い、首相官邸を後にした。

## 第一六話 憲法と交戦権（後書き）

憲法九条と交戦権に関する、少々強引な解釈でしたが、これは私の持論でもあります。

## 第一七話 新兵器対策会議

韓国軍はまさかの敗北に騒然となった。

イージス駆逐艦『世宗大王』や七隻の揚陸艦を始め、多くの艦艇と将兵を失った。

そしてまことしやかに囁かれる、自衛隊の新兵器の存在。噂の発信源は、生還した艦隊の将兵である。

その新兵器というのは、飛行船らしい。すでに日本海で四隻、九州で四隻の計八隻が確認されている。情報を統合すると、全長は二〇〇メートル以上。機関砲が通用しなかった事や、SAMで撃墜できなかつた事から、ある程度の装甲を有する全金属飛行船らしい。複数の速射砲、機関砲を搭載し、接近戦に威力を発揮する。帰還した艦艇の損傷も、大半がこの新兵器による物だという。

直上からの砲撃が、特に脅威だった。軍艦も船である以上、トップヘビーを嫌う。甲板は昔から手薄になりやすかつたし、そもそも現代の軍艦には、装甲など存在しない。攻撃の主体は誘導弾であり、攻撃を受けた場合は受け止めるのではなく、撃ち落とすのが基本なのだ。直上からVLSを撃ち抜かれてしまうと、防ぎようがない。

飛行船の数は八隻。そのうち一隻を少なくとも大破させたので、現在七隻が戦力発揮可能と思われる。

全金属飛行船は第一次世界大戦の後、アメリカで三隻建造されたが、全て事故で失われ実用化は断念された。

だが、現代の技術なら、十分に実戦に耐え得る物を造れるだろう。しかも自衛隊の飛行船は、強力なエンジンを大量に搭載しているらしく、速度も少なくとも韓国軍艦艇の、四倍以上出るので。

最大級の脅威対象である。

日本本土上陸作戦の失敗と新兵器出現に対し、ペクは軍の首脳を集めた。合同参謀長チヨンの他に、国防部長官口・インチェ、参謀



長会議主席のアン・スントク大将に、各軍の参謀総長も集まった。「このような兵器の出現は由々ゆしき事態です」

まず、チョンが口火を切った。

新兵器は対地、対艦、対空、あらゆる戦闘に対応でき、その上、長距離攻撃ができる。

艦砲射撃は海岸から二〇キロも離れば、脅威はなくなるが、飛行船を使えば内陸部や山間部も含め、あらゆる場所を攻撃できる。

さらに言うと、航空機と違い長時間止まったの攻撃ができる。航空機と艦船の良いところ取りの兵器と言える。

相手は好きなところを攻撃できるのだ。このままでは劣勢に立たされる事になる。

チョンはさらに現在入っている情報を開示した。

「日本国内の協力者に情報収集を命じましたが、すでに少なくとも六隻が就役間近、さらに竣工寸前の物も多数確認できるようです」

「となると、今後は飛行船を潰す方法を研究しなくてはいかな」ペクの言葉に、陸空の参謀総長が提案する。

空軍は邀撃を、陸軍は巡航ミサイルを用いての基地への攻撃を主張した。

主力を失った海軍は蚊帳の外である。海軍の『世宗大王』級イージス駆逐艦も『天龍』巡航ミサイルを搭載しているが、すでに一隻を失っている。残る二隻、『栗谷李珥』『権慄』は温存したいのだ。

議論の末、ペクは空軍案を採用する事とした。

邀撃は防御であり、消極案である。本来、主導権を握るためにも、『玄武?C』を使用すべきかもしれないが、ペクには懸念があったのだ。

懸念とは、民間目標への誤射である。過去の戦争、紛争では巡航ミサイルによる誤射が発生している。

日本は国際法に則り、正々堂々と Fair war を行うと宣言している。そこに韓国が民間目標を誤射すれば、そしてそれが無

差別攻撃と受け止められれば、一挙に韓国を悪とする見方が強くなってしまう。

下手をすれば、国連の介入を招く事になりかねない。現在は国連は傍観しているが、もし介入を許せば、この戦いの目的を達成できなくなってしまう。

何より、韓国が無差別攻撃を行い犠牲者が出れば、日本は自動的に報復の権利を得る。つまり、韓国全土を合法的に無差別攻撃できるのだ。

総力戦原理を適用すれば、国力では日本の方が韓国より上だ。

戦いは全面戦争にエスカレートしつつあるが、あくまで総力戦ではない。総力戦へのエスカレートを防ぐには、より慎重な手段が求められるのだ。

## 第一七話 新兵器対策会議（後書き）

ようやく連載再開です。

しかし、よりによって八月一五日にずれ込んでしまつとは……。

お盆はいろいろ忙しいです。

しかし、自国が負けた日を記念日とするとは、なんだか違和感を感じます。

まあ、私は終戦は九月四日だと思つていますが、国際法的に。

しかし帝國空軍、ダラダラと続きます。

私のイメージでは、現代戦は（非正規戦闘を除いて）もっとスピーディーなはずなんですが。

第一八話 攻勢に向けて（前書き）

相変わらず首相の名前を考えてない。

後々、重要なキャラになる……はずなのですが……。

## 第一八話 攻勢に向けて

二月一日現在、飛行艦隊は、戦力を増強しつつあった。

駆逐艦の他に巡航艦も就役しつつある。

『福江』型駆逐艦は一月中に一応就役し、大破した『佐柳』の修理も進みつつある。『雪岳』型巡航艦も『雪岳』『万景』がなんとか就役。『春日』『生駒』も慣熟訓練が進み、二月後半には就役予定。

『敷島』型及び『瑞穂』型は、三月半ばから四月初旬にかけて就役できる見込みである。

空母『天照』『住吉』は四月中の就役を目指しており、概ね可能と見られているが、艦載機のパイロットが、訓練にどの程度かかるか分からない。

一方、海上自衛隊も、DDH『いせ』と五〇〇〇トン型護衛艦が、間もなく就役する。

陸上自衛隊は、TKIXの増加試作車一八輛が続々とロールアウトし、一部部隊に配備され始めている。四月からは本格的な量産に移る予定である。

もともとTKIXは開発が遅れていたというより、資金不足が原因で量産に移れなかったただけだった。試作も終わり、問題の洗い出しや改善もほぼ終わっていたので、あとは量産ラインに乗せるだけで、14式戦車の完成だった。

それにしても増加試作車一八輛とは、90式戦車より安いとはいえ、大盤振る舞いである。一八輛という数字は、90式戦車の年間調達数に匹敵するのだから。

だがそれも、資金不足が理由だったのだから、調達しようと思えば、わりと数を揃えるのは、難しい事ではなかった。

自衛隊が抱える問題は、隊員数だった。すでに即応予備自衛官は

もちろん、予備自衛官も続々と召集され、さらに各地の教育連隊及び教育大隊では、予備自衛官補の訓練日程を繰り上げ、早急な戦力化を図っていた。

予備自衛官補ははっきり言って、訓練日数を考えれば戦力外なのだが、それらも召集せざるを得ないのが、自衛隊なのだ。

平穏だった。

大打撃を受けた韓国海軍は、艦隊保全に走って不活発になり、空軍も散発的な威力偵察を行うのみ。陸軍も大規模な渡洋作戦は困難と見たか、鳴りを潜めている。

大賀は巡航ミサイルによる攻撃を懸念したが、今のところ、その兆候はない。

しかしだからと言って安心はできない。省人化で予備に回った乗員の訓練と、哨戒活動も兼ね、なるべく飛行艦隊を遊弋させていた。何はともあれ、お陰で飛行艦隊の戦力を整える事ができた。

安全保障会議が開かれた。会議と言っても、実際には自衛隊側が一方的に現状と今後の方針を提示し、閣僚が従うだけであるが。

安全保障会議を構成する閣僚　首相、防衛相、外務相、国土交通相、経済産業相、国家公安委員長　はずで揃っている。

統合幕僚長の野田もいる。あと一人で、全員が揃う。

会議開始時刻の五分前、その男が入ってきた。

首相が、忌々しげに思う。この戦いにおける特異点的存在、一等勅任官を名乗り、突如三〇隻もの武装した飛行船を率いて現れた、大賀という男である。以前、記者会見で読まれた原稿も、この男が起草したものだという。

思えばこいつが現れてから、おかしくなったのだ。おとなしく本土に籠もっていれば、竹島沖の海戦もなかったし、巡航ミサイルに怯える事も、なかったはずなのだ。

そんな事を考えていると知ってか知らずか、自分の席に着いた大

賀は、首相を一瞥した。

首相はとつさに視線をそらす。

「時間です」

大賀に言われて時計を見ると、確かに会議の開始時刻だった。

安全保障会議の議長は首相だ。

「ただ今より、安全保障会議を開始します」

首相は形式的に会議の開始を伝え、いつも通り発言権を野田に渡した。

「それでは、我々の今後採るべき方針ですが」

野田は反攻作戦について、説明した。

現状、主導権は日韓どちらにもない。いや、巡航ミサイルが日本の大半を射程に収めている点で、韓国側にあるかもしれない。

その主導権を奪うには、やはり早い段階で反攻に打って出るのが手っ取り早い。

そこで鍵になるのが、帝国空軍の輸送艦だ。

帝国空軍の『尾鷲』型輸送艦は一隻で、二式重戦車『大型イ号改』六輦と歩兵一個大隊を、まとめて運べる輸送能力を誇る。恐ろしい事に、増加試作車が生産されている14式戦車の寸法と重量なら、一三輦を一度に運べてしまうのだ。超『おおすみ』型輸送艦が二隻、新たに手に入つたようなものだ。

しかも、『おおすみ』型と違い、平地と航空優勢がある場所なら、どこにでも運べてしまう。

その上、速い。

三月攻勢。自衛隊の示した方針である。

『尾鷲』『渥美』の改装は、不燃性ガスの詰め替えと電子装備の交換だけだったので、実はどの艦よりも早く改装を終え、就役している。

攻勢は二方面から行う。一つは日本海側、竹島、鬱陵島である。

もう一つは九州側、対馬奪回がメインになる。

具体的な作戦は今後煮詰めるが、基本的な作戦基調は、速度で圧倒する事にある。  
作戦まで、あと一カ月。



## 第一九話 大反攻作戦始動！

韓国軍は、一カ月という時間を浪費した。無為に過ごしていた訳ではないが、何しろ、動けない。

上陸作戦に失敗し多くの揚陸艦を失ったが、一応、輸送艦は残っている。渡洋能力はまだ持っているのだ。

だが、海軍が多くの主力艦を失い、戦意を半ば喪失していた。海軍は来るべき艦隊決戦に向け、戦力を温存していた。

自衛隊は絶対に対馬奪回に向け、動く。

あるいは、独島（竹島）かもしれない。一応、領有を主張しているので、こちらを取っても面目は立つし、対馬よりはるかに容易に占領できる。韓国軍は現時点で、守備兵力を置いていないのだ。

どちらにせよ攻勢に出る場合、航空優勢と制海権の確保は、どう考えても必要になる。

航空決戦、艦隊決戦に勝利すべく小競り合いを起こして戦力を失いたくないなかつたのだ。

はたして自衛隊は、動いた。

三月一日早朝、膠着状態の間に、津軽海峡を越え、舞鶴に回航していた輸送艦『おおすみ』によって、一個普通科小隊が運ばれ、日章旗を掲げた。抵抗はない。

一月に行われた海戦の後、韓国はこの島から警備隊、守備隊の類いを撤収させ、鬱陵島を固めていた。竹島は小さな島で、守りに適さないし、もはや戦略的価値もない。そもそも竹島に固執して守りを固めても、背後の鬱陵島を占領されれば生殺しになってしまう。

ペクは主に政治的理由から竹島放棄に反対したが、戦略的に価値のない戦いで戦死者をだせば、国民が納得しないと説得され、承諾した。今は一時的に日本に譲っても、戦局を挽回できればいずれ取り戻せる。

自衛隊の側も敵がない事は承諾しており、上陸した部隊には従軍記者までおり、日章旗が翻る瞬間を生中継するという、政治的パフォーマンスとも取れる演出が行われた。

韓国軍はこれに対し、F-15Kスラムイーグルを一個小隊四機差し向け、形だけの抵抗を行ったが、そこに立ちはだかったのは自衛隊の新兵器、例の飛行船だった。それも一〇隻。

ハリネズミのごとき対空兵装で、たちまち二機を撃墜してしまっただ。

F-15KのAAMは、全てCIWSによって撃墜された。

残った二機のF-15Kは、上陸部隊に一弾も放つ事なく引き返した。

だが、自衛隊の攻勢は竹島に限らなかった。

鬱陵島上空に姿を現したのは、一一隻の飛行船だった。二隻の『尾鷲』型輸送艦と、巡航艦『雪岳』、『万景』 駆逐艦『宇治』、『男木』、『家島』、『福江』、『与路』、『沖秋目』、『答志』である。

鬱陵島には歩兵二個大隊、戦車、砲兵各一個中隊が展開していたが、しかしそれは九隻の巡航艦、駆逐艦の艦砲射撃で粉碎された。

『尾鷲』、『渥美』が降下し、74式戦車を吐き出した。四四トンの試製14式戦車を一度に一三輛運べるという事は、三八トンの74式戦車なら、一隻で一五輛運べてしまう。

今回の輸送物件は二隻で74式戦車、81式短距離地对空誘導弾、03式中距離地对空誘導弾を、各一個中隊。同時に、隠岐島後を経由したC-1中型輸送機が九機飛来し、空挺隊一個大隊を降下させた。部隊の行動を秒単位で統制できるのは自衛隊の自慢であり、この程度の連携は、大した問題にならなかった。

僅かに艦砲射撃を生き延びた韓国軍守備隊は、すぐに駆逐されるだろう。

次々に吐き出される74式戦車を眺め、大賀は勝利を確信した。

『雪岳』以下の巡航艦と駆逐艦の九隻は、第一艦隊、つまり大賀の直属なのだ。アメリカ本土への最後の攻撃にあたり、無理を言っ  
て艦隊司令とさせてもらったのだが、現在も艦隊司令である以上、  
指揮を執るべきだろう。

効果地点に展開した中SAMは、早くも陣地を構築し始め、短S  
AMは74式戦車に付き従い、前線に向かっていく。

あと数分もすれば、防空も必要なくなるだろう。

攻勢作戦は、まだ終わっていない。次の戦場に向かうべく、大賀  
は指示を出した。

「我が艦隊はこれより既定の方針に従い、転進……」

「敵機接近！」

大賀の声を、電探員が遮った。

「迎撃します！」

かいづか ちかし  
貝塚 史大佐が言った。

「仕方ありません。ただし作戦のスケジュールがあります。一分で  
片付けてもらいます」

帝国空軍と韓国空軍の戦いが始まるうとしている時、九州福岡県  
の糸島半島に、三三輛の車輛が並んでいた。

一見、トラックにも見える。

だが、迷彩塗装を施され、トラックの荷台に当たる部分には、六  
本の筒が乗せられていた。

やがて、一九二本ある筒は仰角をつけ始めた。

## 第一九話 大反攻作戦始動！（後書き）

さて、いよいよ反攻作戦が始まりました！

このパートを書いていて思ったのが、「飛行軍艦の戦闘力、反則だろ！」です。

まあ、某戦術シミュレーションゲームに出てくる自由都市国家連邦のレーザー戦艦よりはマシですが（このネタ分かるかな？ けっこうマニアックなゲームですし、私の世代では知らない人が多いですが）。

それではご意見ご感想お待ちしております。

## 第二〇話 東水道の惨禍

自衛隊の攻勢に、韓国軍は対応できなかった。

まず、三月一日午前六時時点で、竹島に陸上自衛隊が上陸した。韓国空軍は爆装したF-15K四機を差し向けたが、半数が撃墜され、攻撃は失敗した。

さらに午前六時五分、鬱陵島上空に一一隻の飛行船と九機の輸送機が現れ、空挺部隊を降下させた。輸送用と思われる大型飛行船二隻に、戦車などの重装備を乗せ、戦闘用飛行船の援護の下で全島を制圧した。こちらにはKF-16を一個中隊一六機差し向けたが、飛行船九隻と早くも展開した地対空誘導弾部隊に迎撃され、五機を撃墜された。

午前六時五〇分、糸島半島から88式地対艦誘導弾が対馬に向け、一九二発放たれた。

正確には地対地誘導弾と言うべきだろう。この攻撃に使用された誘導弾はプログラムを修正され、即席の地対地誘導弾となっていたのだ。

射程一五〇キロのこのミサイルは、糸島半島からなら、対馬全域を射程に収められる。

その攻撃直後、韓国陸軍占領部隊が混乱している隙に、再び輸送用飛行船二隻が姿を現し、一八輛の新型戦車を中心とする部隊を厳原付近に降下させた。

韓国軍がこの攻勢に有効に対処できなかったのは、二つの理由がある。

一つは、攻勢が二カ所で行われた事。自衛隊は戦力が乏しく、攻勢正面を絞り込むはずだという予測がなされていた。舞鶴にいた『おおすみ』は、果たして陽動か本命か、判断がつかなかった。

二つ目に、その常軌を逸した輸送手段である。戦闘型飛行船の他

に、双胴の大型飛行船も存在を確認していたが、その使用目的は、分からなかった。

鬱陵島や対馬の近辺には潜水艦を張り付かせていたが、まさか空から主力戦車付きで部隊を運ぶとは、予想できなかった。

日本には空挺戦車などないし、あつたとしても性質上、軽戦車にしかなりえない。性能はたかが知れている。空挺作戦の可能性は低いと見ていたのだ。

もっとも、軍事は可能性ではなく公算で考えるべきだから、この判断は間違いだったのだが。

二個地对艦ミサイル連隊による第一波攻撃は、目眩ましの意味合いが大きかった。民間への誤射を恐れた事もあり、多くは山林や海岸に撃ち込まれた。

その隙に接近した『尾鷲』『渥美』は、試製14式戦車一八輛、普通科二個大隊を降下させると、上空から敵情を知らせ、攻撃地点を指示した。

すでに再装填された第二波の対地攻撃用誘導弾は、情報に従い、ただちにこれを攻撃した。第二波攻撃用に、各地の地对艦ミサイル連隊から集められた誘導弾は、対地攻撃用一九二発。第三波は対艦攻撃用で、計三八四発。

韓国陸軍は歩兵一個連隊を基幹とする、一個旅団戦闘団を配置していたが、この攻撃で大打撃を受けた。そのため、万関橋以南を放棄し、浅茅湾以北に退いた。万関橋は爆破された。

対馬市奪回後、『尾鷲』『渥美』は再び厳原に着陸し、『おおすみ』型輸送艦『くにさき』、『ゆら』型輸送艦『ゆら』、『のと』、『一号輸送艇の輸送艇一号、輸送艇二号が対馬港に入港した。『尾鷲』『渥美』『くにさき』には普通科一個連隊、偵察一個中隊、74式戦車、99式一五五ミリ自走榴弾砲、FH70一五五ミリ榴弾砲各一個中隊を基幹とする増援が、そして『ゆら』型輸送艦、一号輸送

艇は、全て空荷だった。

およそ半年前、韓国軍が対馬を占領した時、島民の中に避難が間に合わず、取り残された人々がいた。まさか戦いの巻き添えにする訳にも行かず、彼らを本土に避難させなければならぬ。

だが、これが悲劇を生んだ。

『ゆら』の『と』輸送艇一号、輸送艇二号の四隻は、民間人を目一杯詰め込み、対馬港を出港した。四隻で一度に運べる人数は二八〇人。居住性を無視して詰め込めば、三二〇人は載せられる。

だが、東水道を航行中、韓国海軍潜水艦『安重根』に遭遇した。接近を察知した護衛の『あけぼの』『ありあけ』が、アスロツクを発射する。

同時に、民間人を乗せた四隻も回避運動を開始した。一二ノットの鈍速がもどかしい。

敵に発見されたためここで、当初は博多に入港する予定だったが、急遽吉岐を目指す事になった。

だが、敵は待つてくれない。『安重根』の他に、この海域に展開してあた『鄭地』もやってきた。

『あけぼの』『ありあけ』のアスロツクが『安重根』を射抜いた。撃沈を示す水柱が上がり、突然戦闘に巻き込まれた人々が、安堵する。

しかし、その間隙を衝いて、民間人が乗っているとは知らない『鄭地』が雷撃を敢行した。

四本の五三三ミリ魚雷が、『ゆら』と輸送艇二号を襲った。魚雷を二本ずつ受けた二隻は、巨大な水柱を上げ、轟沈した。

『鄭地』は続けて残る四本の魚雷を放とうとしたが、その頭上に『あけぼの』『ありあけ』がアスロツクを再び放ち、実行できなかった。

戦闘が終わった時、『ゆら』、輸送艇二号の僅かな生存者が波間に漂っていた。

その頃には『くにさき』は揚陸作業を終え、日韓の旅団戦闘団が、浅茅湾を挟んで対峙する事になった。

実際には、88式地对艦誘導弾の攻撃のため、韓国軍は旅団戦闘団と言えるほどの戦力はなかったのだが。



## 第二〇話 東水道の惨禍（後書き）

さて韓国を悪にするため、民間人から犠牲者を出してみました。

まあ、『ゆら』と輸送艇二号は民間船ではありませんし、ほぼ不可抗力なのですが。

潜水艦の『安重根』は名前が気に食わないので、あっさり退場していただきました。  
完全に私情です。

## 第二一話 対馬海峡航空決戦

不意を突かれた韓国軍だったが、午前七時三〇分頃には反撃に移った。

空軍は主力となるF - 15 Kの可動率が七割に満たず、KF - 16の可動率は八割だったが、対馬南部を奪回された事に対し、全力出撃を命じた。

一方、築城と新田原からも、集結していた自衛隊機が相次いで出撃し、対馬上空の航空優勢を確保すべく、死闘を開始した。

航空自衛隊の戦力はF - 15 J / D J合計一二〇機、F - 2 A / B合計三六機、そしてF - 4 E J改六八機。

一方の韓国空軍の参加戦力は、F - 15 K三五機、KF - 16 C / D合計一二七機、F - 5 E / Fタイガー？合計一三〇機。

ともに米国のF系列戦闘機で、航空自衛隊二二四機、韓国空軍二九二機。

韓国空軍はほぼ全力出撃だった。そして数の優勢と、半年前の勝利もあり、韓国空軍のパイロットは航空自衛隊に対し、最初から奮めてかかっていた。特にF - 4 E J改だ。

なるほど、本家F - 4は半世紀以上も前の機体である。それを言ったらF - 15も四〇年以上も前の機体だが、F - 4系統はそれより古い。

実際、自衛隊でも、予算不足でF - Xの導入が遅れるという事が必要になれば、退役していたはずの旧式機だ。韓国空軍でも、F - 15 Kに置き換えられている。

「ヤロウ、なめんじゃねえ！ 行くぞ栗原！」

端から見ても嘗めきつていると分かる韓国空軍機の動きに、神田鉄雄二等空尉が叫んだ。

その声に、後席の栗原広美二等空尉が応える。

「おい、あんま無茶するな！」

とは言うが、栗原もファントムライダーの端くれである。愛機を馬鹿にされ、黙っている訳には行かない。

二人は航空自衛隊でもきつての実力の持ち主だ。嘗めてかかった韓国空軍のF-15Kは、一瞬で撃墜されてしまった。

実はF-4EJ改自体も「世界最強のファントム」と言われる性能を持っており、第一線級の能力を保持しているのだ。

戦場全体を見回しても、全般的に自衛隊優勢だった。

システム化された現代の空戦では、AWACSの性能が物を言う。その点、航空自衛隊の運用するE-767は、韓国空軍のE-737と比べ、あらゆる点で勝っている。

一機あたりの調達コストが五五〇億円を超える、世界一高い軍用機だが、日本にはこれが四機ある。と言うより、世界中で日本の四機しか存在しない。

導入された当時はまだ左翼政権成立前であり、当時の大蔵省が、極端過ぎる対米貿易黒字の是正を図った事もあり、予定通り四機が導入された。

今回の戦いには、それを惜しげもなく投入していた。

韓国空軍も三年前に導入されたAWACSのE-737を投入していたが、使いこなしているとは言えないのが、実情だ。

敵味方五〇〇機以上が入り乱れる大乱戦で、的確に味方を管制できる事が、日本側の大きなアドバンテージとなり、時間とともに数の劣勢を押し返していった。

午前七時五〇分頃、ついに釜山に集結していた『栗谷李珥』『権慄』以下、韓国海軍主力の残存部隊が、出撃した。

これに対し、海上自衛隊も艦隊決戦を挑む腹積もりで、佐世保に集結させておいた部隊を展開した。予算取得の遅れで就役がずれ込んだDDH『いせ』を旗艦に、イージス護衛艦『あたご』『あしが

ら』『きりしま』『みょうこう』を中心に全国から主力を集めた、通称第一艦隊が、出撃した。護衛艦二八隻を数える、実質上の主力艦隊である。

日韓七隻のイージス艦が、五〇〇機が入り乱れる航空決戦に加入し、航空優勢を巡る戦闘はさらに熾烈な物となった。

艦隊の攻撃で、航空自衛隊は二九機、韓国空軍は六三機を一度に失った。戦場は混沌としており、航空自衛隊がやや押し気味ながらも決め手がない。

久保と柁もまた、愛機のF-15Jを操り、戦場を駆けずり回った。

すでに二人とも二機ずつ落としたが、敵機は無限にいるようにも思えた。

『栗谷李珥』『権慄』らの攻撃をかわした二人は、新たな敵機を追い求めた。

航空自衛隊優勢とは言え、いまだに数では韓国空軍の方が多い。搭載するバルカン砲もAAMも撃ち尽くした機が、ちらほら出始めた。

二人はまだ二〇ミリバルカン砲を残していたが、いざとなったら不安だ。一度どこかに降り、補給したい。

一カ月の準備期間で、西日本各地の地方空港に燃料や弾薬を集積し、迅速に補給できるようにしていたが、実際には韓国空軍がそれを許してくれない。

このままでは数で押し切られ、対馬上空の航空優勢を、韓国空軍に譲ってしまう。そうなれば、作戦は失敗だ。

パイロット達の間、危機感が募る。

その時、頼りになる戦力が、一九隻の巨大な飛行船が戦場に姿を見せた。

「帝国空軍だ！ 飛行艦隊だ！」

航空自衛隊のパイロット達が、歓声を挙げる。

補給を終えた飛行艦隊が、対馬海峡に駆けつけたのだ。

飛行艦隊一九隻の戦闘は、圧巻だった。特に駆逐艦の近接戦闘だ。ミサイルを撃ち尽くした韓国空軍機の中には、バルカン砲を頼みに近接戦闘を仕掛ける機がいたが、ハリネズミのように搭載した速射砲やC I W S が、それらを全てなぎ払った。

ミサイルも同様だ。近寄ればたちまち火線に囲まれ、撃ち落とされてしまう。F - 15 K が搭載するA I M - 7 スパローは、撃ちっぱなしではなく、母機が命中まで誘導しなくてはならないので、下手をすれば母機まで蜂の巣だった。航空機駆逐艦の本領発揮といったところだ。

さらにその隙に補給を終えた航空自衛隊の主力も、再び戦闘に参加し始めた。

その時には、海峡の航空優勢は韓国空軍には、なくなっていた。

この航空決戦での韓国空軍の損害は、F - 15 K 一九機、K F - 16 C / D 五七機、F - 5 E / F 六六機の、合計一四二機に及んだ。航空自衛隊の損害は、F - 15 J / D J が二〇機、F - 2 A / B が一三機、F - 4 E J 改が三四機に及び、またA W A C S のE - 7 67一機を失い、計六八機だった。

だが、まだ戦いは終わっていない。航空決戦が終わった対馬海峡では、日韓の艦隊決戦が始まるうとしていた。

## 第二一話 対馬海峡航空決戦（後書き）

いやあ、我ながら航空決戦ネタ好きだなあ。

他の作品でも台湾で中国軍相手に五七〇対一二〇〇の航空決戦やらかしたんですよ（笑）

二人のファントムライダーの名前は……、ふざけすぎました。

もし問題があったらすぐに名前を訂正します。

ただ、ファントムと言つと、どうしても真つ先にあの漫画が頭に浮かぶんですよ。

私の世代であの漫画を知ってるのも、どうかと思いますが。

しかし、実際、いくら他に機体がないとは言え、すでに寿命を迎えているF-4EJ改を使うのは、だいぶ無理がありましたかね……。

## 第二二話 対馬海峡艦隊決戦

韓国海軍は、航空優勢を失いながらも、イージス駆逐艦『栗谷李珥』『権慄』の絶対防御盾を頼みに、午前八時、主力艦隊を対馬海峡に進出させた。

『世宗大王』級駆逐艦『栗谷李珥』『権慄』  
『広開土大王』級駆逐艦『広開土大王』『乙支文徳』  
『忠武公李舜臣』級駆逐艦『文武大王』『大柞栄』『王健』  
『蔚山』級フリゲート『忠南』『馬山』『慶北』『濟州』『全州』  
『群山』級フリゲート『群山』『水源』『光陽』  
『東海』級コルベット『東海』『水源』『江陵』『安養』  
の一九隻である。

指揮官は、オン・ソンニ中将。

竹島沖海戦（韓国側呼称「東海海戦」）で駆逐艦、フリゲート合わせて一二隻を失ったため、これが虎の子の戦力だ。

そしてこの艦隊を失えば、残るは小型の哨戒艇やミサイル艇がほとんどで、二三隻の『浦項』級コルベットは温存したが、海上自衛隊に対抗するのは難しい。

いや、現時点ですでに難しい。

迎え撃つ海上自衛隊の護衛艦は二八隻。こちらも主力艦が勢揃いしていた。

『ひゅうが』型護衛艦『いせ』  
『あたご』型護衛艦『あたご』『あしがら』  
『こんごう』型護衛艦『きりしま』『みょうこう』  
『はたかぜ』型護衛艦『はたかぜ』『しまかぜ』  
『むらさめ』型護衛艦『むらさめ』『はるさめ』『ゆうだち』  
『きりさめ』『いなづま』『さみだれ』『いかづち』『あけぼの』  
ありあけ』

『たかなみ』型護衛艦『たかなみ』『おおなみ』『まきなみ』

さざなみ』『すずなみ』

『あさぎり』型護衛艦『あさぎり』『ゆうぎり』『あまぎり』  
はまぎり』『せとぎり』『さわぎり』『うみぎり』

である。

指揮官は松峰<sup>まつみね</sup> 定輝<sup>さだき</sup>海将。

艦隊決戦の序章は、陸地で始まった。韓国陸軍が、ついに巡航ミサイルの使用を決断したのだ。

目標は糸島半島に展開している、88式地对艦誘導弾である。

さらにこれに艦隊も呼応し、『天龍』巡航ミサイルを発射した。

合計、九六発。

これに対し、海上自衛隊第一艦隊と、地对艦誘導弾を守るために前原市郊外に展開していた、陸上自衛隊高射特科の03式中距離地对空誘導弾が、SAMを発射した。

SLCMとSAMが空中でぶつかり、爆発していく。巡航ミサイルは速度が遅いので、迎撃は弾道弾ほど難しい。

だが、やがて防ぎきれず、突破したSLCMが、次々と88式地对艦誘導弾に命中し、吹き飛ばした。

この戦果を受け、オンは艦隊を前進させた。

しかし、韓崎を越えようとしたところに、生き残った88式地对艦誘導弾が一二発、さらに第一艦隊が次いで90式艦対艦誘導弾を六四発放った。

韓国海軍のRGM-84ハーブーンは射程一三〇キロ、SSM-700K海星艦対艦誘導弾が一五〇キロ。それに対し88式地对艦誘導弾が一五〇キロ、90式艦対艦誘導弾が二〇〇キロであるから、五島列島の北方に展開していた第一艦隊は、完全にアウトレンジ攻撃だった。

さらにそこに航空自衛隊のF-2A/B合計一八機及びF-4EJ改三二機が一〇〇発の93式空対艦誘導弾、そして海上自衛隊のP-3C六〇機が二四〇発の91式空対艦誘導弾を発射した。



低空から侵入する敵機には、対応する間もなく対艦誘導弾を放たれる。航空優勢のない艦隊の悲しさだ。

さらに第一艦隊は六四発の第二波を放つ。

他方向から迫り来る四七〇発の対艦誘導弾。オンは『栗谷李珥』のCICで絶叫した。

「全艦全火器使用許可！ 撃ち落とせえ！！」

速射砲、SAM、RAM、CIWS。あらゆる兵器が弾幕を張り、誘導弾の接近を拒む。ECMが誘導妨害を行う。チャフ・フレアを撒き、欺瞞をする。

戦術状況表示板から対艦誘導弾の群れが、徐々に消えていく。

だが、それ以上の数が、まっしぐらに艦隊目がけて突進してくる。圧倒的な暴力の前に、ついにイージス・システムの対処能力が飽和状態となった。

韓国艦隊が阻止した誘導弾は二七六発に及び、大健闘と言えた。だが阻止出来なかった一九四発は、艦隊を壊滅させるには十分な量だった。

自衛隊の攻撃が終わった時、西水道を西進する韓国海軍艦隊は、『権慄』『乙支文徳』『群山』の三隻だけとなっていた。

すでに日韓両艦隊の距離は一五〇キロを切っている。『権慄』『群山』は海星艦対艦誘導弾を装備しているので、一撃できる。

放たれた海星艦対艦誘導弾は、たった八発。イージス護衛艦五隻を含む二八隻の艦隊に、八発で何ができるというのか。

これ以上近づけば、RGM-84ハープーンの射程に入ってしまう。

次に攻撃を受ければ、三隻は助からないだろう。

臨時に指揮官となっていた『権慄』艦長トウ・ハングオ大佐は、海星艦対艦誘導弾発射後、ただちに北上を命じた。

この攻撃の結果は目に見えていた。第一艦隊は全弾迎撃に成功し、

損害はなかった。

三月一日午前八時五〇分、対馬海峡海戦は、自衛隊の完全勝利に終わった。

韓国海軍は主力艦のほとんどを失い、継戦能力を喪失した。

強いて言うなら、海戦の際に対馬北部に一個旅団戦闘団を増援として輸送できた事が、救いだっただろうか。

## 第二二話 対馬海峡艦隊決戦（後書き）

今朝は久々にパンケーキを焼こうと思ったら、重曹を切らしていたため果たせず韓国海軍に八つ当たり（ウソ）

実際には搭載するSSMの射程が違っているので、一方的なアウトレンジ攻撃になりました。

海自主力が五島列島沖にいたのは、呉では関門海峡を抜けなくてはならないため速やかな展開ができず、舞鶴では主戦場から離れ過ぎ即応性に問題が生じるため、佐世保に集結させていたからです。

『群山』級フリゲートはFFX計画艦です。

艦名が不明だったので、勝手に付けました。

もしご存知の方がいらっしゃれば、ご一報下さい。

あと、一九四発が一九隻を攻撃して三隻残ったのは謎ですが、話の流れがあるので、どうかご勘弁を……（汗）

## 第二三話 対馬奪還

激戦の舞台は陸地に移っていた。

浅茅湾を挟み、火力部隊が砲撃を繰り返したが、双方の砲兵陣地は短時間で巧みに掩蔽されており、互いに決定打となる打撃は与えられなかった。

そして、やはりここで物を言ったのが、航空優勢の有無だった。敵機の心配がない陸上自衛隊は、観測ヘリOH-1ニンジャと無人偵察機を飛ばし、索敵と弾着観測を効率的に行えた。

それらの索敵サイトは、韓国陸軍の砲兵陣地を確実に捉え、99式一五五ミリ自走榴弾砲、FH70一五五ミリ榴弾砲各一個中隊一二門が、韓国陸軍砲兵陣地を粉碎した。

野戦特科はすぐさま標的を敵機動部隊に変更し、弹幕射撃を開始。その間に施設科が韓国軍によって落とされた万関橋を補修していく。

あいにくこの部隊には架橋戦車がないので、時間がかかってしまふ。施設科はその間、まさに雨と散り来る弾丸を身に浴びながら、橋を架けなくていけない。

韓国陸軍は歩兵随伴の一二〇ミリ迫撃砲で、これを阻止しようと試みたが、陸上自衛隊の野戦特科に妨害された。

一時間で架橋は完了し、87式偵察警戒車、偵察用オートバイなど、偵察隊が先陣を切って仮設橋を渡った。その後、試製14式戦車、74式戦車、96式装輪装甲車などの、主力となる機動部隊が続く。この戦いで対馬に投入された陸上自衛隊の機動部隊は、完全に機甲化されている。

やがて、前衛の87式偵察警戒車から、主力に敵情が知らされる。情報に基づき、試製14式戦車及び74式戦車が、国道382号線に沿って前進し、やがて豊玉付近で待ち構えるK2、K1A1各

一個中隊と戦闘を開始した。

K2は第三・五世代、K1A1は一応、第三世代戦車にあたる。対して試製14式戦車は第四世代、74式戦車は第二世代なので、性能でどちらが有利かと言えば、韓国陸軍だろう。

K1A1はもともと、一〇五ミリライフル砲を装備していたK1をベースに、主砲を四四口径一二〇ミリ滑腔砲に、装甲を複合装甲へと交換した物だ。ただでさ小型の車体だったのに、主砲を無理やり四四口径滑腔砲に積み替えたので、携行弾数が四七発から三二発に減少してしまった。

74式戦車は主砲の携行弾数が五〇発だから、継戦能力で勝っているが、しかしK1A1は速度、主砲、装甲の全てで74式戦車を凌駕している。

74式戦車の主砲は一〇五ミリライフル砲、装甲に関しても、一応最大で一二〇ミリあるが、最も薄い部分では二〇ミリしかなく、しかも複合装甲ではない。74式戦車は装甲を削り、小型軽量化し、機動力を重視している。旧陸軍の戦車設計思想と同じなのだ。分が悪い戦いだった。

三〇分の戦闘の末、74式戦車四輛を撃破された陸上自衛隊は、普通科の01式軽対戦車誘導弾の援護を受け、退避した。

韓国陸軍側の損害はK2一輛、K1A1二輛だった。

市ヶ谷防衛省の中央指揮所では、対馬から日本海にかけての戦線の情報が、一元的に管理されている。

野田は対馬で戦線が停滞した事に、冷や汗をかいていた。これがそのまま攻勢の失敗につながるのではないか。

「やはり、ナナヨンでは荷が重かったか。キュウマルを投入すべきだったかな……」

当初は、北海道の第七師団から90式戦車を引き抜いて投入する案もあった。しかし、その五〇・二トンという重量で、果たして対馬で自由な機動ができるのか不安があり、より軽量の試製14式戦

車と74式戦車に決定したのだ。

だが、K1A1は五三・二トン、K2に至っては五五トンもある。韓国陸軍がそれらを運用しているのだから、重量五〇・二トンの90式戦車も、運用できるはずだったのだ。

明らかな判断ミスだった。

難しい顔の野田に、辻が声をかけた。この男はいつでも陽気……と言っか樂觀的だ。

「制海権も制空権も我が軍の物です。持久戦に持ち込めばよろしいでしょう。弾がなければ戦えませんが、連中には、大和魂もなさそうですしな」

最後の冗談に、野田は苦笑した。確かに対馬の韓国陸軍占領部隊は、補給を全く断たれており、持久戦となれば、あらゆる物資が不足してくる。仮に大和魂があっても、役には立つまい。継戦不能となれば、抵抗はなくなるだろう。

実際、徴兵制の韓国軍は士気が極端に高い訳ではなく、むしろ近年は兵役拒否をする若者もいるぐらいで、士気は低下気味である。状況に利なしと判断すれば、鬱陵島守備隊同様、投降してくれるかもしれない。

結局、翌三月二日の、帝国空軍の飛行艦隊による艦砲射撃が決め手となり、韓国陸軍対馬占領部隊は装甲戦力と物資の大半を失い、降伏した。

日本は対馬奪回を宣言し、韓国政府に停戦を打診した。

### 第二三話 対馬奪還（後書き）

一週間ぶりですね。

この間、私はいろいろあつて大変でした。

急にカレーを食べたくなりまして、チャパティを焼こうとしたのですが、誤って燃やしてしまいました。

オマケに、腕に軽い火傷を……。

皆さん、火の取り扱いには、十分注意をしましょう！

さて、前置きはいいとして、今回は陸自を活躍させようとしたのですが……、あえなく失敗しました。

やはり74式では荷が重いと思います。

ちなみに作中で74式戦車の装甲厚を二〇〇～二二〇ミリとしましたが、これは同世代の他国の戦車や、当時の日本戦車の設計思想や運用思想を基に、推測した数値ですから、正確ではありません。

## 第二四話 継戦

「日本は、対馬を奪還したそうだな」

「それどころか、鬱陵島を占領しています」

「形勢逆転か……」

「韓国は海軍、空軍ともに大打撃を受け、早くも停戦を求める声が上がっています。いかがいたしますか？」

「ここで勝手に終わってもらっては困る。取って置きの子備戦力をくれてやる」

「それでは、中央対外連絡部に準備をさせます」

「ああ、頼む。我が国の将来のためにもな」

すでに、時刻は薄暮を迎え、ペクの執務室にも、西日が差し込んでいた。

その光の中で、ペクは呆然としていた。余りの出来事に、頭がまるで働かない。

昨日、自衛隊による大反攻によって、海空軍は脆くも崩壊した。

さらに今日、対馬に展開していた陸軍の二個旅団戦闘団が、降伏した。

陸海空で捕虜となった兵士は裕に一万名を超える。

閣僚は国家安全保障会議の開催を要求し、日本との停戦を求める議員もいる。つい三カ月前までは、日本はいつ降伏するのかを論じていた連中が、喧しく停戦を求めているのだから、ペクには腹立たしく思えた。

だが実際、現状では明らかに韓国は劣勢に立たされている。

対馬、竹島、鬱陵島を失陥し、海軍の主力は壊滅し、真面目な戦力は潜水艦ぐらいしかない。

空軍も戦力を反撃させた。

陸軍は十分な戦力があるが、海空軍が壊滅状態では本土決戦ぐら



いしか使い道はないし、当然そのような事はできない。

半年前、自衛隊はろくな反撃もしないまま、敗北した。それが、今や立場が逆転しているのだ。

今回の反攻に使われた対地誘導弾を使えば、対馬の韓崎からなら、釜山はおろか、大邱広域市の南半分までもが射程に入る。

飛行船もある。

今や日本は好きな時に好きな場所を攻撃でき、さらに言うなら韓国国内に進撃する事さえできてしまうのだ。

半年の間に何があったのか、ペクには全く理解できなかった。

結局、継戦は無理に思えた。自ら喧嘩を売っておいて和を請うとは情けない限りだが、あいにくプライドだけで戦争はできない。

だが、ペクには停戦は認められなかった。

もし停戦できるものなら、戦局がこれ以上悪化しないうちにしたいが、それができない理由が、ペクにはあるのだ。

どうすればいいのか……。

ペクが思わず頭を抱えたその時、ドアをノックする音が響いた。入ってきたのはチョンだった。

合同参謀長の彼も、余りの異常事態に一時は思考が停止していたが、ペクより早く立ち直り、引き上げてきた艦隊や航空隊の再編のため、各参謀長と打ち合わせをしていた。

チョンはペクの前に出ると、持っていたメモを渡した。その表情は、どこか明るい。

一体、どうしたのか。

ペクは渡されたメモに目をやった。

「これは本当なのか!？」

「はい、事実です。この援軍が得られれば、我が軍も体勢を立て直せます」

「大丈夫か? 彼らの装備はだいぶ旧式なのだろう? それに我々が一番欲しい海軍力や空軍力も貧弱だ」

「ですが揚陸艇を多数持つていますし、陸上戦力も十分です。海軍も性能不足ですが、数はあります。我が『浦項』級コルベットと合わせ飽和攻撃をすれば、対馬への再度の上陸も可能でしょう。いざとなれば、弾道弾もあります」

確かに通常戦力は心もとないかもしれないが、数は多いから、飽和攻撃も十分できるだろう。

それに、膨大な特殊兵器や特殊部隊を抱えているから、日本国内に送り込めば、混乱に陥れる事もできる。自衛隊や警察が潜入した工作員を発見して、射殺でもしてくればしめたものだ。野蛮な日本人による差別、虐殺だと世界中にプロパガンダを流せる。韓国では日本人は全て一カ所にまとめ、軍が監視しているが、日本では在日は自由に動けるから民間人と工作員の見分けは大変だろう。

ペクは決断した。

「それでは、すぐに参戦を要請しよう。君は北と共同作戦を取るために、準備をしてくれ」

「分かりました」

敬礼すると、チヨンは執務室をあとにした。

北朝鮮、朝鮮民主主義人民共和国が日本に宣戦布告したのは、翌日、三月三日の事だった。

## 第二四話 継戦（後書き）

こんな展開ってありなのかね……。

北朝鮮が参戦って……。

いや、日本対韓国、北朝鮮という構図は、最初からあったのですが（だからあらずじで韓国と限定せず、周辺国の軍事圧力とした）

しかし伏線も前触れもなく突然というのが、いかにも行き当たりばったりなこの作品を象徴していますね……（^| ^ ;）

序盤の謎の会話の正体については、今のところ皆様のご想像にお任せします。

## 第二五話 北爆指令（前書き）

皆さんお久しぶりです。

しばらく勝手な事情で、更新を中断していましたが、ようやく電波を自由に使える場所に帰還したので更新を再開します。  
お待たせして申し訳ありませんでした。

## 第二五話 北爆指令

反攻作戦が一段落すると、飛行艦隊は各地の航空自衛隊基地に分散し、整備に移った。

その間、大賀は市ヶ谷に赴き、今後にていて野田たち自衛隊首脳と話し合った。

今回の作戦では、備蓄してあった燃料や弾薬をだいぶ消費してしまった。このような戦いを続ければ、三カ月は保たないだろうという試算もある。

一応、国産兵器の弾薬は大車輪で生産を続けているし、輸入も行っている。

だが、工場のラインとは簡単に動かせる物ではない。今の所、消費量が生産量を上回っている。

飛行艦隊も同様で、速射砲を現代の物に換装した駆逐艦はともかく、巡航艦四隻の主砲は艦内の砲弾を全て撃ち尽くし、砲弾の本格的な生産が始まるまでの一カ月は、補給艦の備蓄で保たせねばならない。

何より飛行艦隊は莫大なガソリンを必要とするので、そちらの備蓄も心配だった。

今後、これほど大きな戦闘は無いと思われるが、不安は尽きない。今後の作戦を考える一方で、全員が即刻停戦を期待していた。

残念ながら、希望は叶わなかった。

三月三日、朝鮮総連と中国大使館を通し、北朝鮮の対日宣戦布告が行われた。

それは日本を震撼させた。北朝鮮には大規模な渡洋能力はないが、弾道弾がある。工作員を潜入させたり、あるいは在日朝鮮人を利用したテロが行われる可能性もあった。

テロや破壊工作で日本を混乱させ、NBC兵器を弾道弾によって

全国に撃ち込む。これまで何度も想定され、各種メディアでも繰り返し喧伝されたシナリオが、現実の物になるうとしている。

すでに『西湖』級フリゲート一隻、『羅津』級フリゲート二隻、『沙里院』級コルベット五隻、『清津』級砲艇五二隻の計六〇隻が、韓国南部に向け出撃したと見られる。

『西湖』級、『羅津』級、『沙里院』級は北朝鮮の外洋で運用できる、全ての水上戦力である。『清津』級砲艇は、満載排水量八二トンの小型艇で、なんとその主砲はT-34/85の主砲を流用した物で、戦力外と言って良かった。

その他潜水艦、揚陸艇多数も、母港から姿を消している。

陸軍も戦車師団、機械化歩兵師団各二個が、南進を開始しており、数日中には展開を完了すると思われる。

そして揚陸艇もまた、大規模な動きを見せていた。

「これまでに確認されている上陸用舟艇等は、強襲揚陸艇九六、中型揚陸艇一〇、小型揚陸艇二九、エアクッション揚陸艇一三六、計二七一隻です。実指向可能数は不明ですが、同時着上陸能力は最大で歩兵二個連隊強、また、戦車の同時揚陸能力は二〇輛前後と思われる。」

原木海幕長が資料を読み上げた。

二個連隊強、戦車二〇輛というのは全ての揚陸艇が使用可能の場合で、実指向可能数五割でも、歩兵一個連隊からの兵力が同時上陸可能となる。

野田はそれを聞き、唸る。

「二七一隻か、意外と多いな」

「多くは外洋では使用不能な小型艇ですから、これまで脅威と見なされませんでした。ですが、韓国南部からなら対馬を目指すには十分です」

「弾道弾はどうか？」

野田の質問に、今度は財部空幕長が、衛星写真を見せつつ答える。「情報収集衛星が一时间ほど前に撮影しましたが、すでに燃料注入

の準備を開始しています。おそらく明日か、早ければ今日中には、弾道弾を発射できる可能性もあります」

弾道弾を本気で使うというのなら、航空自衛隊の高射群六個はパトリオット・ミサイルを各地の要所に展開し、海上自衛隊もまた、五隻のイージス護衛艦を対馬海峡から宗谷岬までの各地に展開する必要が生まれる。北朝鮮が弾道弾発射のポーズを見せるだけで、戦力の多くを拘束されてしまう。

それどころか、燃料を注入している時点で実際に発射する腹積もりなのは、目に見えている。ソ連の技術を使用した弾道弾の液体燃料は、多くの場合腐食性が強いいため、燃料を入れた状態で長期間放置する事はできない。おそらく、準備でき次第日本に向け発射するだろう。

「よろしければ」

大賀は立ち上がり、意見を述べた。

「我が艦隊が弾道弾の発射基地を砲撃しますが」

砲弾の残りが心配だが、今ある物を後生大事にとっておいて、生産工場をやられてはたまらない。

「それはありがたいが、大丈夫かね？ 空幕長、護衛は付けられるか？」

財部はすぐにマウスを操作し、スクリーン上の地図に円を描いた。F-15J/DJの作戦行動半径は、制空ミッション時でおよそ一七〇〇キロ。平壤や江界辺りまでなら、護衛に就ける。KC-767空中給油輸送機があれば、朝鮮半島の全てを行動半径に収められるが、あいにく二〇九年の導入が見送られて以来、保有するといふ話はない。

「イーグルなら平壤、江界付近までの護衛は可能です」

「そうか、あまり時間の余裕はない。済まないが、すぐに準備にかかってくれ」

大賀と財部は敬礼すると、すぐに準備のために中央指揮所を出た。

その後、野田は原木と高阪陸幕長に、日本海側の哨戒を厳にする事と、作業員やテロリストに備え、警戒を強めるように指示を出した。

また、現在では完全に自衛隊の指揮下に入ったの感がある海上保安庁も、作業員の侵入を阻止すべく、日本海側の哨戒活動を厳にした。

万一侵入した作業員や、在日の中に隠れているテロリストへの対処には、公安警察の他、超法規的措置として自衛隊の特殊作戦群と警務隊も摘発に加わった。



## 第二六話 迫る脅威

北朝鮮が韓国に荷担したのには、当然、理由がある。

まずは、国内をまとめるためだ。朝鮮民族の本質は人間不信だ。一つの近代国家としてまとまるには、敵を作るしかないのだ。停戦中とはいえ、韓国とは敵対しているとは言えない。つまり、新たな現実の脅威を作るしかない。

「卑劣な日帝は神聖なる半島に、侵略の魔の手を伸ばしている。帝國主義を標榜する卑劣な倭奴を皆殺しとし、半島をその脅威から救うのだ！」

人民をまとめるために、朝鮮中央放送が訴えた。

そしてもう一つの理由が、韓国から見返りに、食料や燃料の支援を取り付ける事である。人民は飢え、人民軍もはやキム体制に対する忠誠を失っており、兵士を飢えさせればクーデターが発生する事は、容易に予想できた。特に困春期を迎えている今、支援がなければ恐らく数万か、下手をすれば十万以上の餓死者が出るだろう。もし支援を断るようなら、援軍として南に展開した部隊を使い韓国を占領し、その富を奪えば良い。

対日戦がたとえ無謀であっても、国家……というよりキム体制を維持するには、戦うしかないのだ。

実際、通常戦力を見ると、朝鮮人民軍の戦力は張り子の虎としか言いようがない。

陸軍の戦車は旧ソ連のT-54/55とT-62が主体で、自衛隊相手には頼りない。原型が半世紀以上も前の戦車で、しかも輸入品なので仕方がないが、旧ソ連で使われていた物の劣化版だ。

対馬では陸上自衛隊の二世主力戦車が苦戦していたが、T-54/55は第一世代、T-62は第一・二世だから、74式戦車にも劣る。

海軍、空軍については話にならない。

空軍はこちらも旧ソ連の旧式機が主力で、未だにMIG-19フアーマーやMIG-21フィットシユベッドが現役なのだ。それどころか、もちろん実際には使えないが、書類上では旧日本軍の零戦や一式戦さえ現役扱いになっているほどだ。航空自衛隊と真面に戦える機体は、一〇〇機もないだろう。

しかもその一〇〇機足らずの機体も、可動率は低水準、パイロットの練度も最低である。

海軍に関しては、北朝鮮海軍は東になってかかっても、『たかみなみ』型護衛艦一隻にも勝てないと言われる。真面な「軍艦」は、フリゲート三隻、コルベット五隻しかないのだ。

五二隻持っている『清津』級砲艇などは、その主砲は五四・六口径八五ミリ戦車砲ZIS-S53、これは第二次世界大戦中に旧ソ連で生産された、T-34/85の主砲をそのまま転用した物なのだ。

通常戦力では、どう鼻屑目に見ても鎧袖一触だろう。

だが、唯一アドバンテージを握れる兵器として、弾道弾がある。核弾頭もある。生物兵器も、化学兵器もだ。ただし核弾頭に関しては半ばはったりで、確実に動くかどうか分からない物が、二発あるに過ぎず、使用はためらわれる。

また、工作船や潜水艦を使い、工作員を送り込んで破壊工作をしても良い。七八隻の潜水艦はどれも旧式で、潜水艇と行った方が適切な小型艦ばかりだが、総動員すれば五〇〇名程度の工作員を送り込めるはずだ。

燃料は、中国が人道支援の一環として融通してくれた物が、少ないながらもある。最近では中国も国内の需要を賄うのに苦労しており、量は少ないが、一回ぐらいは全力出撃可能な量はある。韓国から融通してもらおう事もできるかもしれない。

問題は整備状況で、五割から六割が精一杯だったが、それでも二

〇〇名以上を送り込める。日本国内を混乱させる事もできよう。

キム・ジヨニルの命令があると、すでに準備を終えていた海軍艦艇と陸軍の戦車、歩兵計四個師団は南下を開始した。

しかし日本からすれば喜ばしい事に、北朝鮮は、開戦と同時に弾道弾を撃ち込む事ができなかった。

理由としてまず、いつ参戦の指示があるか、分からなかった。日韓開戦直前に燃料を注入して待機していたが、六日間経っても参戦指示はなかった。使用する燃料は腐食性が強いいため、一週間が経過した時点で、燃料を抜いてしまった。以後、弾道弾本体は空のまま待機していた。

もう一つ、軍首脳部の反対があった。キム・ジヨニルはすぐにも発射したかったが、日本の各地には在日朝鮮人がある。この攻撃は、日本各地の同胞を巻き添えにしかねないという理由で、キム・ジヨニルと軍首脳部の間で押し問答があったのだ。特に本気でNBC兵器を使用するなら、確実に在日朝鮮人にも死者が出る。

結局、最後は軍首脳部が折れて、弾道弾の発射準備に入ったのだが、すでに機を逸していた。この時すでに日本は飛行艦隊一五隻と、護衛のF-15三三機を出撃させていたのだ。

## 第二六話 迫る脅威（後書き）

さて、北朝鮮が参戦した理由に触れました。

今日一〇月一〇日は北朝鮮では朝鮮労働党創設記念日ということで、北朝鮮ネタです。

そして、魔の黒江こと黒江 保彦空将補（最終階級。作中では帝国空軍少佐）に続いて、この作品での二人目の実在の人物が出ました。あの総書記の寿命残余は不明ですが、一応作中では二〇一四年まで生きてます。

## 第二七話 弾道弾灰塵に帰す

弾道弾基地撃滅に出撃した飛行艦隊は一五隻。第一艦隊、第二艦隊の合同である。

『万景』 『福江』 が小破し、『能登』 が発動機の不調、『淡路』 がレーダーの不調を生じたため、大事を取って待機。先の竹島沖海戦で大破した『佐柳』 と合わせ、五隻が艦隊から抜けていた。

「昨日も出撃、今日も出撃。忙しいなあ」

大賀が廊下を歩いていると、どこからか愚痴が聞こえてきた。

仕方がないと思う。

ようやく戦争が終わったと思ったら、突然別世界の自分たちとは全く関係ない戦争に巻き込まれ、否応無しに戦い続けなければならぬのだ。

別の一人が、たしなめる声も聞こえた。

「なあに、これまでの戦いじゃ、一週間地べたに降りられない事もあったんだ。それに比べりゃ」

「はは、ありゃあしんどかったよな」

「文句言ってる暇なんかあったら、早いところ敵を倒そうぜ。そうすりゃ思う存分休めるようになる」

「違うない」

それを聞き、大賀も安心した。この分なら自分は士気も大丈夫だろう。ただ、その「当分」というのがどのくらいなのかは、心配であるが。

それでも、自衛隊よりは良いかもしれない。

平成出身の大賀としては、情けない限りでもあるが、このところ自衛隊では脱柵騒ぎや退職希望者が、急増しているのだ。

これまで、自衛隊は戦わないというのが常識だったので、今まで覚悟がでなかつた者もいるし、そもそも志願理由からして、自衛隊をレスキュー隊か何かと、勘違いしている者も少なくない。

だが自衛隊は基本的に軍隊の代替組織であり、国土防衛が主任務なのだ。人命救助や災害派遣は、副次的な任務だという事を見落としていたのは、そういう隊員の落ち度である。

しかし、だからと言って、職業選択の自由を保証している以上、無理に引き留められないのが、辛いところでもある。

もちろん、説得はするのだが、どうしても言われれば強くは引き留められない。

そして一度許してしまうと、我も我もと連鎖的に広まってしまっから厄介である。

ポジティブに考えれば、覚悟のない隊員が一掃され精鋭化が促進される、となるが、慢性的な人員不足が、さらに深刻化する事も厳然とした事実なのだ。

海上自衛隊からは、帝国空軍の予備要員を貸してほしいという要望まで、上がっている。

艦隊はF-15J三三機と、東朝鮮湾上空で合流した。いよいよ攻撃である。

標的はノドン、テポドン、ムスダンの各発射基地だが、位置が分かっている発射基地は良いとして、トレーラーを使用した移動式の物は、捉えるのは難しいだろう。

今回一度で、どう考えても壊滅させるのは無理だが、しかし日本も北朝鮮を攻撃できる事を示す事はできる。

日本が報復手段を持っていると分かれば、都市部への無差別攻撃を防げるはずだ。

艦隊は舞水端に近づいた。新型弾道弾のコードネームの由来となった場所である。

海岸線に迫った時、MiG-21が二〇機、邀撃にやってきた。

しかし数、練度、性能の全てにおいて日本側が優勢だったため、鎧袖一触で瞬時に殲滅された。

地上に空襲警報が発令され、車輛の弾道弾は掩体壕に、兵員も防空壕に避難したが、サイロの中の弾道弾は動かせないが。

艦隊が上空に達する。

三六門の一四センチ砲が、砲撃を開始した。徹甲弾一八〇発と榴弾三六〇発を撃ち込み、基地を壊滅させた。

重力によって加速した徹甲弾が飛び込み、掩体壕はことごとく破壊され、サイロも大きな被害を受けた。

艦隊はさらに海岸沿いに南西に進んだ。

このまま進めば、その直線上にある都市は咸興、さらにその先は平壤。

この事態に北朝鮮陸軍は、なけなしのMiG-29を二八機差し向けた。

艦隊はこれと利原付近上空で遭遇し、F-15Jと空戦となった。さすがに性能はMiG-21とは雲泥の差で、数もほぼ互角であり、MiG-29は必死でF-15Jに食いついてきた。

だが練度の差は如何ともし難い。北朝鮮のパイロットは、飛行時間三〇時間ほどで、実戦経験もないのだ。

三分とかわからず撃退された。

護衛のF-15Jは燃料と弾薬を消費したため、洪原上空で分かれ、一五隻は咸興を目指した。

咸興の基地を破壊した後も、元山付近まで進出し、ここの発射基地を砲撃した。

このまま西に進めば、平壤まで攻め込めるが、さすがに激しい抵抗が予想されるので、艦隊はここで引き返した。

## 第二七話 弾道弾灰塵に帰す（後書き）

なんだか、中途半端な攻撃になってしまいました。

なにせ手元に北朝鮮の弾道弾に関する情報が乏しかったもので……、  
ご容赦下さい。

ついでに言うと、実際には咸興にあるのは第七軍団司令部で、弾道  
弾の発射基地ではないんですよね。



## 第二八話 発射断念

各地の基地が砲撃されたという報告にキム・ジョンイルは絶叫した。

「発射可能な弾道弾を全て撃ち込め！ 今すぐにだ！」

現在、ノドン、ムスダン、テポドン合わせて五三発が発射可能である。全てを発射すれば、日本にそれなりの被害を与えられるはずだ。

だが、それに反対したのは、軍部だった。

「待つて下さい。そのような事をすれば我が国は反撃を受けます！」

総参謀長ハン・ウォンス次帥が、弾道弾使用を一度中止するように、キム・ジョンイルと掛け合っていた。

「反撃だと？」

「はい、基地を攻撃した飛行船の飛行経路から、おそらく平壤も攻撃圏内に入っている事が予想されます。もし攻撃を強行するならば、報復攻撃を受ける事を覚悟しなくてはなりません」

飛行船による報復爆撃、空挺部隊による大規模な侵攻、在日朝鮮人への報復虐殺……。ハン・ウォンス次帥は、考えうる事態を提示した。

冗談ではなかった。北朝鮮が日本に対しアドバンテージを握っているのは、日本は北朝鮮を攻撃できず、逆に北朝鮮は日本を一方的に攻撃できるという点なのだ。その唯一にして最大のアドバンテージが、いつの間にか消滅しているのだ。

では、どうすれば良いか。

キム・ジョンイルの問いに、ハン・ウォンス次帥は自らの意見を提案する。

「作業員による破壊工作なら、なんとでも言い逃れできます。最悪、南の連中の仕業だと主張する事もできますから。日本への攻撃はそちらを重点的に行い、一方で韓国軍と協力し対馬に対し、攻勢をか

けましよう」

人民軍の通常戦力が張り子の虎である事は、ハン・ウォンス次帥も理解している。それでも、自国内を戦場としないためには、代わりに対馬か朝鮮半島南部を戦場とするしかない。

対馬で大規模な攻勢をかければ、日本の主力もそちらに向くはずだ。兵力の少ない自衛隊には、北朝鮮に攻め込む余裕がなくなるだろう。

「うむ……」

説明を受けたキム・ジョンイルは考える。

弾道弾という兵器は政治的な価値が大きい。早期に消耗するのはもったいないかもしれない。

それに、いざと言う時の切り札として残すべきではないだろうか。この戦いで三カ国の軍力はだいぶ疲弊するだろうが、その時に弾道弾を保持していれば、戦後に大きな発言力を確保できるかもしれない。

「それでは、さらに二個師団ほど援軍を差し向けよう」

だが人民軍総司令部参謀のヘ・キョンチョン上佐が、問題点を指摘した。

「ですが、師団を増派しても、対馬に輸送する手段がありません。使用可能な揚陸艇はすでに総動員していますし、増援は遊兵となります」

「貨物船でも漁船でも、動く船を全て徴用すれば良いだろう！」

無茶な命令ではあるが、最高司令官のキム・ジョンイルと総参謀長のハン・ウォンス次帥がそのつもりなのだから、逆らう事はできない。

一方、直ちに対馬を爆撃すべく、IL-28爆撃機が一五機出撃した。やられっぱなしで泣き寝入りでは、面子が保てない。

一機につき三トン、一五機で四五トンの通常爆弾を搭載しているから、その投射量は馬鹿にできない。

時間的に薄暮攻撃となった。

「敵機接近！」

警報を聞き、志方しかた 肇はじめ二等陸曹は素つ頓狂な声を上げる。

「薄暮爆撃い!？」

志方は高射特科の所属で、81式短距離地对空誘導弾改、通称短SAM改の射手である。

彼の短SAM改は、先ほどようやく揚陸を終えたばかりで、展開していない。

「敵機つて、どこに向かっているんですか!？」

志方は上官に聞いた。

県あがた 三樹男みきお三等陸尉が応える。

「真つすぐ対馬港だ！」

つまり、現在地。

「げえつ、こつちにくんのかよ! ス克蘭ブルは!？」

「もう向かっている! 志方、さつさとこい！」

短SAM改は、最大射高が三〇〇〇メートル。敵機は五〇〇〇メートルから侵入しており、今回の空襲には対処できない。

県、志方たちの仕事は、昨日、施設科が急造しまくった掩体壕に、短SAM改と射撃統制装置を隠す事だ。

「はあ、高射特科のくせに敵機から逃げるとは、情けねえなあ」

「ぼやくな、クローズドアローだって届かないんだ。ショートアローじゃしょうがないだろ」

やがて、壕内に爆音が聞こえてくる。あれは敵爆撃機のも物か、味方邀撃機のも物か。

一五機のIL-28は、中SAMこと03式中距離地对空誘導弾と、F-4EJ改の迎撃を受けた。

投弾に成功したのは、三機。最終的な生還はなし。

県道39号豊玉対馬線が投棄した爆弾の直撃を受け、一部通行不

能となり、また、万関瀬戸仮設橋が至近弾一発を受けたため、点検の必要が生じた。

爆撃隊は対馬港に達する事はなく、県や志方の頭上に爆弾が落ちる事はなかった。

## 第二九話 日本海遊撃戦

三月六日現在、日韓朝の活動は不活発になりつつある。三日の薄暮にIL-28一五機による爆撃があったものの、以後、目立った動きはない。

だがそれは表面の話。文字通りの水面下での動きは、確実に活発化していた。

「ソナーに感、潜水艦です」

ソナー員の報告に、『いそしお』艦長<sup>たなか</sup>田中 淳博<sup>あつひろ</sup>一等海佐は聞いた。

「艦型は分かるか？」

ソナー員はすぐに音紋から艦型を割り出す。

「ユーゴ級です」

ユーゴ級潜水艇は、一九六〇年代から九〇年代にかけて四〇隻ほど建造された、水中排水量一〇トンの小型潜水艇だ。現在二〇隻から二五隻程度が現役にあると言われている。

『いそしお』は現在、海上保安庁と協力し、北朝鮮の工作員やコマンド部隊の侵入を阻止すべく、日本海で哨戒活動に就いている。

ユーゴ級は工作員五名を収容可能とされており、このユーゴ級も、日本本土への工作員浸透を任務としていると思われる。

ならば、やる事は一つだ。

「魚雷戦用意、一番、二番、89式魚雷装填」

「一番、二番、89式魚雷装填」

田中が命じると、すぐに復唱され、発射管室に命令が伝達される。

「目標、距離三〇〇〇、深度三〇」

接近するに従い、細かい情報が伝えられる。

「諸元入力、発射準備」

「目標向かってきます。……射程内入りました」

どうやらユーゴ級は気づいていないらしく、4ノットの速力を保ったまま、直進している。

「一番、発射」

田中の命令で、89式魚雷が飛び出した。

ユーゴ級は水上速力一ノット、水中速力に至っては八ノットと、いわゆる大戦型レベルだ。静粛性など論外と言って良い。

対して、『いそしお』が属する『おやしお』型潜水艦は、通常型潜水艦の分野では、まず間違いなく世界でも屈指の性能を誇る。その静粛性は、まず抜けて高い。実際、この時撃沈されたユーゴ級は、魚雷が発射されるまで、『いそしお』の存在を知らなかったのだ。従って、戦闘は一方的な展開となった。

水中速力八ノットではかわす事もできず、ユーゴ級は一発で撃沈され、木っ端微塵になった。

「爆発音、目標に命中しました」

ソーナー員の報告に、安堵のため息や控えめな歓声が上がった。

ドン亀乗りは昔からこうだ。海中の戦いに求められるのは、今も昔もひたすらの静寂なのだ。大声を上げる事はない。

「まだ終わっていないぞ。絶対に敵潜を見逃すなよ」

田中の指示に全員が、再び任務に没頭した。

海中で静戦が行われている頃、P-3Cが日本海を飛び交っていた。海上保安庁の巡視船には、基本的に対潜兵装は搭載されていないので、北朝鮮の潜水艇を発見しても、撃沈は自衛隊に任せるしかない。巡視船、巡視艇が潜水艇を発見すると、P-3C哨戒機やDDHのSH-60J/K哨戒ヘリが駆けつけ、対潜魚雷や爆雷を投下し、撃沈するのだ。

巡視船や巡視艇はむしろ、海上の工作船の撃沈に成果を上げていた。工作船は安価で脆弱な構造のため、四〇ミリ機関砲や二〇ミリ機関砲でも、急所に連射を加えれば、自爆させるまでもなく簡単に

撃沈できる。

問題は漁船との区別が難しい点で、最初に警告し、停船すれば拿捕、しなければ容赦なく撃沈するという方針が採られた。

巡視船『ふそう』船長の広山ひろやま 謙三けんぞう二等海上保安監は、船橋で海を見ていた。もちろん、暇を持って余している訳ではなく、双眼鏡を手に工作船を探しているのだ。

彼が指揮を執る『ふそう』は今年就役したばかりの、『しきしま』型巡視船の二番艦である。『しきしま』型PLH巡視船は、沿岸警備隊の巡視船としては世界最大で、海上保安庁巡視船として、初めて軍艦構造を持つ船として建造された。武装こそ三五ミリ連装機関砲、二〇ミリ機関砲各二基と、護衛艦と比べると貧弱だが、総トン数は六五〇〇トンに及び、素人目には軍艦と見分けが付かないほど、勇壮な姿をしている。

レーダーも護衛艦の物と同一で、性能は折り紙付きだが、しかし北朝鮮の小型艇にはステルス性を重視した艇もあり、そういう相手には結局、自分の目が頼りだ。

すでに、哨戒三日目だ。昨日、『ふそう』は工作船一隻を撃沈しているが、護衛艦に比べ乗員が少ないため一人ひとりの負担は大きく、戦力の低下が心配された。

広山が乗員の疲労を心配しつつ海を見回していると、何か黒い物が、ちらりと見えた。

一瞬、緊張による勘違いかと思ったが、すぐに別の見張り員も発見を伝えた。

「右舷に不審船！」

「レーダーは？」

「反応ありません！」

警戒していたステルス艇だ。一番厄介な敵である。

「奴はすばしっこいぞ！ 逃がしたら追いつけん、絶対に逃がすな！」

あのステルス艇の速力は、五〇ノットに達すると言われている。  
『ふそう』は最大で二五ノットなので、一度引き離されれば追いつけない。

幸い『ふそう』は、ステルス艇の針路を横切るように進んでいる。  
「三五ミリ機関砲、二〇ミリ機関砲、射撃準備！ 警告を開始！」  
広山の命令に従い、スピーカーから大音量で型通りの警告が発せられた。本来なら警告なしで先制攻撃を加えたいところだが、正当防衛でしか発砲を許されないというのは、自衛隊も海上保安庁も同じなのだ。いつそ、自衛隊同様、国際法に従い先制攻撃をしたいが、上層部は許してくれない。海上保安庁はあくまで沿岸警備隊であり、軍隊ではないというのが、その理由だ。

北朝鮮のステルス艇は、五七ミリ砲を搭載しているというから、危険極まりない。『ふそう』は軍艦構造とは言え、護衛艦より脆弱な作りなのは変わらない。

ステルス艇はネービーブルーを基調とした塗装の、近未来的な容姿の艇だ。一見、スウェーデンの『ヴィスビュー』級コルベットのようでもある。

「不審船加速します！」

突っ込んでくる。

そして艇体の前方が光った。

「不審船発砲！」

キム・ハンウ上尉は、自艇の針路を遮る敵艦に向け、発砲を命じた。

相手は警告で海上保安庁、つまり日本の沿岸警備隊を名乗っている。という事は、あれは駆逐艦ではなく巡視船なのか。

だがどう見ても駆逐艦より大きい。あの凶体で巡視船をなのるなど、ふざけている。

キム・ハンウ上尉はむしろ、自国の海軍が、日本の沿岸警備隊以下の装備しかないという、圧倒的な戦力差に愕然としていた。



五七ミリ砲は海面を抉り、白い水柱を立てた。

「至近弾！ 次は絶対に当てる！」

だが五七ミリ砲が二発目を発砲した瞬間、巡視船もまた、機関砲を放った。火線が伸び、艇体を抉った。

軽量化とステルス化のために、強化プラスチックを採用した艇体だ。防弾性など望むべくもなく、砲弾を受け砕け散った。

しかし、キム・ハンウ上尉は、三五ミリ砲弾に身を引き裂かれる瞬間、巡視船の中央部に閃光が走るのを確かに見た。彼はその結果に満足し、艇と運命を共にした。

## 第二九話 日本海遊撃戦（後書き）

少し遅れましたね。

すみません。

言い訳をするなら、最近始めた新連載に集中していたのと、あとは部屋を片付けていたら懐かしいゲームが出てきまして、「懐かしいな」とか言っていたら、ハマってしまいました。

正確には、ゲームその物ではなく、戦果を基に大本営発表を作成する方にハマっています……。

昨夜も

一、轟沈

大型空母六隻

小型空母一隻

甲級巡洋艦四隻

乙級巡洋艦五隻

駆逐艦一八隻

輸送船二四隻

二、撃破

大型空母一隻

駆逐艦一隻

三、彼我上空にて撃墜せる敵飛行機一五八機

と大戦果で万歳三唱でした。

損害は、未帰還飛行機一三六機とだけ伝えておきます……。

と、序盤から話が逸れていましたが、今回は海上保安庁を活躍させようと思いました。

『しきしま』型巡視船の説明が妙に詳しいのは、半ば宣伝です。

キム・ハンウ上尉の戦力差に対する考えは、ほぼ勘違い。  
正直な話、海上保安庁が海軍と戦って、勝てるとは思えません。  
工作船や漁船ならともかく、軍艦が出てくるとなると……。

### 第三〇話 半島の攻勢

日本海からの工作員やコマンドー部隊の侵入は、今のところ最小限に抑えられている。鬱陵島を占領している事で、哨戒網を朝鮮半島側に大きく前進させられた事も大きい。海上保安庁の活躍も目覚ましかった。現時点で、工作船及び潜水艇、合計三〇隻以上を撃沈、撃破しているのだ。

だが、犠牲め少なくない。昨日ステルス艇との交戦で中破した『ふそつ』を始め、巡視船の喪失は二隻、復帰に一月以上かかる損傷は五隻に及んでいるのだ。

自衛隊首脳が、このままではいかんと悩んでいるところに、さらなる凶報が舞い込んだ。

「釜山の敵が活発化しています！」  
当然、対馬への再度の侵攻が予想された。海上自衛隊はすでに第一艦隊を解散し、通常編成に戻っている。これに備えなくてはならない。

原木が、使用可能な戦力を伝えた。

「第四護衛隊群と舞鶴地方隊は北朝鮮の工作船掃討にかかり切りです。第一一護衛隊、第一二護衛隊も掃討に参加中。他の四個護衛隊も、ローテーションを維持するためには、拘置する必要があります。第一護衛隊群と呉地方隊からも増援が出ていますから、動けるのは第二護衛隊群、第三護衛隊群、横須賀地方隊、佐世保地方隊です」

このうち地方隊で対艦攻撃可能なのは、佐世保のミサイル艇二隻のみで、横須賀地方隊は持っていない。つまり使用可能な艦艇は護衛艦一六隻、ミサイル艇二隻である。敵のコルベット、砲艇や揚陸艇が大挙して押し寄せた場合、対処しきれないかもしれない。

「飛行艦隊で攻撃できないか？」

大賀は申し訳なさそうに言う。

「そうしたいのは山々ですが、弾薬とガソリンが、どうにも……」

この時代の軍用機はジェット燃料を使うし、輸送機や対潜哨戒機練習機、ヘリは形式が違っただけで基本的にガスタービンエンジン、燃料はケロシンやナフサ、簡単に言えば灯油だ。戦車は日本戦車伝統のディーゼルエンジンで、軽油使用。装甲車や高機動車、トラックもディーゼルなので、ガソリンの備蓄はもともと少なく、飛行艦隊で使える分は幾らもない。

巡航ミサイル対策と訓練のために、飛行艦隊はできる限り空中わ遊弋させる方針であり、ガソリンの消費量が馬鹿にならない。

砲弾も補給艦内の備蓄と試作品があるだけで、量産が始まるのは来月からだし、砲身の命数もそろそろ限界である。

恐らく、あと一會戦分あるかないか、だろう。

昭和世界では船団護衛の徹底と短期決戦で、石油不足を乗り切ったが、まさか平成世界でガソリン不足に悩まされるとは思わなかった。

予算や期間を抑えるために、改装を最小限に止めたが、ここで齟齬が生じてしまった。もともと工業高校に通っていたという大賀が、部品をJIS規格で統一してくれていたので、エンジンはそのまま使えると判断したのだが、ガソリンの消費量までは頭が回らなかった。

「弾薬や砲身命数に関しては、『瑞穂』型と『敷島』型の訓練を切り上げて就役を繰り上げるという方法もありますが、その場合どの程度の戦力を発揮できるか分かりませんし、ガソリン不足はどうにもなりません」

「民間から買い上げるという手もあるが、その場合、国内のガソリン価格が高騰するだろう」

野田が懸念する。すでにいつ供給を断たれるかわからないと、価格高騰の兆しが見られるのだ。これにはガソリン税を暫定廃止する方法もあるが、そうすると、道路特定財源の減少分を他で補填する必要が生まれるので、戦争で軍事費が増大し、一方で民間交流の減

少で税収が減っているというのに、国庫の負担がさらに大きくなってしまう。

高阪が言う。

「ですが、さすがにミサイルが頭の上に降ってくるよりはマシと分かるでしょう。十分に説明すれば協力してくれると思います」

「うむ……、それでは、『瑞穂』型戦艦及び『敷島』型戦艦の就役を繰り上げる事とする。ガソリンは民間から買い上げる。総理に発表させよう」

「では、すぐに準備をさせましょう」

大賀は立ち上がると、会議室を退室した。

「それと、上陸を阻止できなかった場合だが……、陸自は大丈夫か？」

野田には不安があった。

先日の攻勢の際、陸上自衛隊の奪還部隊が、戦車戦で韓国陸軍に敗退したのだ。また、航空自衛隊も戦場が予想外に広がってしまった、本来後方にいるはずのAWACSが前線に取り残され、撃墜されてしまった。

ともにこれまで大規模な運用をした経験がないため、齟齬が生じた物と思われた。

もし敵の上陸を許せば、旅団規模、事によると師団規模の会戦となる。再び失敗をしないか、心配だった。

「大丈夫です」

高阪は力強く頷いた。

「北朝鮮の装備は貧弱ですし、今度はこちらにもキユウマルがいますから、十分戦えるはずですよ」

戦闘が小康状態となりつつあった数日で、対馬には奪還部隊に加え、北海道の第一旅団から引き抜いた、第一戦車大隊が展開していたのだ。

今度は負ける気はしなかった。

### 第三一話 第二次対馬海峡航空決戦

果たして韓国、北朝鮮の連合軍は、三月九日について動いた。彼らからすればなけなしの艦隊、航空機を総動員し、一気に西水道を渡海しようとして、釜山及び巨済、鎮海を出撃した。

艦隊は雑多な艦種の寄せ集めだ。駆逐艦一隻、フリゲート四隻、コルベット二八隻、ミサイル艇九隻、魚雷艇九〇隻、砲艇七四隻、哨戒艇六八隻、揚陸艇二三〇隻、合計五〇四隻である。さらにその後ろには、二三四隻にも達する漁船や貨物船の類が続く。大半は廃船となってもおかしくない老朽船だが、甲板上には朝鮮人民軍の兵士が鈴なりになっている。

迎え撃つ海上自衛隊は護衛艦一六隻、ミサイル艇二隻である。兵力差は二八対一。阻止すべき漁船、貨物船を含めれば、四一对一にもなる。西水道は朝鮮半島からの船で埋め尽くされていた。

戦闘はまず、陸地で始まった。

釜山に展開した、北朝鮮陸軍の一七〇ミリ自走加農砲が、上対馬の海岸線を砲撃する。ロケット推進弾の射程は六〇キロほどになり、釜山から上対馬までの距離なら準備射撃に使用できるのだ。

これに対し陸上自衛隊は、八八式地对艦誘導弾を使用し、反撃を行う。

互いに無人偵察機が、目標の搜索と弾着観測を行い、その情報に基づき、撃ち合いとなった。双方の高射特科や高射砲兵、戦闘機が、無人偵察機迎撃を行う。

しかし、一七〇ミリ加農砲の射程は六〇キロと、上対馬の北岸付近しか攻撃できないのに対し、八八式地对艦誘導弾の射程は一五〇キロ、つまり一方的アウトレンジ攻撃を行える。

これには韓国軍の巡航ミサイルが対抗した。

この時、西水道を飛び交った日韓のミサイルは、合計で四〇〇発

以上となった。さらに互いのミサイルを撃墜すべく、大量の地对空ミサイルが発射されたので、この地域は全体が濃霧のような噴煙に包まれてしまった。

結果はほぼ痛み分けだった。互いの砲兵陣地は三〇分と待たず壊滅した。

白く濁る海峡の航空優勢を手に入れるべく、両軍は航空機を進出させた。

旧式機主体で、パイロットも真つすぐ飛ぶのがやっとという北朝鮮空軍はともかく、韓国空軍は手痛い打撃を受けながらも、まだ多くの新鋭機を擁している。

実は現在、韓国空軍の新鋭機は稼働率が九割を超えている。保有数が減つたため、相対的に予備部品の量が潤沢になったのだ。

韓国空軍はF-15K一六機、KF-16C/D七〇機、F-5E/F六四機の合計一五〇機を、北朝鮮空軍がMiG-29SE一二機、MiG-23ML二〇機、MiG-23UB五機、MiG-21四五機、MiG-19七八機、それに地上支援のためにSu-25KA/B二〇機、Su-7BMK一二機の、合計一九二機を繰り出した。両国合計三四二機である。

一方迎え撃つ自衛隊は、F-15J/DJ一九二機、F-2A/B八〇機、F-4EJ改五六機の計三二八機だが、このうちF-2A/BとF-4EJ改は、半数が対艦攻撃のために93式空対艦誘導弾を装備し、直接空戦には参加できない。

しかし、帝国空軍がいる。就役を繰り上げた『瑞穂』型及び『敷島』型の戦艦四隻、損傷艦も全てが修理を終え、巡航艦四隻、駆逐艦一六隻が戦闘に参加した。帝国空軍は空母と補給艦、輸送艦以外は全力出撃である。

四隻の戦艦は韓国空軍、北朝鮮空軍のパイロットの度肝を抜いた。『宇治』型駆逐艦が全長二二メートル、『福江』型が二二〇メートル、『雪岳』型巡航艦で二九〇メートルである。それに対し『敷



島』型は三二二メートル、『瑞穂』型に至っては三四〇メートルにもなる。その巨体と八門ずつ装備する巨砲は、威圧感抜群だった。

韓国空軍のパイロットは飛行艦隊の威力を、以前の航空決戦で知っている。そのため韓国空軍は、飛行艦隊を避け専ら航空自衛隊と戦い、北朝鮮空軍は飛行艦隊へと襲いかかった。彼らは飛行艦隊とは、本格的な戦闘を経験していないのだ。

航空自衛隊と韓国空軍は二六〇対一五〇と、韓国空軍は圧倒的に劣勢で、逃げるのが精一杯だった。

もつと悲惨なのが北朝鮮空軍で、飛行艦隊との戦闘を経験していない彼らは、どう攻撃すればいいのか分からないまま、その濃密な弾幕の中に突っ込み、次々と蜂の巣にされた。

次々と韓国空軍機、北朝鮮空軍機が撃墜されていくその下を、それでも陸上部隊を満載した艦船は、突進し続けた。

海上自衛隊がそれを待ち構えていた。

### 第三一話 第二次対馬海峡航空決戦（後書き）

三四二対二六〇＋、現実の現代戦では、まずあり得ない数同士の戦闘でした。

しかし航空決戦ネタは本作二回目、ホントに我ながら好きだなあ（笑）

### 第三二話 艦隊飽和攻撃（前書き）

だいぶ遅くなりましたが、ようやく更新です。

いやー、最近なんか半島は緊迫してますが、戦争だけは勘弁してほしいですね。

### 第三二話 艦隊飽和攻撃

海での戦いはまず、潜水艦同士の戦闘からだった。

韓国海軍が繰り出した潜水艦は『李従茂』『鄭運』『李純信』『羅大用』『孫元一』『伊奉吉』の六隻だったのに対し、海上自衛隊が投入できた潜水艦戦力は『たかしお』『やえしお』『そうりゅう』『うんりゅう』の四隻だった。

海上自衛隊の潜水艦は、護衛艦への攻撃を阻止しつつ韓国、北朝鮮艦隊を狙い、韓国海軍の潜水艦は逆に海上自衛隊の潜水艦を防ぎつつ、護衛艦を狙う。

航空戦力が上空で死闘を繰り広げる間、海中でも静戦が繰り広げられていたのだ。

戦いの火蓋を切ったのは『鄭運』だった。『鄭運』は『やえしお』を雷撃したが捉えきれず、返り討ちに遭った。

だが直後『やえしお』も『孫元一』によって撃沈された。

だがその間『そうりゅう』が『伊奉吉』を、『うんりゅう』が『李従茂』を撃沈した。

その後、『羅大用』が『そうりゅう』を撃沈した後、『たかしお』に撃沈された。

二隻の潜水艦を撃沈したものの四隻を失った韓国海軍潜水艦部隊は、戦場を離脱した。

しかし、海上自衛隊もまた、この戦場に展開する潜水艦の半数を失ったことから、水中からの攻撃をついに断念した。韓国海軍潜水艦は大きな被害を出しながらも、その目的を達成した。

主戦場は海上に移った。

朝鮮半島からの艦船の大群に、六八機の空自機が、一三六発のASMを放った。それに呼応し、一八隻の護衛艦、ミサイル艇が、七二発のSSMを放つ。本当は海上自衛隊のP-3Cも攻撃に使用し

たかったが、日本海で工作船や潜水艇の排除に携わっており、この戦いには参加できなかった。

韓国海軍に唯一残されたイージス艦『権慄』、そしてフリゲートの『群山』が必死で防ぐが、二〇八発である。先の実戦で大破した『乙支文徳』が抜けているのが痛い。いや、駆逐艦一隻いたところで、役に立たないだろう。

『権慄』『群山』は合計一二発のミサイルを撃墜したところで、ともに撃沈された。

そして誘導障害や故障で脱落した物もあったが、一八〇発以上が、韓国軍、朝鮮人民軍を襲った。この攻撃で北朝鮮の「軍艦」は全滅し、魚雷艇、哨戒艇、砲艇も半数ほどが失われた。

それでも五六〇隻が残っている。

海上自衛隊はさらに第二波の七二発を放ち、六八隻を撃沈した。

しかし、戦没艦が盾になった甲斐はあり、揚陸艇や徴用船はほとんどが無事だった。

また『権慄』『群山』そして『浦項』級コルベットと『狗鷲』級ミサイル艇が被弾する直前に放った、SSM-700K海星艦対艦ミサイル二六発、RGM-84ハープーンミサイル五六発、エグゼセミサイル五六発の計一三八発が、第二、第三護衛隊群と佐世保地方隊を襲った。イージス護衛艦の『きりしま』『みょうこう』以下が迎撃するものの、これにより『たかなみ』型護衛艦『まきなみ』を撃沈、同じく『まきなみ』型護衛艦『おおなみ』『しきなみ』、『あきづき』型護衛艦『てるづき』を大破させた。

が、それでもまだ護衛艦一二隻、ミサイル艇二隻を擁する海上自衛隊は、突進する敵艦隊の阻止にかかる。

海上自衛隊の護衛艦と韓国海軍の『浦項』級コルベットの主砲は、ともにオート・メーラ製で、口径に関わりなく、最大射程約一六キロである。北朝鮮の『清津』級砲艇の八五ミリ戦車砲は、そもそも、そのような遠距離砲戦を想定していない。一二七ミリ速射砲四門、七六ミリ速射砲一〇門対七六ミリ速射砲四門だから、砲戦とな

っても、やはり勝ち目はなかった。

第二、第三護衛隊群と佐世保地方隊は、わずか数分で全艦を撃沈し、揚陸艇、徴用船の排除にかかった。

すでに指呼の間に迫った船団を、四門の一二七ミリ速射砲、一〇門の七六ミリ速射砲が砲撃する。

さらに、航空戦を制した飛行艦隊が加わる。『敷島』『八島』の三五・六センチ砲計一六門と、『瑞穂』『豊葦原』の四一センチ砲計一六門が、密集する雑多な船舶を上方から砲撃した。

密集した老朽船は、近くに巨砲が着弾するだけで、炸裂時に発生する爆風と水圧により、数隻がまとめて破壊される。

だが、四六四隻は多すぎた。そもそも西水道がそれほど広くないこともあり、ついに上陸を防ぐことはできなかった。

### 第三三話 Bloody beach

高速のエアクッション揚陸艇を中心に、北朝鮮の上陸部隊が対馬の土を踏んだ。半年前に韓国軍が上陸した地である。

さらに、予備戦力として拘置されていた韓国軍の揚陸艇も、一挙に渡海し橋頭堡を確立せんと出撃した。

だが、飛行艦隊の四隻の戦艦は砲撃を続け、また、海岸線には塹壕、トーチカ、ダックインした戦車など、自衛隊の防御陣地が待ち構えていた。

三〇力所構築されたトーチカのうち、四力所には一〇五ミリライフル砲が据え付けられていた。先の対馬奪回の際に撃破された74式戦車から取り外した砲である。操作するのは脱出した乗員で、足りない分は機甲科の即応予備から召集した。

北朝鮮陸軍の兵士が揚陸艇から躍り出る。

それをトーチカ、塹壕から伸びる無数の火線が捉え、血祭りに上げる。海岸はさながら一九四四年六月六日のノルマンディー、オマハ・ビーチの様相を呈していた。

北朝鮮陸軍はしばらくは海岸に釘付けだったが、やがて戦死者を踏み越え、前進を開始した。

直後に上陸を開始した韓国陸軍一個連隊は、まだしも理性的な戦闘を展開した。

韓国陸軍、北朝鮮陸軍が上陸地点に選んだのは、三宇田海水浴場だった。上対馬はそのほとんどがリアス式海岸であり、上陸できる場所はそう多くない。

そして三宇田海水浴場は上対馬の北端にあり、輸送が容易な砂浜である。

問題は狭いことだ。三宇田海水浴場は幅二四〇メートルしかなく、師団規模の上陸作戦を演じるには無理があった。

密集した兵士に、すぐそばの林に隠れたトーチカや戦車、迫撃砲が容赦なく打撃を加え、「日本の渚百選」にも選ばれた美しい砂浜は、硝煙と肉片、血糊によって地獄の様相を呈する。

業を煮やした北朝鮮陸軍は戦車を揚陸した。T-62天馬号とT-72暴風号が一〇輛ずつである。

また、韓国陸軍もK2を一〇輛上陸させた。そして戦車を盾に、歩兵部隊も前進を再開した。

韓国陸軍及び北朝鮮陸軍を迎え撃つ陸上自衛隊は第四師団のうち、福岡駐屯地の第一九普通科連隊、第四通信大隊、第四特殊武器防護隊、大村駐屯地の第四施設大隊、第四偵察隊、小倉駐屯地の第四〇普通科連隊、久留米駐屯地の第四特科連隊、第四高射特科大隊からなる一個旅団を臨時に編成し、第一六旅団として防備に充てていた。また機甲戦力として、甚大な被害を受けた第四戦車大隊の代わりに、北海道真駒内駐屯地の第一一旅団から転出した、第一一戦車大隊が第一六旅団に籍を置いている。

だが、上陸可能な海岸と見なされた海水浴場は上対馬に四力所あり、また、北部には上対馬港もあるため、これらの戦力は分散されていた。

それでも、最も上陸の公算が高かった三宇田海水浴場には、第一九普通科連隊と戦車二個中隊が集中していた。

第一一戦車大隊第一中隊の中隊長、原崎<sup>はらさき</sup> 兼雄<sup>かねお</sup>三等陸佐は、砲塔に土魂と描かれた90式戦車の車内から、外を見る。

砂浜を覆い尽くす戦死者を踏み潰し、三〇輛の戦車が上陸してくる。

「撃つて撃つて撃ちまくれえ！ 奴らを海に追い落とせえ！」

一四輛の90式戦車は、次々に敵戦車を撃破していく。林の中でダククインした戦車と、遮蔽物のい砂浜にいる戦車だ。その差は大きい。

しかし数は倍。



T-62は一〇〇〇メートルでも三三〇ミリの装甲を撃ち抜けるし、T-72は北朝鮮国内で生産された改良型と思われる。

K2は韓国の最新鋭戦車であり、先の対馬奪回戦でその実力を示している。

ともすれば押し切られそうだ。

ここで物を言ったのが航空優勢の有無だった。

九州から飛び立ったA-1Sコブラ一六機が、上陸地点に攻撃を開始、また、飛行艦隊からの艦砲射撃も続いていた。

『瑞穂』の主砲は三三斉射目を発射した。発射速度は緩慢だ。

緩慢でも撃てば砲弾は消費される。補給に悩まされるだけに、消費量は気になる。

大賀は聞いた。

「主砲の残弾は？」

すぐに問い合わせが弾火薬庫にいき、返事がとどく。

「『敷島』『八島』はともに五二〇発、本艦及び『豊葦原』は五三六発です」

「む」

すでに三分の一を消費している。

四月までは補給が絶望的である。これ以上の消費は辛い。

地上では海岸の第一九普通科連隊と第一一戦車大隊が突撃を開始、船団に対し第四特科連隊の一五五ミリ榴弾砲も全力で砲撃している。

大賀は決断を下す。

「砲撃続行」

艦長の成田が聞いた。

「よろしいのですか？」

「あの船団を殲滅すれば、敵はもはや上陸作戦は実行不可能になります。そうなれば戦う必要はなくなるのですから、砲弾を残す必要もありませんよ」

誤射を避けるためにも、艦砲射撃の目標は船団に移った。

一五五ミリ榴弾砲に三五・六センチ砲と四一センチ砲が加わり、  
密集した船団を徹底的に砲撃する。

船団は甚大な被害を受け、ついに上陸作戦は失敗した。

### 第三三話 Bloody beach (後書き)

さてお待ちせしました。

ようやく更新です。

対馬で上陸作戦ができそうな海岸を探してたら時間がかかりまして……。

まあ、久々と言うことで話題はいろいろありますが、

まず私事ですが、韓国では若者を中心に韓国軍が自衛隊と戦い、日本を占領するという類いの仮想戦記が流行っているとのこと。

そこで、韓国では日本に対してどこに勝機を見いだしているのか気になる(大体予想は付きますが……)、早速知人に頼んで何冊か取り寄せようとしたのですが、その知人に「お前はハングル読めるのか?」と聞かれ、全く読めないことを思い出し断念したりしていました。

それから74式戦車の主砲L7A1ですが、M735 APFSDSが射距離2000mで318mmのRHAを、93式APFSDSが射距離2000mで410mm以上のRHAを貫徹可能とのこと(93式APFSDSについては推測値)。

そこで考えてみたのですが、韓国軍のK1系列と我が74式戦車が対決したら、互いが被弾=撃破の修羅場と化すかもしれません。

K1は基本的に米M1の廉価版であり、最厚部で本家の400mmより薄い可能性も十分ありえますから。

そうなると技量で勝る陸自が有利かな? とか思っています。

そしてもう一つ、ただでさえ戦力不足だというのにこの上さらに定数削減とは何事か!?

何が財政難ですか!

彼らは『富士』級戦艦を知らないのですかね!?

防衛省が要求した現状維持とて手緩いというに、財務省は本物の馬鹿だ！

そもそも亡国の事態となれば予算もクソもないだろうが！

「国破れて予算あり」なんて正真正銘、真性の阿呆だぞ！！

それから小説の次話の方ですが、執筆速度が芳しくなく次話も遅れそうです、天長節にはなんとか……。

第三四話 停戦へ(前書き)

なんとか間に合った……。

### 第三四話 停戦へ

三月一〇日以降、韓国国内は意気消沈していた。乾坤一擲の攻勢が失敗し、海空軍が壊滅、戦死者は二万名、捕虜も一万名に上る。緒戦は奇襲だったために勝てたが、日本が態勢を整え真つ向から戦うようになると、手も足も出ない。

三月二〇日現在、国内には厭戦気分とともに、政府と軍の怠慢を批判する声が高まりつつあった。

半島側は陸上戦力は残っているが、渡洋作戦をできる状況ではないし、逆に自衛隊にも朝鮮半島に上陸するような能力はない。いや、部隊を送るだけならなんとかなるが、戦力的に真面目な戦いはできない。

北朝鮮は核弾頭や弾道弾を出し惜しみしており、活動は不活発だ。双方が敵を攻撃できないのだ。

結果、日本側が停戦を呼びかけ、半島側がそれを黙殺するという状態が続き、ほとんど千日手である。

ペクは悩んでいた。

昨夜開かれた国家安全保障会議では、閣僚は早急な停戦を求めていた。日本も停戦を呼びかけているのだから、それに応じれば良いと。

もちろん、大量の戦死者と捕虜を出し、海空軍が壊滅した上に鬱陵島を占領下に置かれているのだから、実質的な降伏と言っていいだろう。

ロ・インチェ国防部長官からして、降伏もやむなしと言い出している状態である。

ただ、停戦にしる降伏にしる、日本はそれほど過酷な条件は出さないだろうという観測が、国家安全保障会議の場で大勢を占めていた。

日本は自衛戦争という立場を表明しており、これまでの言動からも、まず何を置いても停戦したいと考えているらしい。

また、北朝鮮が弾道弾や核弾頭を出し惜しみしているのだから、半島側もまだ日本を攻撃する手段を残しているのだ。

さすがに強気に出て余計な被害を出そうとは、考えないだろう。

また、閣僚が停戦を求めるのには、経済的な理由もあつた。

日本人観光客が全く消滅した上に、仁川空港や釜山港を始めとする各地の空港や港湾は、この戦いの影響からハブ空港、ハブ港としての役割を縮小している事が、開戦から半島で、ボディブローのように韓国経済を締め付け始めている。経済界からも、なんとかして欲しいという要望が強かつた。

しかし、ペクには安易に停戦できない理由がある。結論は保留した。

ペクは軍首脳を集め、意見を聞いた。

その結果は、やはり継戦は困難というものだった。

何しろ、艦艇も航空機も作戦可能な数は残っていないのだ。

だが、陸軍だけは違った。陸軍首脳は徹底抗戦の構えを崩さず、

「たとえ海空軍が降伏しようとして陸軍は最後の一兵まで戦う！」と息巻いていた。

北朝鮮から連絡将校として派遣された、人民軍総司令部参謀のヘ・トンテク上佐は、本国は停戦に消極的であると伝えた。そもそも北朝鮮の報道では「人民軍は正義の鉄槌を下し、卑劣な日帝に大打撃を与えた」となっているのだ。

停戦派の海空軍と継戦派の陸軍、北朝鮮軍に別れ、会議は収拾が付かなくなってしまった。

ペクが悩んでいると、チョンが執務室にやってきた。

チョンはこの期に及んでまだ攻勢のための手立てを講じており、戦いを諦めていなかった。

だからそのチョンが口にした台詞は、ペクには一瞬なんの事が、理解できなかった。

「大統領、やはり今は停戦するべきです」

この提案にペクは驚いたが、すぐに聞き返した。

「強硬派の君が停戦を言い出すとは、いったい、どついう風の吹き回しかね？」

「残念ですが、現状では国防すら困難です。北朝鮮を爆撃した事を考えますと、我が国があゝの飛行船に爆撃される可能性も十分にあります。今は停戦し、他日を期するのがよろしいでしょう」

そして何事か耳打ちする。

「なるほど、それはいい。だができるか？」

「陸軍は自分が説得します。それにこうなれば、できるかできないかの問題ではありません。やるか、やらないかです」

「……分かった、どうせこのままでは遅かれ早かれ負けを認めるしかない。準備してくれ」

韓国が日本側に停戦交渉を持ちかけた、翌日の事だった。



### 第三四話 停戦へ（後書き）

天皇陛下万歳！！

今日は天長節、すなわち今上天皇陛下の御誕生日にあらせられます！御慶至極としか申し上げようが御座いません。

拙著は日本の周辺国との武力衝突を題材としておりますが、私は、今上天皇陛下の大御稜威に従い、日本国の千代に八千代に続く平和と繁栄を護り、而して世界進運に貢献する事こそ、日本国民の義務であり、また皇国二六七〇年の悲願であると考えております。

読者諸兄に於かれましても、日本を愛し、今上天皇陛下と、そして日本国を益々盛り立てて戴きたく存じ上げます。

天皇陛下万歳！

日本国万歳！

### 第三五話 停戦交渉

三月二五日、韓国軍のKUHスリオン汎用ヘリが、対馬に姿を見せた。

攻撃のためではない。停戦交渉のためだ。

乗っているのは韓国代表アン・スントク参謀長会議主席、北朝鮮代表ハン・ウォンス総参謀長とその随員である。

地上で待ち受けるのは、日本側代表の野田統合幕僚長たち。

双方にとってこれ以上の継戦に益はないように思えるから、交渉は大して難しくない。

決裂すれば、韓国、北朝鮮からすれば半島全土が航空自衛隊と飛行艦隊の爆撃に晒される。

日本からすれば、やはり弾道弾で全土が攻撃に晒される。

問題は、停戦協定の内容だ。

日本側の要求は、

- 一、開戦以前の日本国が主張する国境線を停戦線とする。
- 二、大韓民国は竹島が日本国領土であることを承認する。
- 三、日本国、大韓民国、朝鮮民主主義人民共和国三カ国の国土等の復興等に必要な費用等は前記三カ国で平等に分担する。
- 四、大韓民国は国防軍が保有する射程二二万ヤード以上の巡航ミサイル等の長距離攻撃兵器を放棄する。ただし通常型ミサイルは対象外とする。
- 五、朝鮮民主主義人民共和国は朝鮮人民軍が保有する核反応兵器、生物兵器、化学兵器、各種弾道弾、爆撃機を含む長距離攻撃兵器を放棄する。
- 六、国家間の賠償金請求権等はいかなる場合もこれを認めない。
- 七、個別補償に関しては交渉の場を別途設けその後の協議によって

決定する。

八、大韓民国及び朝鮮民主主義人民共和国の日本国に対する内政干渉はいかなる場合もこれを認めない。日本国の大韓民国及び朝鮮民主主義人民共和国に対する内政干渉はいかなる場合もこれを認めない。

九、今停戦協定は施行後一カ月以内に各国国民に全文を公表しなくてはならない。

一方、韓国、北朝鮮の提案は、

- 一、大韓民国が主張する国境線を停戦線とする。
- 二、大韓民国領対馬はこれを日本国に割譲する。
- 三、独島の帰属は大韓民国、日本国の交渉の場を別途設けその後の協議によって決定する。
- 四、日本国は自衛隊を鬱陵島よりただちに撤退させる。
- 五、各地域の復興費用についてはその地域における主権国が負担する。ただし日本国自衛隊の攻撃による朝鮮民主主義人民共和国の被害は日本国が復興費用を負担する。大韓民国領鬱陵島の復興費用は日本国が負担する。
- 六、三力国は敵対勢力の捕虜を一カ月以内に解放する。
- 七、賠償金請求権等はこれを認めない。

野田には半島側の提案を認める気はない。そもそも戦況を考えれば、日本側の要求は寛大な内容とも言えるのだ。

野田は言った。

「あなた方の提案のうち、一項から五項は認めません。特に二項については、そもそも対馬は我が国の領土なのですから、同条項の存在そのものが認められません。四項については、こちらも鬱陵島を返還する事についてはやぶさかではありません。が、ただちにといふのは無理です。一週間ほどの猶予をいただきたい。それと六項で

すが、韓国側は捕虜のみならず、日本人全てを解放してもらいます」  
韓国軍の奇襲が始まったこの戦争では、韓国に滞在していた多くの日本人が韓国から脱出する間もなく、拘束されていた。

「しかし……」

アン参謀長会議主席が意見を述べようとするが、野田は一切受け付けない。

「私はあなた方に意見を求めてはいない。あなた方の選択肢は、我々の要求を受け入れるか拒否するか、二つに一つだ」

「しかしこれでは、我々の意見が全く反映されない事になる。こんな交渉は聞いた事がない！」

「勘違いしないでいただきたい。私は停戦交渉をしているのではない。あなた方に、対等の立場で和平する権利を与えているのだ」

「もし、拒否すれば？」

「あなた方には、無条件降伏以外の選択肢はなくなります。対等和平か、無条件降伏か、早いところ選んでいたたたきたい」

「無条件降伏とは、しかしどうして我が国を屈服できると言うのですか？ 根拠ないはったりは見苦しいだけですよ？」

野田は静かに答える。

「手の内を明かすなら、例えば飛行艦隊を投入しての、貴国への艦砲射撃でしょう。半島全土に一六インチ砲弾の雨が無差別に降り注ぐ事になります」

アン参謀長会議主席は慄然とした。飛行艦隊そのものを見た事はないが、その威力は聞いている。空軍の壊滅した韓国軍に阻止は不可能だ。

「しかし、無差別攻撃など、できますか？ 全世界の非難を受けますよ」

「三月一日に我が輸送艇『ゆら』及び輸送艇二号が、民間人移送中に撃沈され、一五〇名以上の民間人が虐殺されました。対馬でもいろいろ悪行を働いたようですが、報復攻撃の口実としては十分でしょう。その場合、貴国は国土が焼け野原になる前に、全世界に恥を

曝す事になります。これまで築き上げてきた富が灰燼に帰す、その覚悟がお在りで？」

そこに、ハン総参謀長が割り込んだ。

「だが、我々にも核兵器とミサイルがあるという事を、忘れないでいただきたい。その時は日本も火の海だ」

野田は平然と答える。

「だからなんですか？ 我が国は核攻撃などとうの昔に経験済みですから、今さら一発や二発、大した事はありませんよ。それに、戦後日本はその焦土の中から復興した事を忘れないでもらいたい。我が国が焦土となっても、二〇年で復興してみせますよ。それともあなた方は、報復攻撃の口実を増やしてくださいるのですか？」

この発言のうち九割以上ははったりだ。

だが、これにより野田が場を支配した。この言葉に、アン参謀長会議主席とハン総参謀長は、反論出来なかつた。

最終的に韓国、北朝鮮は大幅な譲歩を余儀なくされた。

### 第三五話 停戦交渉（後書き）

野田さん、暴走しすぎだよ……。

それはさておいて、だいぶ遅れてしまいました。

すみません。

今回は遅れてしまった言い訳です。

まずはこれ

I J A F ( H )    V o l . X 3 5 - 6

これは私が帝國空軍平成戦記の執筆中原稿に使う符号で、「帝國空軍平成戦記執筆中原稿第三五話修正六回」を示します。

こんな話を書きたい、あんな話も書きたいといろいろ考えているうちに、六度にわたって書き直す羽目になり、遅れてしましまして……。

書き終わった時にはもはやV o l . X 3 5 - 1の原型は留めていませんでした。

あとは正月はのんびりしたかったから……です。

まあ、実際は諸々の用事でかなり忙しかったのですけどね……。

### 第三六話 自責と激励（前書き）

お待たせしました。

今回は大賀と従兵の金田一等兵の会話がメインです。

### 第三六話 自責と激励

昨日の交渉で決定した停戦協定は、臨時国会で早速採択された。衆参両院で全会一致のもと、可決された。

議場は警備の名の下に、陸上自衛隊警務科が固めており、また国会の周辺も普通科が取り囲んでいるので、異論を唱える事はできない。もつとも、自国に有利な協定を拒否するような為政者はいないはずだが。

大賀は、靖国神社境内の鎮霊社に足を運んだ。ここには全世界の戦没者が祀られている。韓国軍や北朝鮮軍の戦死者も祀られているし、正式には靖国神社に祀られない自衛官の戦死者もまた、鎮霊社に在るのだろう。

戦死した自衛官は日本と国民を守るために散華した、英霊であり、すでに大賀にとって戦友だ。これを弔うのは、当然のことだろう。韓国軍や北朝鮮軍の将兵にしても、大賀が部下に、彼らを殺すように命じたのだ。やはり弔わなくてはなるまい。たとえそれが、世界の常識から外れていようと、日本人の常識なのだ。

てを合わせていた大賀に、携帯電話を手にした金田一等兵が駆け寄る。

「閣下」

「どつした？」

「野田統幕長からの連絡です。たった今、韓国と北朝鮮の政府が停戦協定を承認しました」

それを聞き、大賀は意外そうな顔をした。

「そうか、案外すんなりとまとまったな」

何しろ、停戦協定の内容には半島側の要求は全く反映されていないと言って良い。

ましてや反日、蔑日を繰り返す両政府からすれば、あれほど屈辱



的な協定は、普通なら、到底受け入れられる代物ではない。

いや、独裁体制の北朝鮮ならまだしも、韓国は政府が受け入れても、国民が納得しないだろう。独裁国家なら独裁者を納得させればいいが、曲がりなりにも民主主義国家を標榜する国は、国民を納得させなければならぬから、むしろ厄介とも言える。

何はともあれ、これで四月一日からこの協定は効力を発揮する事となる。

「それでは、市ヶ谷に行こうか」

「分かりました」

金田一等兵は車を回してくれた。

市ヶ谷へ向かう道中、

「金田は確か、内地に帰還後に上等兵に昇進予定だったな、下士官昇進試験を受けたいとか？」

車中で、助手席の大賀は金田に話しかけた。

「はい、下士官は士官選抜試験を受けますから、いずれは士官昇任を、と思っっていました。出世すればそれだけ郷里の家族に、楽をさせてやれますからね」

「そうか……」

帝国空軍には陸軍同様、下士官から試験で士官を選抜する制度があった。海軍の特務士官と違い、本物の士官である。陸軍と違うのは、曹長のみならず、下士官勤務二年以上なら全員に受験資格がある天だ。

金田一等兵は本当なら、一九四三年一〇月一日付で上等兵に昇進し、翌年の下士官昇進試験を受験する予定だったのだ。

だが、艦隊ごと平成へ飛ばされてしまったため、それは叶わない。彼は未だに一等兵、四月からは飛行艦隊の航空自衛隊編入に合わせ、上等兵昇進予定を汲み空士長に任官の予定である。

家族という言葉に、大賀は胸が締め付けられる思いがした。

「済まんな……」

助手席の大賀が突然謝罪した事に、金田は驚いた。

「どうしたのですか、突然」

「いや、本来なら平成に呼ばれるのは、俺だけで良かったのかもしれない。お前たちは正真正銘、昭和の人間だからな。関係ない皆を、こんな妙な事に巻き込んで人生を狂わせてしまったのかもしれないと思うとな」

「何を言っているのですか」

金田一等兵は運転しつつ、すかさず言い返した。

「そんな事をいうなら閣下の方こそ、自分たちの、昭和の戦いに巻き込まれて、人生を狂わされているではないですか」

それはそうである。もし、突然昭和三年に飛ばされなければ、日本中にいる平凡な市民の一人として、韓国軍の侵攻に有効な手を打てない政府を、罵る毎日を送るだけだっただろう。

大東亜戦争も、遠い昔に過ぎ去った事象の一つとして、ゲームや架空戦記だったり、議論の素材としてだけの感覚で扱っていたかもしれない。

金田一等兵はなおも続ける。

「正直、閣下に感謝しています。一兵卒の記録はほとんどありませんが、歴史が変わらなければ自分は陸軍か海軍を志願して、死んでいたかもしれません。いまさら命が惜しいとは言いませんが、お陰で生き長らえる事ができたと思うと、いくら感謝しても足りません。それに閣下の例もあります。まだ帰れないと決まった訳じゃありません」

営門で通行証を見せ、市ヶ谷駐屯地の中に入る。

防衛省の庁舎前で大賀を降ろす時、金田一等兵は笑みを浮かべつつ言った。

「閣下は、これからの自分たちの生活の心配だけしてくださいよ。済まないと思うなら、昭和に帰れるかこちらで死ぬか、それまで責任持って自分たちの面倒を見てください」

「ああ、こうなったら野田さんを脅してでも生活費は分捕ってやる。

だから安心しろ」

市ヶ谷駐屯地に赴いたのは、今後の事で野田たちと相談したいからでもあったのだ。大賀は庁舎の中に入っていった。

### 第三六話 自責と激励（後書き）

大変長らくお待たせしました。

どうしても更新を今日に合わせたかったので。

何故なら今日は紀元節だからです！！！！

紀元二六七一年です。

法的には一月一日を以て紀元二六七一年ですが、やはり紀元節を迎えないと実感が湧きません。

庭の梅も花をつけ、まさに「白梅香る紀元節」を迎えたわけです。

私は天壤無窮、そして金甌無欠の我が祖国が、千代に八千代に繁栄を続けることを確信します。

皇国よ常に栄えあれ！

日本国万歳！！

天皇陛下万歳！！！！

### 第三七話 航路解禁

大賀は防衛省庁舎の中の、会議室に入った。

会議室には高阪陸幕長、原木海幕長に、辻もいた。

大賀に続き野田統幕長と財部空幕長が到着し、ようやく全員が揃った。

「まずは、皆もすでに聞いていると思うが、韓国政府と北朝鮮政府が、停戦協定を承認した」

野田は言ったが、その表情は固い。

「問題はこれからだ。私には、このまま済むとは思えない」

野田の言葉に大賀も賛同する。

「韓国の国民は恐らく、停戦協定に納得しないでしょうから、協定の内容が明るみになれば、不満が噴出すると思います。そうになると戦力が回復したならば雪辱戦を挑んでくるでしょう」

一度の勝利で敵国民の戦意や敵愾心を打ち砕くのは、非常に困難だ。

「となると、空中艦隊は抑止力としても、戦火が再燃した場合の戦力としても、これからも必要になります」

財部は飛行艦隊の必要性を強調した。

この春から、飛行艦隊は航空自衛隊に編入される。つまり財部の手駒となる。さらに言えば、航空自衛隊にとって予算獲得の材料となるのだ。

また、大賀にとっても、自分と部下の生活の安定は、平時には至上命題となる。政治的な影響力を保つためにも、戦力の維持に必要な予算は欲しい。

原木が、

「壊滅した海軍の再建となれば、一〇年はかかるでしょう。空軍にしても、機材の調達だけで五年はかかると思った方がよろしいかと思えます」

野田も頷く。

「つまり、敵が戦力を回復させるための五年から一〇年が、我が国にとっても、守りを固める猶予期間でもある訳だな」

となると、大賀にとつてむしろ、戦力の維持が大変である。五年から一〇年となると、普通なら退役するであろう者が、飛行艦隊の中から出てくる。

退役者の生活をどうするかも、問題になる。

戦力維持は平成の自衛官で補えるだろうか。

退役者の生活保障は難しい。自衛官出身と言っても、それ以前の素性が不明なのだ、今の御時世、企業としてはそんな者を雇いたいとは思わないだろう。

大賀が懸念した時だった。

会議室のドアがノックされた。

余程の事がない限り、この面々の会議中は誰も入室しないはずだ。つまり、余程の事なのだろう。

「入れ」

野田が許可すると、統合幕僚監部の者が入ってきた。

「先ほど情報収集衛星が、タンカー、コンテナ船各一隻が釜山港を出港するのを観測しましたので、報告に上がりました」

「タンカーと、コンテナ船？」

以前の攻勢で徴用された民間船は主に北朝鮮の物で、韓国には船舶は大量に残っている。

「タンカーは二五万トンのVLCC、コンテナ船も四〇〇〇TEUのフルコン船です」

重要な事柄ではなさそうだが、停戦協定の発効は四月一日からだ。対馬海峡は自衛隊の手で封鎖されており、現状なら拿捕の対象なのだ。

しかしすでに停戦協定は成立しているから、拿捕すべきか否か、判断を仰ぎたいとの事だった。

「なぜ韓国政府は今このタイミングで交通を許可したんだ？」

「どうも、韓国側から民間船の対馬海峡通航について、問い合わせがありまして、総理が了承したそうです」

「全く、何を考えているんだ。協定の効力発揮は四月からで、今は一応、継戦中だぞ」

とは言っても、自衛隊でも対馬や鬱陵島の戦力は、すでに撤収の準備の準備に入っている。小競り合いもなく、事実上の停戦状態にあるのは、確かだ。

それに韓国もまた、日本と同じく貿易なくして成り立たない国だ。地勢学的に言えば、朝鮮半島は日本列島に包囲される形であり、もし干戈を交えれば、海路を封鎖されてしまう。特に韓国の場合、陸路は北朝鮮が邪魔になるし、空路も危険だ。中国経由では効率が悪い。

海運を一刻も早く再開したいと思うのは、仕方ないだろう。

それでも、何か気になった大賀は聞いた。

「積み荷は？」

「韓国側の話ではコンテナ船は家電製品、タンカーは空荷とのことですよ」

特に、不審な点は思い当たらなかった。韓国製の家電製品は世界中で販売されているし、タンカーが空荷なのは、産油国から原油を輸入するためだろう。

原木が提案した。

「念のために、護衛隊か海保に監視させましょうか？」

野田は一考し、

「いや、あまり物々しすぎても、却って向こうが不審に思うだろう。潜水艦が近くにいれば、それに後を付けさせようか。いなければ海保という事になるが」

「分かりました。確認してみましよう」

「本格的に貿易を再開するのなら、これは第一陣だろう。出港する船は増えるだろうから、注意してくれ」

野田の言う通り、その後夜半にかけてタンカー五隻、コンテナ船一一隻が各地の港湾を出港し、海上自衛隊、海上保安庁はその監視と誘導に大わらわとなった。



### 第三八話 タンカー擱座

三月二六日午後から、対馬海峡は久々の賑わいを見せていた。朝鮮半島で雪隠詰め状態にあったタンカーや貨物船が、停戦協定成立後、世界中に向け大挙して出航したのだ。

「情報では、あの二隻が最後だな？」

巡視船『ふそう』船上で広山二等保安監は、双眼鏡を覗きながら確認した。視界の中で、タンカーとコンテナ船が動いている。

「そのはずです」

『ふそう』は三月六日に、北朝鮮のステルス艇と交戦し、中破していた。

本来ならドックで本格的な修理を施したいのだが、風雲急を告げる状況では、突貫工事とにかく穴だけ塞いで、再び海上に駆り出されていた。

停戦協定成立で、ようやく本格的な修理ができると思いきや、対馬海峡で韓国船の監視を命じられた。有事と自衛隊の介入で、平時に定められた管区はだいぶ曖昧になっているのが、現状だ。戦力はある場所から引つ張ってこいという事だ。

広山が一息着こうと、シートに座った時だった。

赤外線カメラのモニターを見ていた三等保安士が、

「あれ？ これ、変じゃないですか？」

「どうした？」

「あのタンカーって、空荷ですよね？」

「情報ではそのはずだ。中東までいって原油を積むらしいな」

「空荷にしては、喫水が深くないですか？」

「なに？ バラストじゃないのか？」

広山は慌ててモニターを見た。

タンカーや貨物船は、空荷でも復元性や応力強度を保つために、

バラストとして海水を積んでいる。

だがタンカーのバラストタンク容量は普通、積載重量の四割ほどだ。モニターのタンカーは、たしかにバラストにしては喫水が深い。

「あ、タンカー変針します。南東に……」

「なんだって、そりやおかしいぞ。日本にでも向かうのか？」

日本は産油国ではない。というより、西水道を南東に向かったら、その先にあるのは対馬だ。

「おい、問い合わせてみる」

『ふそう』からの問い合わせの返事は、すぐにやってきた。

「推進器の異常だそうですね、対馬の比田勝港への寄港を求めています」

たしかに、現在地なら釜山より比田勝港の方が近い。しかし比田勝港は商港で国際航路もあるが、果たしてVLCGが入れるだろうか。

「だが、寄港ってこの先は……」

三宇田海水浴場、日韓戦争の激戦地だ。

『ふそう』乗員が混乱している間に、タンカーは陸地に近づく。

「警告しろ！ あのままじゃ突っ込むぞ！」

無線と発光信号で危険を伝える。

だがタンカーは警告を無視し、三宇田海岸に突っ込んでいく。

「港まで保たないそうですね。このまま緊急措置として擱座させたいと申し出ていますが」

やがてレーダースクリーンで、陸地の反応とタンカーの反応が重なる。

「あっ、行き足止まりました」

「乗り上げたか!？」

「そのようです、救難信号を出しています」

あまりに急な展開に、『ふそう』の船橋は慌ただしさを増している。

「一隻近づきます、コンテナ船のようです」

あのタンカーと一緒に出航した船だ。救助のためにやってきたらしい。

だが、それがさらなる混乱を招いた。

『ふそう』が救助の準備をしていた時だった。

「大変です、コンテナ船も擱座したようです！」

「なんだって！？ いったい、どうなっているんだ？」

天候は晴天だ。夜間とはいえ、普通なら二重遭難など起こり得ない状況なのだ。

広山にはもはや、理解できない状況だった。

何しろ厄介な問題だ。平時なら、すぐにでも海保が救難活動を開始するのだが、この微妙な情勢の時に対馬で事故だ。

状況は国交省より先に防衛省に伝えられた。

その情勢は、休憩を挟み今後の懸案について議論していた四名の幕僚長と大賀、辻にすぐに入る。

「タンカーとコンテナ船の詳細は？」

野田の問いに、幕僚の一人が資料を提示する。

「タンカーは韓国船籍、二〇万トンVLC『ビクトリー・オーシヤン』号。コンテナ船はパナマ船籍、二八〇〇TEU『フィン・ア・ネプチューン』号です。船主はともに興亜海運社」

本来なら、すぐにでも救助するべきなのだが、そうもいかなる理由があった。

韓国側が、翌朝よりヘリを飛ばして救助すると言い出したのだ。

もちろん、日本の領海内の事故なのだから、日本で責任を持って救助すべきだ。

だが、韓国政府と興亜海運社が、そして何より二隻の乗組員が、なぜか日本の救助活動を拒否している。

たしかに、晴天であるし、二隻とも浜に乗り上げているので、乗組員の命がすぐに危険に晒される事はないだろうし、交戦国の救助を受けたくないというのも、分からない事ではない。

「怪しいですね」

大賀が言う。

「『ふそう』の乗員の話では、タンカーの喫水が妙に深かったそうですが、二隻が同時に遭難というのも妙ではありませんか？」

その点は、野田も感じていた。

「とにかく、明朝から救助を開始する。韓国がへりを出す前に、我が国で救助するぞ。乗組員から何があったのか問い質す」

幸いすぐ近くに『ふそう』がいるし、他にも対馬海峡周辺には海保の巡視船艇が集まっているのだ。へりも使えるから、救助が始まればすぐに片は付くだろう。

### 第三八話 タンカー擱座（後書き）

今日も朝から道路を自衛隊車両が行き交い、空には攻撃ヘリと輸送ヘリが飛び、近所からは『出征兵士を送る歌』が聞こえてくる……。いつもと同じ、まことに平和な日常が始まったわけですが、今日はたとえ祝日とされずとも、日本人として当然祝うべき日であります。

奉祝！

今日は皇太子殿下御誕生日であります！

祝わない人は日本人ではありません、正真正銘の非国民です。

日本国万歳！

皇太子殿下万歳！

### 第三九話 奇襲上陸

翌朝より救助作業を開始。

この方針に従い、『ふそう』は救助作業の準備をしつつ監視を続けていた。

「船長、コンテナ船に動きがありました」

「動き？ どうした？」

「それが、コンテナを海面に動きがありました」

広山が見ると、なるほど『フン・ア・ネプチューン』はクレーンを使い、コンテナを海面に降ろしていた。

「どうしたんだ、一体」

『ふそう』は、救助の他に二隻を監視することも命じられている。もし不審な動きがあれば、夜明けを待たず強制救助の可能性もあった。

さらに、タンカー『ビクトリー・オーシャン』の船体に閃光が走り、一拍遅れて爆発音が海上に轟いた。

「なんだ！？ タンカーが吹っ飛んだ！？」

「船を寄せる！」

一度は平静を取り戻していた船橋が、再び慌ただしくなる。

「タンカーからロケット弾だ！」

誰かが叫んだ。

ロケット弾は北朝鮮の工作船との戦いで、何度も見ているRPG7だ。激しいバック・ブラストは夜目にも確認できた。確かにあれでは簡単に位置が暴露されず。自殺兵器の異名は伊達ではない。

広山が確認できただけでも、三〇発以上は発射されている。

横風に弱いRPG7だが、この飽和攻撃なら関係ないだろう。すぐに随所に着弾した。

「反撃しろ！ これは正当防衛だ！」

広山が叫んだ直後、ロケット弾の一発が、『ふそう』の船橋に飛

び込んで炸裂した。

韓国陸軍ホン・イソン大尉は、『フン・ア・ネプチューン』の船上から、海面を見下ろしていた。

クレーンが四〇フィートコンテナを降ろしていく。

北朝鮮軍のロケット弾に集中攻撃を受けた巡視船は、炎上しながら漂っている。

これでこの遭難の裏は日本にも知れただろう。韓国軍、北朝鮮軍は徴用したタンカーとコンテナ船に兵員を載せ、奇襲上陸を試みたのだ。

そしてその目論見は今のところ成功している。

確かに停戦は確定しているが、協定の発効までまだ五日あるのだ。その五日間は戦争状態が続いている以上、日本を攻撃しても問題ない。五日以内に対馬を占領し、既成事実を作ってしまった方がいいのだ。

『ビクトリー・オーシャン』の舷側を爆破したのは、もちろん韓国軍である。これは迅速に兵員と装備、物資を搬出するためだ。

『ビクトリー・オーシャン』は一九九一年に建造された、シングルハル構造だ。廃線間近ではあるが、その分失っても懐は大して痛まない。

一方『フン・ア・ネプチューン』はクレーンを使い、四〇フィートコンテナを次々と海面に降ろしていく。

四〇フィートコンテナを縦三個、横二個ずつ並べ、段差や隙間に道板をあてがえば、たちまち縦約四八・八メートル、横約五・二メートルの栈橋ができる。

栈橋用コンテナの内部には補強材の他、ヘリウムガスボンベが入っている。自重三・二トンのコンテナを水に浮かべるためだ。

工兵がゴムボートに乗り、コンテナ栈橋を作り、そこに船上のコンテナから出されたK331小型トラック、K131多用途車、分解されたKH179一五五ミリ榴弾砲などが次々降ろされていく。

巡視船攻撃の後、海岸で銃声が響いた。

警備していた自衛隊と、銃撃戦になったのだろう。しばらく断続的に続いていたが、やがて銃声は聞こえなくなった。

ホンも大隊の榴弾砲とともに浜に降りると、組み立ての指揮を執り始めた。可能な限り早く射撃可能にしなければならぬ。

KH179はこの上陸部隊の持つ、唯一の重装備である。あとは、歩兵装備の対戦車ロケット、対空ミサイルと小型の迫撃砲が頼りである。

重機を持ち込めなかったため、兵士たちは人海戦術で、防御陣地を構築する。野戦築城している兵士自身の物ではない。ホンたち砲兵のための物だ。

夜明けまでにKH179を守る陣地を築城するのだ。ホンの大隊は前線に随伴する迫撃砲とともに、突撃する味方を援護するのが仕事だ。

装甲戦力を持たない上陸部隊は、歩兵のみで敵に向け前進する。ようするに、人海戦術部隊だ。大人数でひたすら突撃する、無停止攻撃が基本となる。

そのために『ビクトリー・オーシャン』と『フィン・ア・ネプチューン』には、六万に上る歩兵が鯨詰めとなっていたのだ。

榴弾砲の組み立てが終わった頃には、歩兵たちが内陸部に向け前進していった。



#### 第四〇話 爆撃準備

韓国軍及び北朝鮮軍の対馬上陸が大賀に伝えられたのは、会議が終わり、官舎へ向かう途中だった。

すぐに市ヶ谷にＵターンした。

市ヶ谷の統合幕僚監部は混乱の極みにあった。陸海空幕僚監部は混乱の中で対応しつつある。

その中で、無人偵察機と、交戦した部隊の収集した情報は、自衛隊の劣勢を伝える物ばかりだった。

敵戦力は歩兵約六万、砲兵一個大隊が基幹。すでに進撃を開始しており、現在、上県を制圧しつつある。

陸上自衛隊の主力は停戦合意後、三宇田海水浴場陣地に普通科一個中隊を残し、後方に下がっていた。この中隊は奇襲により殲滅された。

対馬に展開する自衛隊は臨時編成の第一五旅団だが、陸上自衛隊の一個連隊は四乃至五個中隊で編成される。一個中隊が丸ごと失われたのは、大きな痛手だ。

主力は佐須奈から大增にかけ防御陣地の築城を試みたが果たせず、上対馬、上県両町の北部はすでに敵が占領している。

第一五旅団は目下遅滞戦闘を行いつつ、峰へ向け退避中。すでに上島の放棄も視野に入れている。

野田は大賀の入室に気づき、声をかけた。

「君の勤が当たったな。敵の策略だったようだ」

「しかし結局、策に気づけませんでした。それでは意味がありません。それより状況はどうなっていますか？」

大賀の問いに野田は集められた情報を渡した。

「歩兵だけで六個師団級ですか。重装備がほとんどないのが救いですが」

こちらには戦車や装甲車がある。相手は無装甲の徒歩歩兵だ。

だが、六万の歩兵の前に僅かばかりの装甲戦力が、果たしてアドバンテージとなるだろうか。現在は携帯用の対戦車火器の進歩が著しい。歩兵の手で簡単に戦車を撃破できる時代なのだ。

「陸上戦力では勝ち目がない。攻撃ヘリがすでに反撃しているが、敵の携SAMによる抵抗が強く、思うに任せない。それで海自が艦砲射撃を試みている。空自も準備でき次第、全力で爆撃する」

航空自衛隊の使用する主な対地爆弾はMk・82通常爆弾、昔ながらの五〇〇ポンド爆弾だ。加害半径は一五〇メートルほどである。旧日本軍の二五〇キロ爆弾が加害半径一〇〇メートルだから、一応進歩はしている。

五〇〇ポンド爆弾でも、これなら大規模な爆撃を行えば、徒歩歩兵主体の敵に大打撃を与えられよう。

「飛行艦隊は動けるかな？」

「大丈夫です。ただ、戦艦の主砲弾は榴弾がほとんど残っています。徹甲弾のみなので有効な打撃力にはならないでしょう。やるなら低空に進入して、速射砲と機関砲を使用します。それと輸送艦の加農砲は適当な代替兵器が無かったので、そのままです。これも使えます」

「分かった、すぐに準備にかかってくれ。それと、できる事なら空母も使いたいが、大丈夫だろうか？」

「乗員の練度は十分です。搭乗員も、訓練はほぼ終わっています。少々不安な点はありますが、大きな問題はないと思います」

F114JはMk・84通常爆弾を搭載できる。これは二〇〇〇ポンド爆弾だから、大いに期待できる。

対馬に展開する第一五旅団の高森たかもり好信陸将補は上対馬の旅団司令部を放棄し、豊玉に向け退避中だった。だが上島最狭部である上県北部の防衛に失敗した以上、現有戦力での防衛は困難と言わざるを得ない。

そうなると上島を放棄し、司令部は対馬駐屯地まで退く事になる。

正直、警戒を解いていたのは失敗だった。

敵は無停止攻撃であり、そのため遅滞戦闘は困難を極めている。最前線ではすでに、白兵戦に突入している部隊もある。

指揮系統の保全が必要とは言え、真つ先に後方へ下がる事に、高森には後ろめたい気持ちもあった。

また、第一五旅団は対馬奪還及び防衛のための、臨時編成された部隊であり、かつての独立混成旅団に近い性質を持つ。やはり指揮官が真つ先に逃げ出せば、隊員の士気や戦闘効率に悪影響を及ぼす懸念もある。

踏み止まって指揮を執った方がいいのではないか？ という疑問が何度も頭をもたげていた。

西部方面隊の命令が届いたのは、高森以下が新たな司令部を置くことにした、豊玉の塩浦小学校に到着した直後だった。

三時間後に航空自衛隊と帝国空軍が本格的な支援爆撃を行うまで、極力損害を抑えるようにという命令だ。

「よし、飼所から小鹿まで防衛線を敷くぞ！ 全部隊に通達だ、あと三時間持ちこたえろ！」

航空支援開始まで持ちこたえれば、こちらの勝ちだ。

第四〇話 爆撃準備（後書き）

なんか陸自に白兵戦をさせてみたかったので、白兵戦のくだりを入れました。

これは私の趣味です（笑）

## 第四一話 対馬猛爆

飛行艦隊は全力出撃となった。ただし、第二艦隊の空母は『天照』のみ出撃である。『住吉』の艦載機は未だに確保できずにいる。

空母の主力機はF-14Bを基に、日本仕様で改造したF-14Jである。性能的にはF-14BよりF-14Dに近い。電子機器はF-15J/DJやF-4EJ改と同様だから、第一線級の性能を持っている。

二隻分のF-14J搭載数は八〇機、最初に四〇機を発注し、後にさらに四〇機追加発注した。

F-14を八〇機といえば、イランが発注した総数と同じだ。すでに、生産ラインが閉鎖されていた事もあり、さすがに一度に全てというのは無理だった。

それでも『天照』の分、半数の四〇機は使用可能だ。中古の改装機も含め、なんとか一隻分を確保した。ノースロップ・グラマンは、契約を果たしてくれたのだ。

第三次F-Xの時には、F-14も候補に挙がっており、また、FS-X開発時も米国防総省の調査チームは開発費の高騰に、F-14かF-15の輸入を提案していたので、ノースロップ・グラマン社にとって今回は三度目の正直ということになる。

厚木を飛び立った『天照』は空母だ。これから静岡県浜松、次いで福岡県の芦戸に向かい、艦載機を収容する。

一方、第一艦隊は各地から飛び立つ航空自衛隊の戦闘機と合流しつつ、対馬を目指した。

戦艦『瑞穂』、『豊葦原』、『敷島』、『八島』の四隻に巡航艦『雪岳』、『万景』、『春日』、『生駒』、駆逐艦『宇治』型、『福江』型各八隻の二四隻と、これに航空自衛隊のF-15J/DJ一九二機、F-2A/B七八機、F-4EJ改五二機の合計三二二機が加わる。

投射量は航空自衛隊だけでMk・82通常爆弾二五七六発、一二八万八〇〇〇ポンドに上った。

大賀にとって悔しいのは、戦艦の主砲が役に立たないことだ。巡航艦は北朝鮮で、地下壕やバンカーを撃ち抜く必要から、徹甲弾を使用し強装での射撃を強行したため、砲身命数を大幅に擦り減らしてしまっただが、四隻の戦艦は榴弾さえあれば、砲身命数は余裕がある。軟目標の輸送船や徴用船は、減装の榴弾で十分だったためだ。一発撃つごとに強装で消費される砲齡は二、減装では一六分の一で済むため、戦艦と巡航艦でこれだけの差がついてしまった。

『瑞穂』型の主砲が四一センチ、『敷島』型が三五・六センチである事を考えれば、これを使えないのは口惜しい。

やがて、韓国軍及び北朝鮮軍に爆撃が始まった。空自機が五〇〇ポンド爆弾を敵の頭上に降らせる。眼下は敵で埋まっている。F-15J/DJの照準器は爆撃用ではないので目視照準だが、爆撃用の照準などほとんど必要ないという状況だ。

五八四トン以上の爆弾が降り注ぎ、韓国軍、北朝鮮軍は壊滅していく。

さらにそこへ低空から侵入した飛行艦隊が、速射砲や機関砲を掃射し、ガンシップさながらに残存する敵兵を殲滅する。

韓国軍、北朝鮮軍も携SAMで抵抗を試みるが、空自機はフレアを撒きながら高速で通過するため、攻撃へりを相手にする場合とは違いなかなか戦果が上がらない。

なけなしの車輛を破壊し、兵士を木っ端微塵に吹き飛ばす。さらに第一五旅団の砲撃、携SAMが沈黙すると見るや攻撃へりの機銃掃射が加わる。

もはや、虐殺に等しい展開であった。

続いてMk・84二〇〇〇ポンド通常爆弾を抱えたF-14Jが飛来し、爆撃に参加する。

三宇田海岸の砲兵陣地、タンカーとコンテナ船、海岸に集積され

た物資、支援部隊が灰塵に帰し、大打撃を受け指揮系統が混乱した韓国軍、北朝鮮軍に、第一五旅団が逆襲をかける。

戦力の大半と七五〇〇トンに及ぶ物資を失った韓国軍と北朝鮮軍には、継戦は不可能だった。第一五旅団の攻撃は投降兵の収容に等しかった。

東京、市ヶ谷に入ってくる情報は、勝利を確信させる物ばかりだった。

安堵の中で、財部が野田に声をかけた。

「統幕長、気になる事があります」

「気になる事？」

「中国の動きが妙なのです」

財部は二枚の写真を見せた。大連軍港と、航行する空母打撃群である。

「情報収集衛星の撮影した写真ですが、大連の空母が外洋にでています。護衛艦艇を伴った空母打撃群です」

「演習ではないのか？」

原木が答える。

「打撃群の演習に関する事前連絡はありません」

「それと、これも衛星写真ですが、輸送艦、揚陸艇の動きが活発化しています。また、中朝国境にも三個師団が集結しています」

財部は言いながらさらに数枚、写真を差し出した。

「そうか、真打ちのお出ましということか……」

野田は力無く言った。

ソヴィエト崩壊以来、アメリカはモンロー主義の殻に閉じこもっている。そして今回のそれは欧米両大陸のみならず、全世界の紛争に言える事だった。それにより在日米軍の撤退と時を同じくして、在韓米軍も撤退していた。

そして在韓米軍の撤退以来、韓国は中国に急接近していた。伝統の事大主義だ。

中国軍の動きが活発なのは、苦戦する属国を助けるべく、宗主国が動き出したという事だろう。北朝鮮の参戦も、裏で中国が糸を引いているのではないだろうか。

海空自衛隊はこれまでの戦闘で、弾薬を使い果たしてしまった。陸上自衛隊はまだ余力があるが、航空優勢なくして戦えないし、本土決戦など愚の骨頂だ。洋上で攻撃を阻止できなければ、抵抗を諦めるしかない。

野田は勝利が掌からこぼれ落ちるのを、実感した。



## 第四一話 対馬猛爆（後書き）

いろいろあって少々遅くなりました。  
申し訳ありません。

もう少しF-14Jの活躍に細かく触れたかったのですが、長くなりすぎると難なので断念です。

F-14には（正確には『キティ・ホーク』に言うべきかな）個人的にちよつとした思い入れがあったので登場させました。

小さい頃から知っている軍艦や自衛艦、航空機が退役すると、時代の移り変わりを実感して寂しく思います。

## 第四二話 中国軍

飛行艦隊はとりあえず当初の目的を達成した。現在までに生存する韓国兵と北朝鮮兵は、大部分が降伏したと思われる。

これから取るべき行動は、対馬上空に留まり航空優勢を保持し続けるという物が、当初予定だった。

だが、それでは駄目だと大賀は考えていた。

韓国と北朝鮮がここまでの攻撃に踏み切ったのは、継戦意志がある物と考えなければならぬ。それを徹底的に破壊しなければ、停戦はあり得ない。そのためには、戦争継続が自国に大きな被害をもたらすという事を認識させる必要がある。

すなわち、韓国への直接攻撃を行おうというのだ。

すでに専守防衛は放棄している。韓国、北朝鮮の空軍力は壊滅している。すでに北朝鮮に対する艦砲射撃を実行した以上、思いとどまる理由はない。

障害などもはや存在しない。大賀はF-14Jを収容させ、再度の爆装を命じた。

その時、通信員が報告した。

「市ヶ谷の中央指揮所より通信です」

「市ヶ谷から？」

プリントアウトしてもらった通信内容を見て、大賀は急に表情を強ばらせた。

「どうしました？」

成田は聞いた。

それに対し、大賀は無言で紙を渡す。

井下以下の幕僚や艦の首脳が集まり、通信紙を囲むように見た。

「これは……」

中国海軍空母『施琅』の出撃と、中国軍の参戦の可能性を示唆する内容に、一同は凍りついた。

中国軍の参戦、それは日本が、勝利する可能性を喪失することを意味している。

しばしの沈黙の後、やがて成田が叫んだ。

「中共何する物ぞ！」

そして大賀に向き直り、続けた。

「閣下、こうなれば我々も最後の一兵まで戦い抜くのみです！」

幕僚たちも口々に賛同の意見を述べる。

だが大賀が出した指示は、

「『天照』に通達、航空隊爆装やめ、出撃中止」

それに幕僚たちが食いつく。

「なぜですか！？ ご再考を！」

「閣下、断じて戦うべきです！」

井下も意見した。

「やりましょう！ 空自は弾切れでもF-14Jの弾薬は十分な量を輸入してあります。それに戦艦も徹甲弾は残っています、空母を沈めるぐらい簡単でしょう！」

だが大賀は命令を撤回しなかった。

「駄目です。最初の一撃では勝つことができても、次は勝てません。我々だけでは物量に押し潰されて終わりです。日本をこれ以上の危険に晒すわけにはいきません」

たしかに現状、戦争は継続している。しかし韓国も北朝鮮も、もちろん日本も、停戦協定を破棄したわけではない。四月一日まで時間を稼げば、活路を見いだせるかもしれない。

日本に継戦能力が残っていない以上、こうなれば、外交で解決するしかないのだ。

『天照』飛行長の黒江は突然の出撃中止命令に、艦橋に駆け込んだ。

「艦長！ 出撃中止とは、どうなっているのですか！？」

艦長の平塚 四郎大佐は、至って事務的に返した。

「聞いての通りだ。搭乗員は待機するように伝える」

「しかし！」

なおも食い下がる黒江を、第二艦隊司令官の田中が押し止めた。

「状況が変わったのだ。中国軍が動き始めた。これまでの経緯からして、敵側に付く公算が大きいそうだ」

そこにCICから連絡があった。

「艦橋、CIC。レーダーに反応、二。敵味方識別信号に応答なし、アンノウンです！」

「対空戦闘用意！」

平塚は命じたが、『瑞穂』の大賀が戦闘を遮った。

「『瑞穂』より命令、撃ち方待てとのことですよ」

先制攻撃をされても、ミサイルを撃墜することは容易いし、仮に被弾しても、ミサイルの一発やそこらで墜落するほど、飛行軍艦はやわではない。

しかし、迫り来る脅威に手出しできないというのは、なんとももどかしい。

数分後、アンノウンは姿を見せた。

精悍なフォルムの機体だ。双垂直翼が特徴的である。

「イーグル、か？」

しかし韓国空軍はF-15Kを、これまでの戦いですでに全機失っている。

近づくにつれ、シルエットがはっきりしてくる。それは黒江も以前、実物を見た事のある戦闘機だ。

その姿に、黒江は叫んだ。

「フランカーだ！」

姿を見せたのは、スホイイSu-33フランカー、より正確にはSu-33を基に中国で生産された、J-15である。

二機のJ-15は速度を落とし、艦隊の周囲を旋回し始めた。まるで、飛行艦隊を護衛しているようにも見える。

「アンノウンより停戦勧告です。我々と敵軍にも向けて発信してい

ます」

「敵軍にもだと？」

「どういう事なのか。J-15は攻撃してくる気配を見せない。それどころか、日本、韓国、北朝鮮に停戦を勧告しているのだ。」

田中も平塚も黒江も、この状況を理解できなかった。

## 第四二話 中国軍（後書き）

これは本編とは全く関係ないぼやきです。

報道を見るとマスコミは何が何でも現内閣を擁護したいようだが、彼らは馬鹿の一つ覚えのごとく口を開けば「被災者のため復興のため」と言う。

どうやら「復興のためには総理の交代が必要」という発想はない様子。

「急流を渡る途中で、馬を乗り換えるべきではない」という声があったが、老いた駄馬で急流を渡る事ができると考えているのだろうか……。

極端な話、震災復興だけを考えるなら、総理は求心力さえあれば実務能力は関係ない。

その点、求心力が絶望的に欠如した現総理は失格だ。

小泉政権は、とりあえず国民支持率が高い水準だった。

今になって見てみれば、その政策には様々な問題があったが、当時は多くの国民は支持していたし、現在でも一部に待望論があるほどだ。

たとえ最善の政策ではないにしても、求心力があれば前に進めるのだ。

短期的に見た場合、少なくとも求心力の低下した奴が居座り復興を妨げるよりは、求心力があり遠回りでも前に進める方が総理になった方が良いだろう。

長期的に考えればまた別だが……。

どちらにする現総理ではダメだろう。

なぜ自民党が不信任案を出すのか、あえてファンタスティックな読

みをするなら、総理が国会を閉じようとするのはその地位を守りた  
いからであり、あえて不信任案を否決させお墨付きを与えることで  
会期延長を促す、というシナリオを考えてみました。

不信任案は一回の国会で一度しか出せないのも、一度否決すれば総  
理にとってどれだけ野党が騒ごうともはや怖い物はないのだ。

急いで閉会する必要はなくなり、国民も会期延長して二次補正をす  
べきではないかと考えている以上、総理は会期延長を視野に入れる  
のではないだろうか。

復興に必要な二次補正を行うために、自民党総裁が自ら泥を被る。

まあ、こんな妄想、現実にはまずあり得ないとは思いますが（笑）

### 第四三話 北朝鮮侵攻

韓国国防部に、韓国軍首脳部が集まり、今後について協議していた。

対馬占領に失敗した今、チョンにとつても万策尽きたといっている。

「結局、この攻撃も無駄に損害を出したただけだったわけだ。もはや、これまでだな」

陸軍としても戦死、捕虜を合わせ一〇万に上る損害を出しているのだから、さすがに感情的になってさらなる抵抗をしようとは、考えられない。

だが北朝鮮から派遣された、連絡将校のヘ・トンテク上佐は興奮した様子で叫んだ。

「こうなれば停戦など無効だ！ 南鮮には八〇万の連合軍が展開しているのだ、敵が上陸したところで返り討ちにするだけだ！」

北朝鮮はさらなる増援を送っており、たしかに韓国、北朝鮮両軍合わせて八〇万を超える。数の上では、圧倒しているのだ。

だがチョンは冷やかに言った。

「君達の「偉大なる將軍様」が自慢の核兵器を使ってくれるのなら考えてもいいがね」

これにはヘ・トンテク上佐は顔を真っ赤にしたが、しかし反論はできなかった。

「結局、我々は自らの手で決着を着けられなかったが、しかし中国ができてくれた。日本もある程度は疲弊しているはずだから、あとは中国に任せて後方支援に徹しようじゃないか」

チョンの言葉に、その場にいた全員が頷く。中国軍が中朝国境に部隊を展開させ、また空母を出撃させ、北海艦隊の揚陸艦の準備を進めているのは、韓国軍も北朝鮮軍も知っている。

そこに一人の北朝鮮軍兵士がやってきた。ヘ・トンテク上佐のも



とに駆け寄り、何かを耳打ちする。

耳打ちを聞き、へ・トンテク上佐の顔が徐々に青ざめていく。そしてその兵士を連れ、慌てて部屋を出て行った。

韓国軍首脳が彼が慌てた理由を知ったのは、その直後だった。

へ・トンテク上佐を慌てさせた事。それは中国による北朝鮮への侵攻だった。

まず西部では、中国軍主力は新義州から水豊までの約六〇キロの地域で、二個師団が奇襲渡河を開始。国境警備隊を排除しつつ前進している。

そして中央部では、中江付近で一個旅団規模の部隊が鴨緑江を渡河。

さらに東部でも一個師団強が、穩城から訓戒にかけての二〇キロの地域で攻撃を開始した。

甌山の西では、黄海を渡った三個師団が揚陸作戦を展開。

咸興、成川、中和などに大規模な空挺作戦を行っている。さすがに平壤に直接降下はしなかったが、甌山の上陸部隊と成川、中和の空挺部隊は、西、東、南の三方から平壤を包囲する構えを見せ、北方からも二個師団が迫ってくる。

北朝鮮軍は十分な抵抗ができなかった。航空優勢は完全に握られているし、陸上兵力も主力は韓国に展開している。そして日本と戦うために、国内には弾薬も燃料もほとんど残されていない。

さらに言えば、仮に燃料、弾薬があつたところで、真面目な抵抗などできないだろう。

経済力に物を言わせ、怒濤の勢いで近代化を進める中国軍の装備は、日本と張り合う事はあっても、北朝鮮と張り合うような物ではない。

例え同種の兵器でも、一世代違うという事は、現代戦では致命的な戦力差になる。ましてや両軍の装備は二世代、事によると三世代も違うのだ。

だが、なんとか防がなくてはならない。このままでは国家が消滅する。

「致し方あるまい、中国に弾道弾を撃ち込め！」

もはや、出し惜しみしてられない。キム・ジョニルは弾道弾の発射を命じた。

しかしそれに対し、ハン・ウォンス次帥は68式拳銃を突き付けた。本家トカレフTT33同様に安全装置がなく、ダブルアクションのそれは、薬室に弾が装填された状態で引き金を引けば、問答無用で発射される。早撃ちに適した銃だ。

「それはできません。今は我が軍の戦力保全が最優先です」

「なんだと、国家が滅びて戦力の保全も何もあるか！」

「あなたはクラウゼヴィッツをご存知ないようですね」

「なに？」

ハン・ウォンス次帥は説明を始めた。

「つまり「国家が壊乱状態にある時、国軍の存立は国家の存立に優先する」。今がまさにその「国家の壊乱状態」でしょう。これが軍国プロイセンの理論であるところも、まことに我が国に相応しい」

「貴様、裏切る気か！？」「裏切ったのはあなたでしょう！」

ハン・ウォンス次帥の叫び声が、人民軍総司令部に響いた。

「あなたの命令に従って祖国が手に入れた物はなんですか！？ 飢餓と貧困しかない！ この上日本と戦争を始め、今また中国と開戦するなど正気の沙汰ではない！ 自らの保身以外に能がないあなたのために、なぜ我々が犠牲にならなくてはならないのだ！？」

ハン・ウォンス次帥は引き金に指をかけた。

しかし、それでもキム・ジョニルを庇う者は一人としていなかった。

一発の銃弾で全軍の指揮権を掌握したハン・ウォンス次帥は、次々と指示を出し始めた。

「平安北海道方面は雲田まで退くように。咸鏡北道方面は羅津を放棄

して清津、富潤、茂山を抵抗線とする。それと咸鏡南道の部隊は咸興を包囲するように。南鮮の部隊は直ちに転進して黄海北道、黄海南道、江原道を固める。ただし全戦線に、中国軍が攻撃するような抵抗せずに投降するように徹底させる」

あとは自分たちだ。

05式一五五ミリ自走榴弾砲の射程は、ロケット補助推進弾では最大で五〇キロを越える。つまり、甑山西方に上陸した部隊がこれを装備しているのなら、すでに平壤は射程内に入っている。

「我々は速やかに平壤を放棄し妙香山脈に拠る。北方の退路を閉じられる前に脱出するぞ」

ハン・ウォンス次帥たちは、慌ただしく脱出の準備を開始した。

今は体面より何より、戦力保全だ。たとえ降伏するにしても、戦力があるか否かで、その後の展開は全く違うのだ。降伏に当たって発言力を維持するためにも、戦力が必要だった。

### 第四三話 北朝鮮侵攻（後書き）

中国による突然の北朝鮮侵攻です。

大混乱ですね、はい。

もちろん中国の行動について、しっかり理由はあります。

そちらは次回明らかになる予定ですから、お待ちください。

#### 第四四話 真相

中国軍が介入し、停戦勧告を出した事と北朝鮮に侵攻した事に対し、ペクは抗議のために中国大使館に向かった。

怒りを露わにしながら中国大使館に乗り込んだペクだが、秦<sup>チン</sup>連<sup>リエン</sup>豊<sup>フォン</sup>大使は、まるで予想していたかのように、至って冷静に対応していた。

ペクが激怒しているのは、停戦勧告の内容だ。そこには対馬も竹島も日本領とする事が条件として存在した。

「どういう事ですかこれは！？ 我々には対馬が割譲されるという話だったはず！ にも関わらず対馬はおるか独島まで日本に帰属とは、説明を！」

「対馬が割譲される」とは、日韓開戦に先立ちペクが中国と結んだ密約だ。そう、ペクは対日開戦にあたり、密約を結んでいた。それは中国が対馬の韓国領編入と南北統一を支援する代わりに、韓国が日本の軍勢力を殺ぐという内容の物である。

「韓国領の対馬」を取り戻し、南北統一を成し遂げ、中国の支援と日本からの賠償、そして北朝鮮の安価な労働力で、韓国はさらなる経済発展を遂げる……。ペクは民族の英雄として讃えられるはずだった。

秦大使は言った。

「何を言っているのですか？ まさかあなたは、あの程度で日本の軍勢力を殺ぐ事ができたと、本気で思っているのですか？」

二度の艦隊決戦、航空決戦で海軍、空軍が壊滅し、陸軍も大きな犠牲を出しながらも結局、対馬を奪えない。緒戦こそ奇襲で打撃を与えたが、その後の戦いでは大きな打撃を与える事はできなかった。秦はまるで愛想を尽かしたように言う。

「もついい、あとは我が国が処置するから、あなた方は黙って見ていればいい。せっかく増援として北朝鮮を参戦させた我が中央対外

連絡部の努力を、あなた方は無駄にしてくれた。つくづく役に立たない民族だ。役立たずには、発言権などありませんよ。あとは我が国と日本の問題ですから、黙って従っていけばよろしい」

平然と、澱みなく言い切った秦大使の態度に、ペクは中国には始めから、密約を守る意志がなかった事を悟った。

全ては中国が、極東の覇権を手に入れるために仕組んだ茶番だったのだ。

米軍が撤退してから、極東は覇権の空白地帯だった。そして経済力や軍事力を見れば、中国と覇を争うのは日本しかない。

しかし、正面切つて日本と戦えば、中国も大きな打撃を受ける事が予想された。であるから、まず自国の国力を温存しつつ日本を疲弊させる必要があった。

そこで浮かび上がったのが、韓国である。盲目的な反日国家で、かつ中国に事大するこの属国を使わない手はなかった。伝統の以夷制夷である。

「しかし、なぜ北韓を奪うのですか!？」

ペクの質問に秦大使は笑いながら答えた。

「馬鹿を言わないでくださいよ。まさか我が国が北朝鮮をあなた方に明け渡すほど、お人好しだと思っていたのですか?」

核兵器や弾道弾の技術が韓国の手に渡る事になれば、どうなるか。極東における中国の覇権の脅威になるだけだ。みすみすそれを許す訳がない。

「だからといって占領する事はないでしょう!」

「そうはいきません。あんな危険な国をこれ以上野放しにするなど危なっかしいじゃないですか」

北朝鮮は、はっきり言つて中国にとって危険な存在である。先軍政治を標榜し核武装した貧困国が、自国の首都のすぐ側にあるのだ。しかも日本のように、海という天然の要害に守られているわけではない。川を挟んで地続きなのだ。

たしかに、中国の経済事情を考えれば、新たに貧困地域を背負う

のはリスクだ。しかし独立させていても、暴走を防ぐために支援をしなくてはならない。どうせ重荷でしかないなら、自国領に取り込んで完全に支配下に収めた方がまだましである。

むしろ、安価な労働力が手に入るのは魅力的でもある。経済発展の著しい中国では安い賃金でも、北朝鮮ではそれなりの大金だ。中国製品は一般に安いのが魅力だが、北朝鮮の庶民にとっては、それも手が出ない「高級品」である。しかしこれからは賃金の向上で、中国製品をさばく新たな市場にもなり得る。

咸興、清津、羅津、南浦といった港は東北部で産出された資源や、それを加工した製品を輸出する上で重要な役割を果たすだろう。また日本海に海軍の拠点を持つ事ができれば、極東ロシアに対する圧力もかけ易い。

「不満があるのなら、我が国は一戦交えても構わないという方針ですが、我が国と日本を相手に貴国がどこまで粘れるか、見物ですね」それは秦大使による勝利宣言だった。

#### 第四話 真相（後書き）

この流れ……、なんか納得できない。

「実は中国が全ての黒幕だった」とか、いきなり言われてもなあ…

…。  
嫌いだなあ、こういうヤツ。



#### 第四五話 カウンター・クーデター

中国が日本に提案した内容は、対馬を非武装地帯とする事、沖縄に中国空軍基地を設ける事、横須賀もしくは佐世保に中国海軍空母打撃群の寄港地設ける事、この三つだった。

今後の対応について協議するため、大賀は市ヶ谷に向かうことになった。

艦隊は厚木に向かい補給、その間に小型機で市ヶ谷に赴く。

「連絡機の準備を」

米海軍飛行船『アクロン』『メイコン』に搭載されていた戦闘機F9Cスパローホークを参考に、練習機を改造した九九式軽連絡機である。地上で離着陸するには、二〇〇メートルほどの滑走路があれば十分だ。市ヶ谷駐屯地内の直線道路でこと足りるので、移動に重宝している。

大賀が中央指揮所に入ると、陸海空の幕僚長はすでに集まっていたが、首相以下政府閣僚と野田がいない。

「統幕長はどうしました？」

大賀が聞くと、財部空幕長が答える。

「首相官邸に係閣僚を呼びに言ったよ。連絡がつかないそうだ」

「人をやれば済む話ですが」

高阪陸幕長が苦笑しながら言う。

「あの人は昔からこうだよ。君たちが現れた時も、勝手にどんどん乗り込んでいったからな」

「そういえば、クーデターの時も真っ先に首相官邸に突っ込んだな」と原木海幕長。

「まあ、海自としては指揮官先頭、大いに結構ですが」

そこに陸曹がやってきた。戸惑いながら、高阪にメモを渡す。

「野田統幕長から命令ですが……」

メモを見て、高阪は驚いた。

「海幕長、空幕長、いいか？」

幕僚長二人を呼び、メモを見せる。メモを見た原木と財部も、やはり驚愕した。

「どうしましたか？」

大賀の質問に、財部が躊躇いがちに言った。

「統幕長からの命令だ。君たち空軍の者を全員拘束するように、と大賀はメモを受け取った。確かにそこには野田の名で、大賀たちを拘束するように命令が書かれている。

「これは、どういうことですか？」

「我々にも分かんらん。統幕長がこんな命令を出すとは思えない」

高阪が言うが、原木が反論する。

「しかし、現に命令が存在するぞ」

だからと言って、この命令は異常だった。なぜ突然このような命令が発せられたのか、理解に苦しむ。日本の防衛に協力してくれた空軍を捕らえる理由など、どこにもない。

財部が口を開く。

「自衛官としては、命令に従うしかないが……」

そこで一度言葉を区切り、陸曹の方を見た。

「この命令は誤りではないか、確認して欲しい。正規のルートでな高阪も同意する。」

「そうだな、間違いだったら大変だ。確かめてくれ」

原木も苦笑しながら言う。

「正規ルートでは時間がかかるが、仕方ないな。なにしろ自衛隊もお役所仕事だからあ」

なんともわざとらしい言葉である。大賀に、時間を稼ぐから逃げろと言っているのだ。

三人は確認のため陸曹につき、席を立った。

今、大賀の周りには誰もいない。静かに立ち上がり、中央指揮所を飛び出すと一目散に地上に向け、駆け出した。

防衛省庁舎A棟一階から外に出ると、九九式軽連絡機に向かって

走る。

「エンジン回せえ！」

大賀が大声で叫ぶと、異変に気づいたか、待機していたパイロットが、すぐにエンジンを始動する。

近寄った大賀が車輪止めを外し、後席に駆け上がる。背広の上に飛行服を重ね着し、その間に軽い暖機運転を済ませた軽連絡機が動きだした。

しかし、73式中トラックが行く手を塞ぐ。後方にも道路を塞ぐようにトラックが停車する。

トラックから降りた隊員の黒い腕章を見て、大賀は叫んだ。

「警務隊か！」

時間稼ぎは保たなかったらしい。警務隊の隊員が二人を拘束しようとする。

だがそこに、軽連絡機のものとは違うエンジン音が混じり、やがてそれは大きくなる。さらに金属同士が擦れる高い音が重なる。

「これは……」

大賀とパイロット、さらに警務隊の面々は、異音に顔を見合わせた。

やがて、音の正体が建物の影から姿を見せた。

「二式重戦車！」

一輛ではない。縦隊を組んで次々と現れる。合計八輛。

その場の全員がその迫力に圧倒されていると、先頭車のキューポラから、辻が姿を見せた。

「おう、大賀殿ではないですか！ 早く乗ってください！」

すぐに大賀とパイロットがよじ登る。

一拍置いて警務隊が動くが、さすがに素手で戦車隊に立ち向かうのは無理があった。

大賀たちは命令を確認している間に逃走した。

その報告を聞いた時、野田は思わず口元を緩ませた。突然の常軌

を逸した命令だ、混乱して当然である。

野田は現在、総理大臣官邸警備隊に拘束されている。彼が首相官邸に着いた頃には、官邸警備隊はすでに官邸を制圧していた。首相官邸を監視している部隊の中に、裏切り者がいたのだ。

自衛隊は概ね野田たちの行動に賛成していたが、やはり疑問視する者もいたのだ。今まで表立った行動はなかったが、ついに動き出したのだ。

首相たちは野田の名で命令を発し、空軍を拘束しようとした。

これは首相たちによるカウンター・クーデターである。

当初は官邸警備隊が首相官邸を制圧した後、警視庁SATを防衛省に空挺突入させ、同時に機動隊を地上から市ヶ谷駐屯地に突入させる手はずだった。思いがけず野田がやってきたので拘束し、そのまま指揮系統を掌握した。

「厚木でも空軍将兵の拘束に失敗しました。」

現場は明らかに、突然の指示に戸惑っている。厚木基地の空軍将兵は現在、飛行艦隊の各艦に立て籠もっている。

首相は舌打ちした。

「逃げたらどうするんだ、逃げたら!？」

首相の側にいた徳田三等陸尉が答えた。

「その点は心配ないかと思えます。逃げるのならとつくに逃げてください。おそらく市ヶ谷駐屯地から逃げた戦車隊を收容するまで、動かないと思います」

野田はその様子を忌々しげに見ていた。官邸の監視に就いていた徳田が、官邸警備隊を引き入れた張本人なのだ。

「ではどうするんだ？」

「戦車隊は足止めして分断、各個撃破するべきでしょう。あれだけの図体では通れる場所は限られます。待ち伏せも可能と思われず。飛行艦隊はその間に警務隊を突入させ、武装解除しましょう」

厚木基地には横須賀警務隊の分遣隊しかいないから、周囲の施設

から人員を集める必要がある。

そこに、二式重戦車が市ヶ谷駐屯地から市外に脱出したという報告が入った。

#### 第四五話 カウンター・クーデター（後書き）

だいぶ遅くなりました。申し訳ありません。

しかし、かなり無理やりな内容ですね……。

相変わらず読者として納得できない展開です。

そもそもなんで二式重戦車が市ヶ谷に置いてあったんだろう？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8122j/>

---

帝國空軍平成戦記

2011年9月30日21時24分発行